

556-218

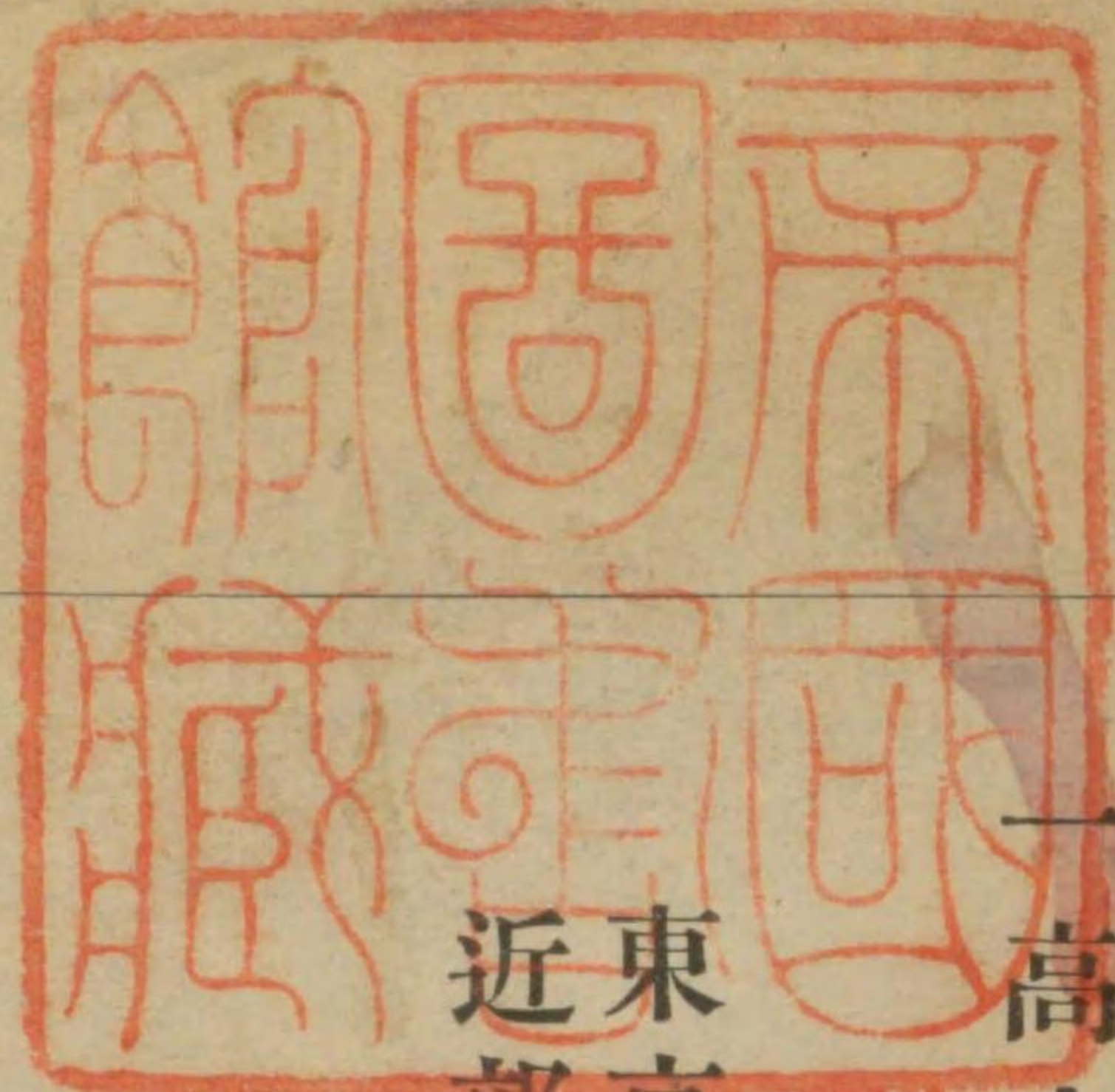


1200501510938

6
218



27.8.1



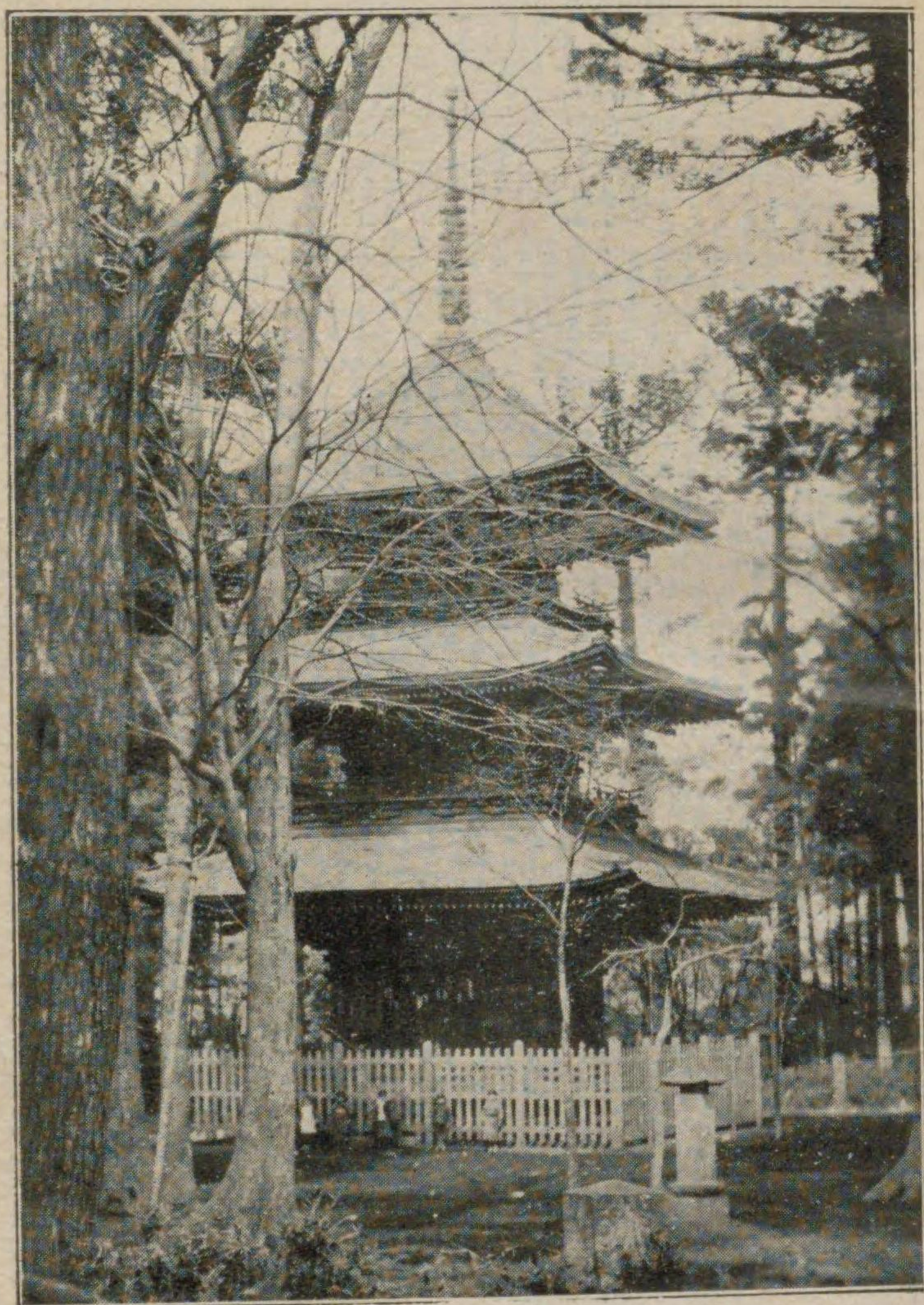
一高史談會編

東京近郊

史蹟案内

東京古今書院發行

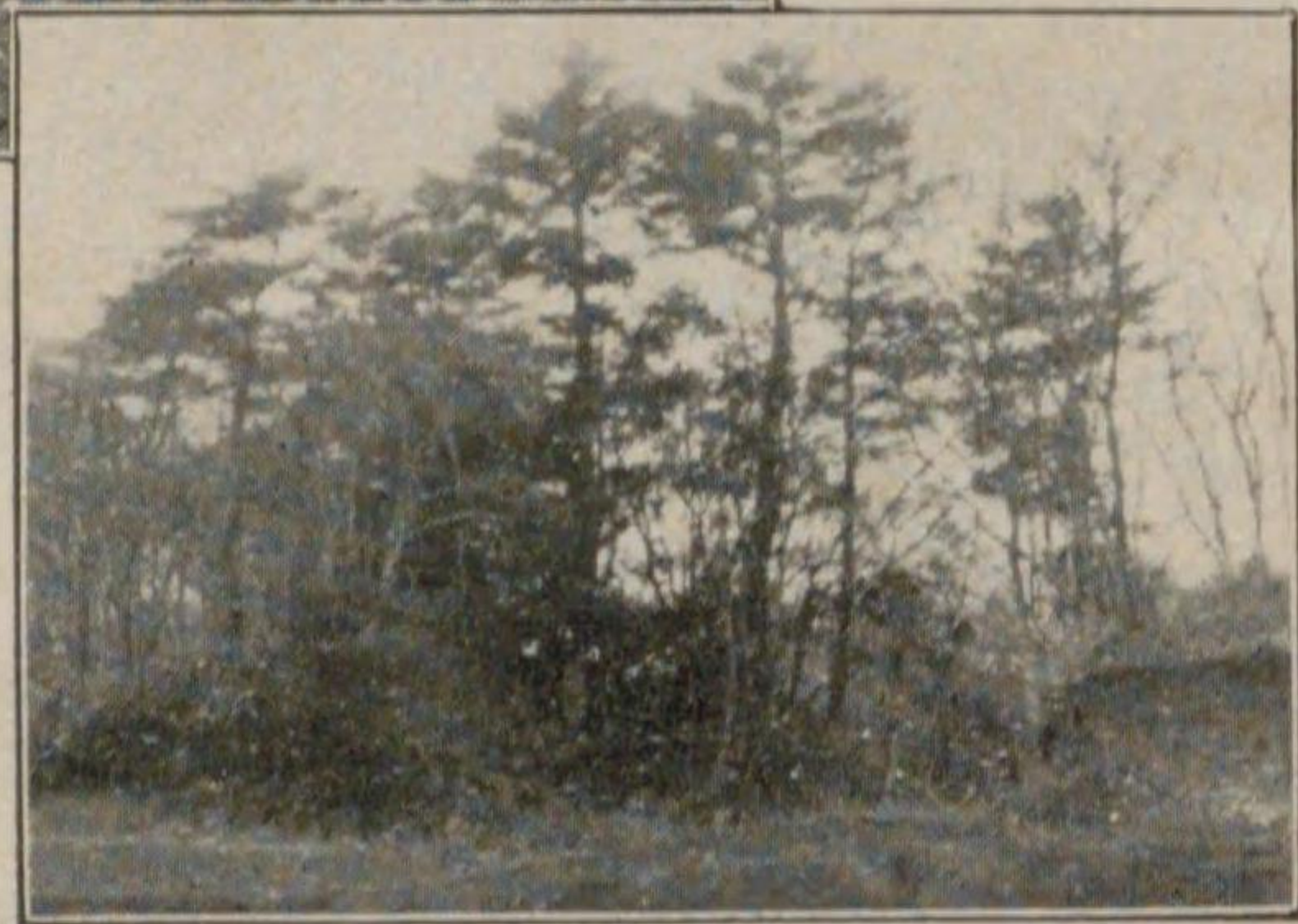




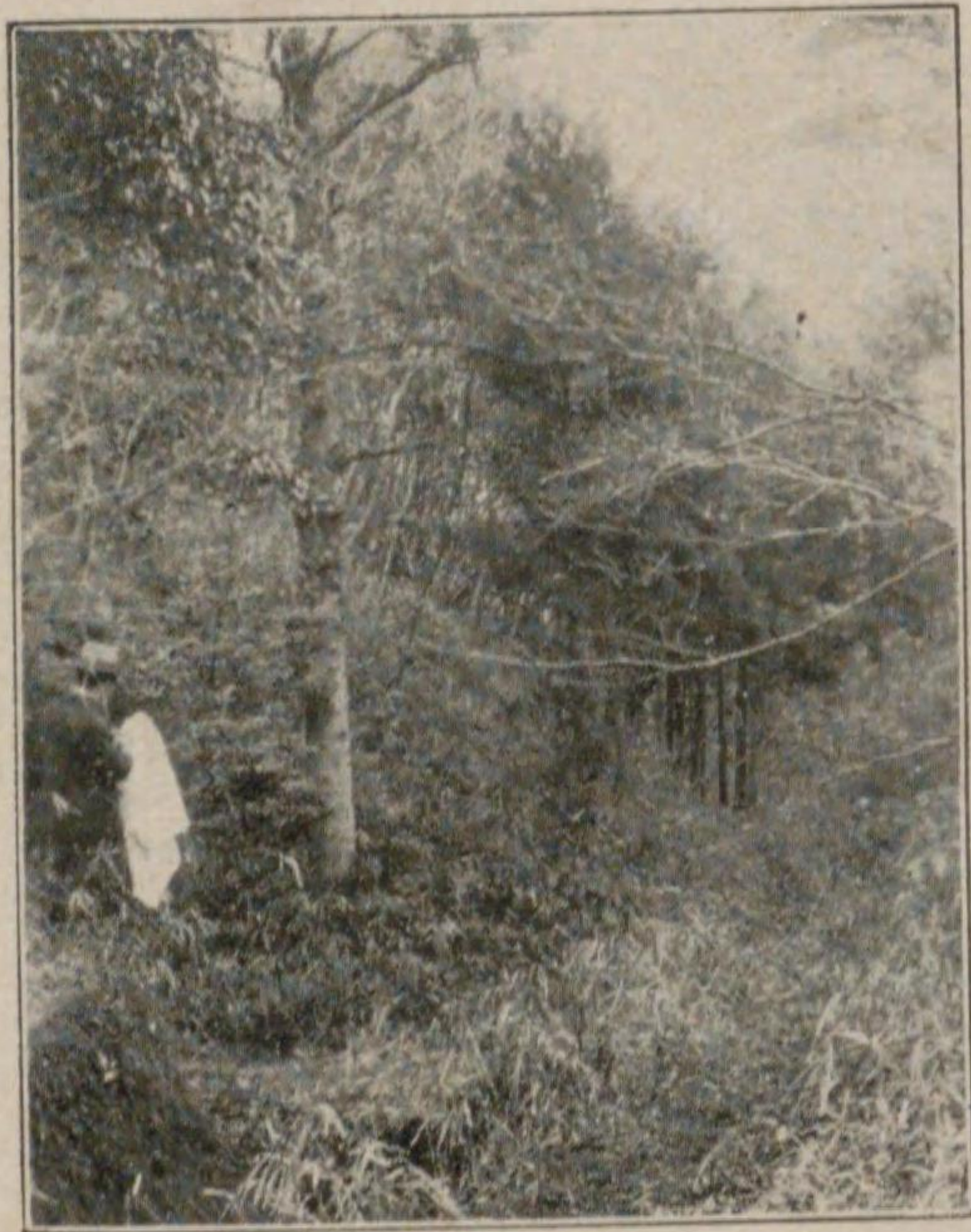
中野寶仙寺三重塔



(西部ノ土居ト
豪徳寺)

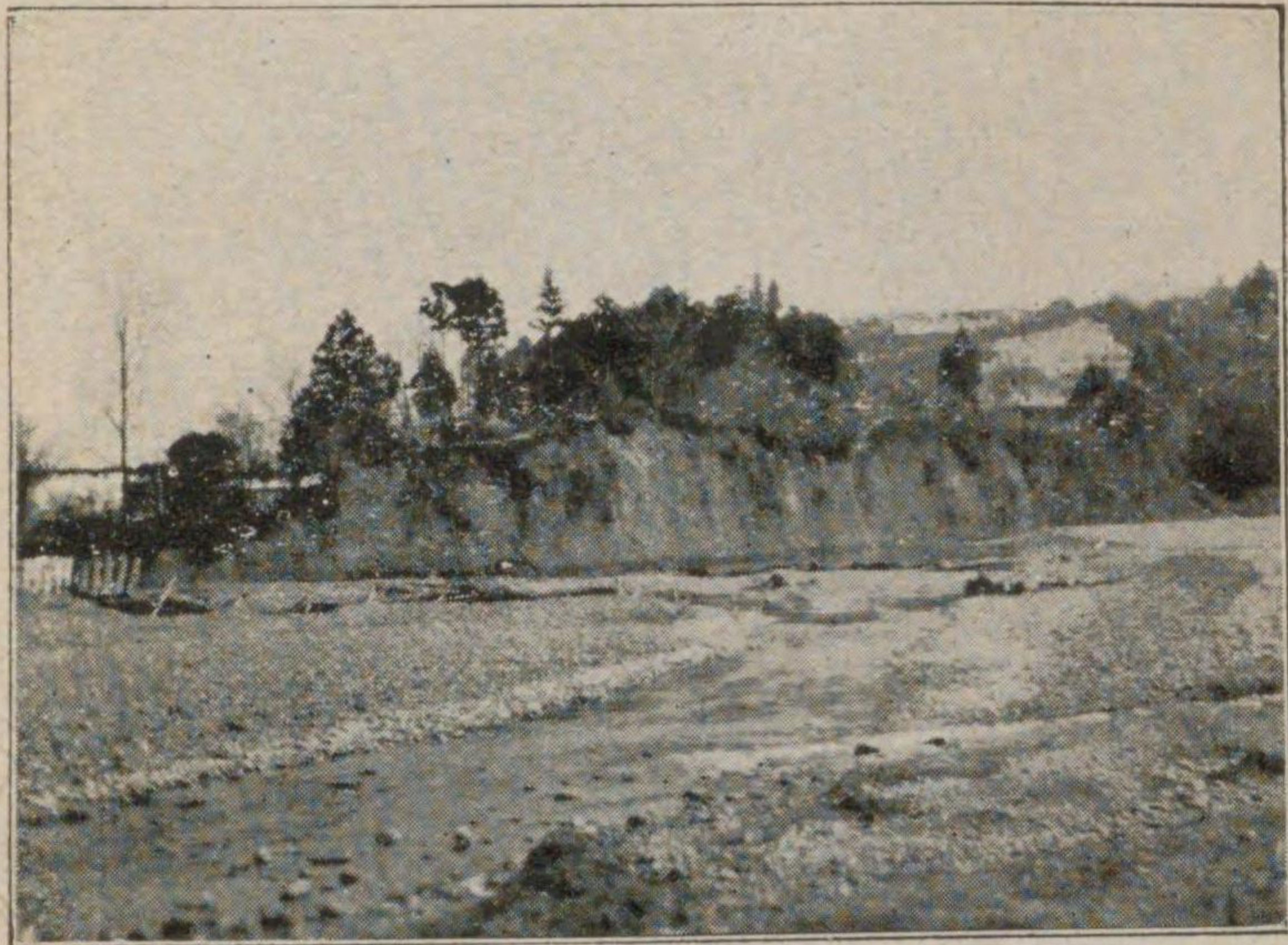


(東端)

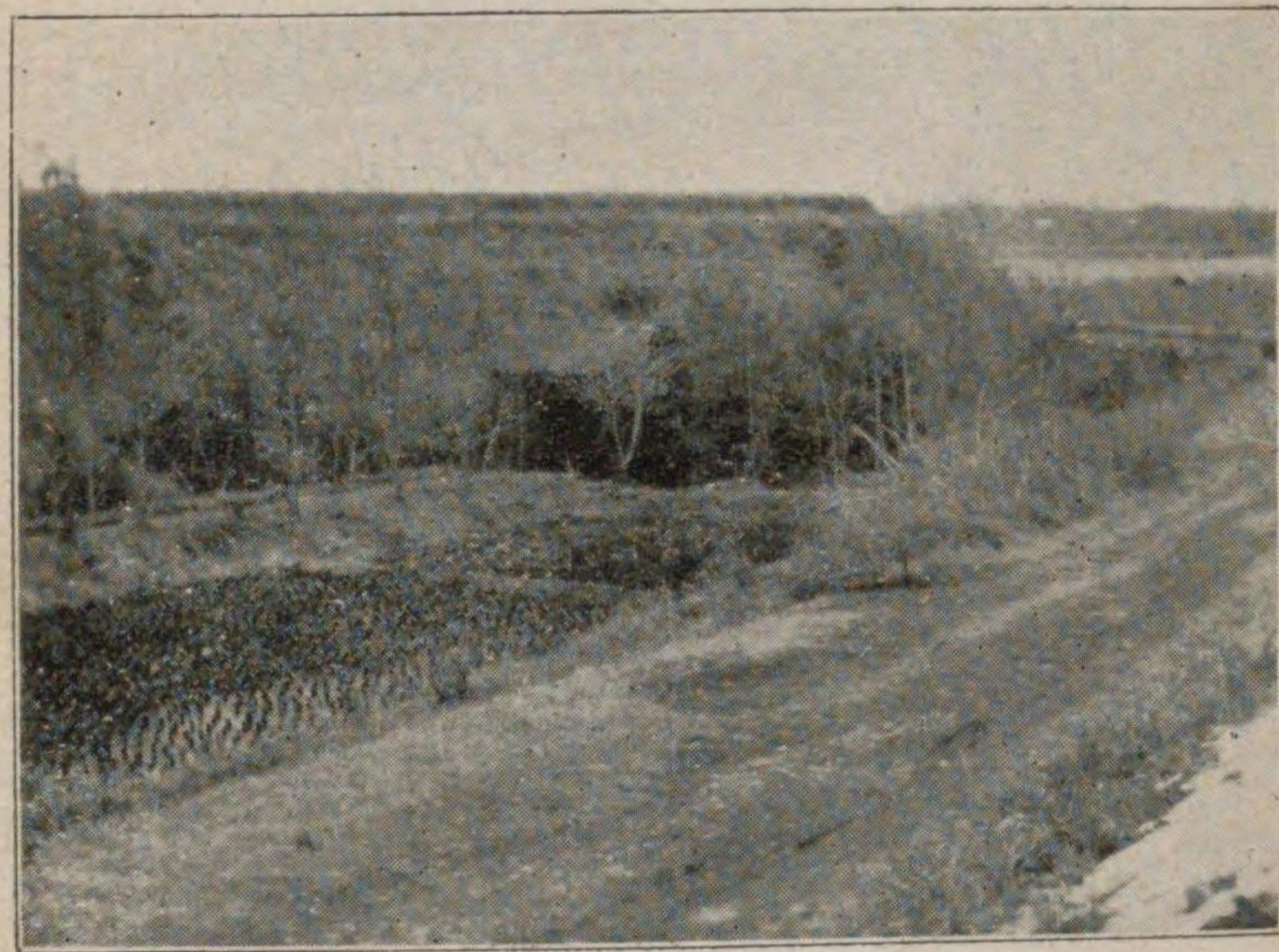


(堀址)

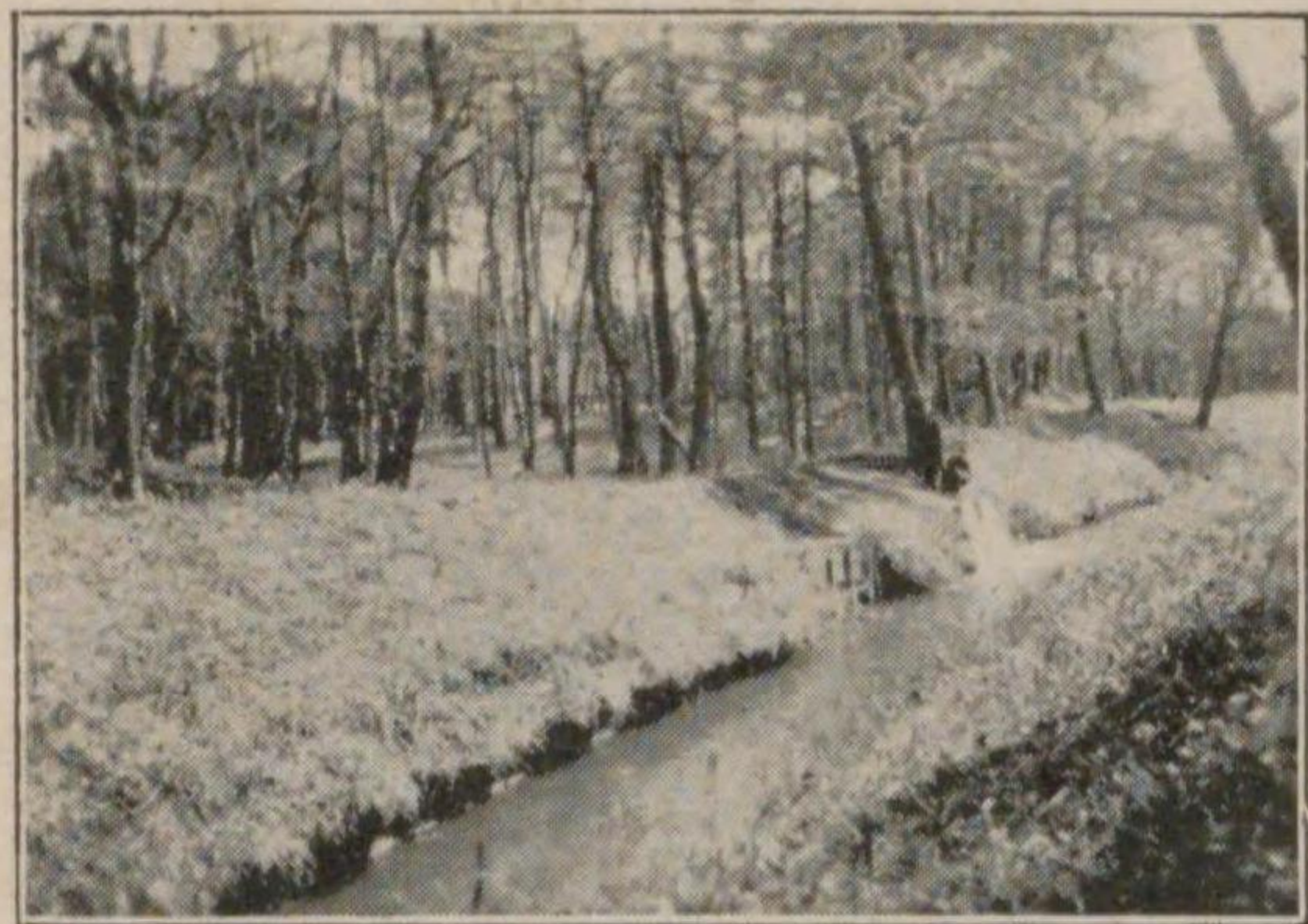
世田ヶ谷城址



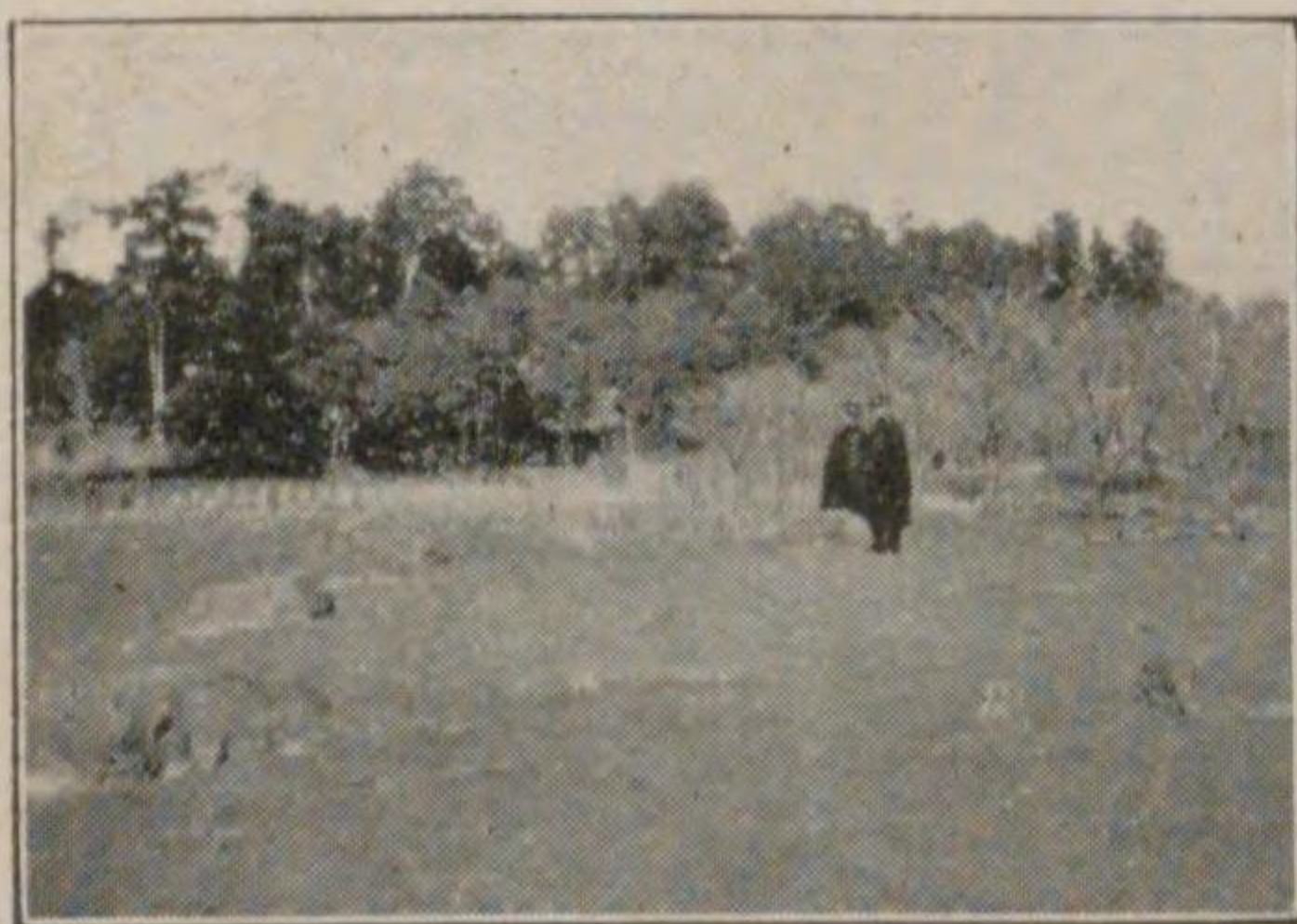
高月城址



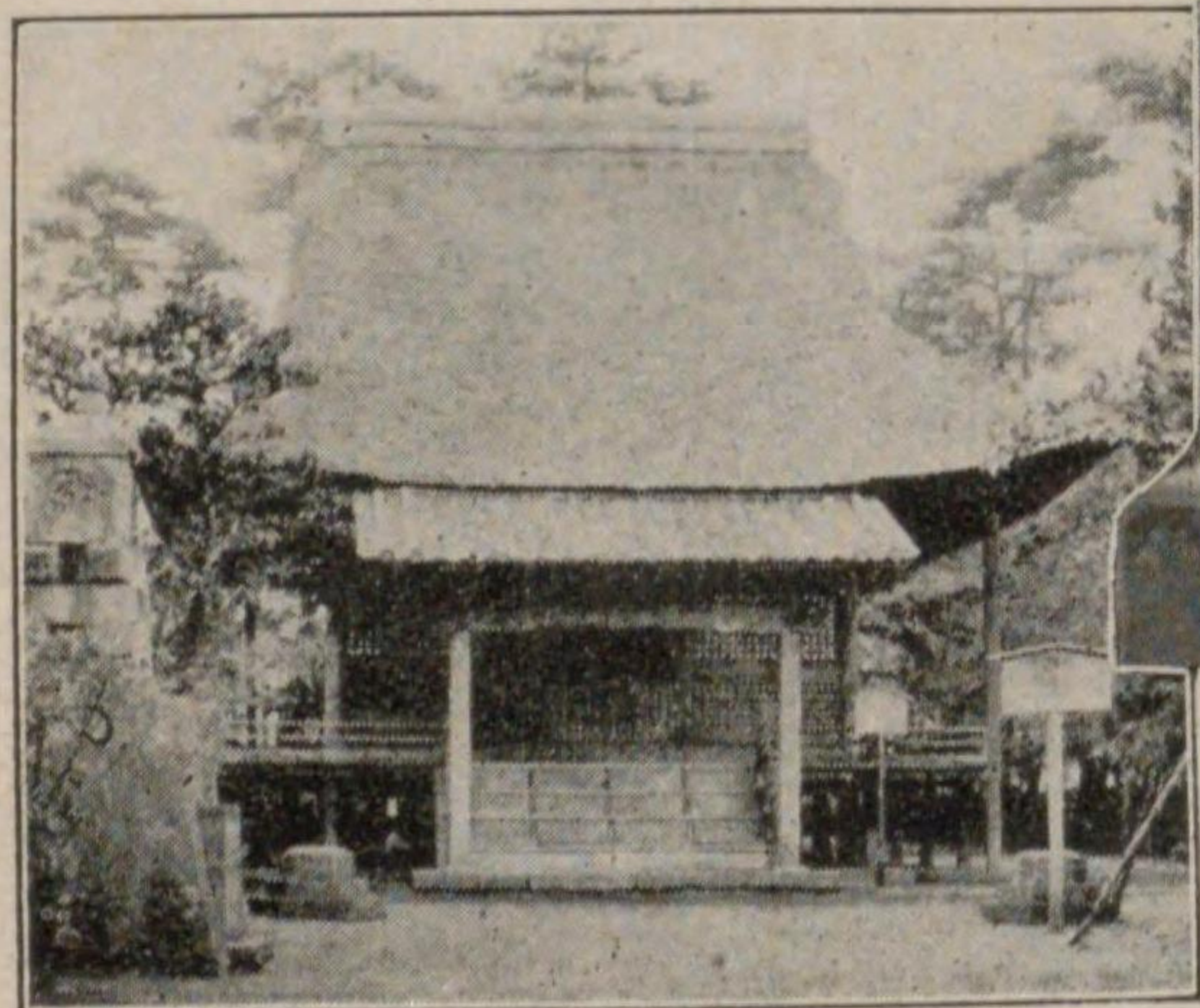
二宮館址



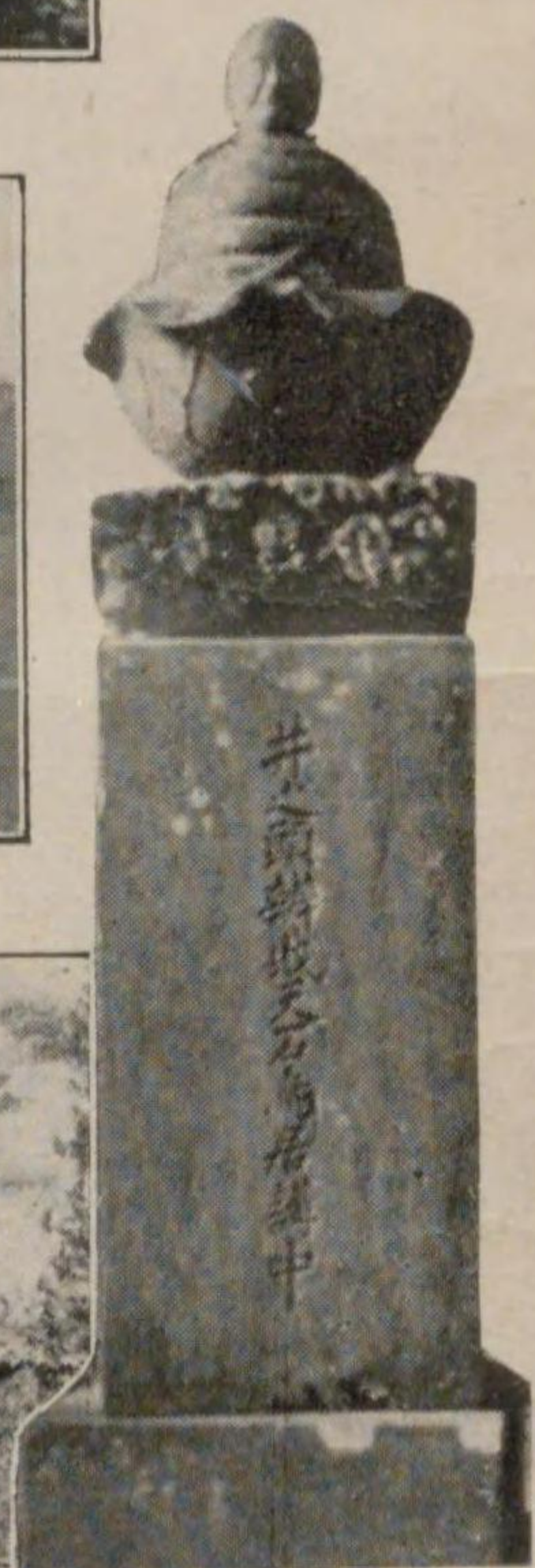
玉川上水



武藏國分寺址



堂本寺融圓



井ノ頭ノ
宇賀神

序

花の春、紅葉の秋は更なり、山に海に野に河に、折々の休暇を郊外に遊び暮らすは日々業務にたづさはり、學藝にいそむ徒にとりて、無上の樂なるべし。まして歴史の知識を具へたる者は、自然の風物にあこがるゝ外、感興の特に深きものあるべく、一個の史跡に接しても、其時代、其事變、さては之に關係せる人物など、それよりそれと回想せられて、心なき一片の小草も、追懷の種子とならぬはなかるべし。東都附近は古跡に富むこと京畿に及ばずといへども、而かも古來いづれの時代の遺跡も備はらざるはなし。太古原人の住居の跡も見るべく、國府・國分寺の址も訪ぬべく、名僧知識の跡も亦探るべく、鎌倉以降足利末に至る古戰場などは指を屈するにたへず、近くは黒船の來襲に備へたる砲臺も目前に見るを得べし。若し學業の暇、或は東に、或は西に、足にまかせて此等の舊跡古刹等を探り、低回顧望、昔をしのび、今を觀たらんには、我國史の全幅は之によりて窺知し得べきなり。

今我校好學の諸子、親しく此等の地を踏査し、又其史料を考覈して、遂に此書をなす。思ふに方

今百事改造の聲甚だ高く、少壯者中には毫も事物の由來を考へずして、濫に現在の社會組織を覆さんとする者少からず。其輕躁大に憂ふべしとなす。若し學生等の郊外に遊ぶ者、常に此書を携帶せば、風物の目を悦ばしむる外、我國史を知り得、進んで廣く史的感念を養ふを得べく、由りて以て穩健著實なる思想を鍊るの一端となるや疑なし。予諸子の篤學に感じ、敢て一言を卷首に弁す。

大正十二年一月

第一高等學校圖書室にて

文學博士 齋藤阿具

羅馬より

東京も愈々都市計劃の實行とやらで家屋の建築や修繕などにも大分手数が面倒となつて來たと聞いた。それに對する苦情も聞かされたが、兎も角東京は立派な都市として今後益々面目を改めて行くことと思ふ。敢て新らしく云ふまでもなく東京の變遷乃至發展は實に目覺しいもので、悦ばしくも又恐しくも感ぜられる。都市としての東京の發展は如何にも當然のことであるが、東京に生れ東京に長じて未だ一度も他郷に住んだことの無い私としては、東京の都市的發展が一面に幾多の不安を遺して行くことが残念でならない。向上發展の一路を遮り無二突進しようとする人間の努力は確かに偉大なものであるが、顧みることを知らぬ者は必ず躓く。江戸から東京へ、それから何々へと、實に目覺しい程の變遷をなしつつある、我が東京にも一回頭が必要ではないだろうか。砂利を敷き詰めた道路をアスファルトで固め、それが切角出來上つたと思ふと又アスファルトを叩き壊して電信だか電話だかの地下線を埋める、而して其の度毎に街路樹に少からぬ迷惑をかける様な意味の變遷も屢々あつたことと思ふ。無茶な「發展」も少くはなかつたらう。どうせ發展しなくては居られない東京のことであるから、何も江戸名所圖會時代の俤を今日に再現しよ

うなんて馬鹿なことは望まないとしても、尙東京の發展に不平を抱かない譯には行かない。近代文明は人類の誇りであり歡びであると同時に又苦痛でもある、其の近代文明の一大産物たる近代都市も亦近代人士の誇りであり歡びであると同時に又苦痛である。東京の都市的發展にも我等は同様のことを感じて已まない。往事を追懷して黄金時代は何でも過去に在つたかの如く説くのは老人の寢言に過ぎない。又將來に望を失つた者のみが過去の追懷に生きんとする次第であるけれども、過去の記憶を破壊し蹂躪し去ることを以て向上の一路とのみ信する者も亦禍ひなる哉である。

我々が都市に住むことは一つの誇りであり歡びであるけれども、我々は其の都市生活から一回願したいことが屢々ある。それは現代の都市が或る意味に於て一種の大なる壓迫であるからである。田野に彷徨し、追懷に耽るのが少くとも其の場合に於ける一つの救済である。併し目覺しい東京の發展は屢々此の救済の便宜を我々から奪ひ去ることが多い。それと同時に一方では武藏野會などが益々盛となり、諸方面の人士が其の郊外遠足會に参加する處を見ると、都市發展の一面に於て都人士が何物を要求しつゝあるかは明かである、史蹟の探究も亦意義少なからずと云ふべしである。

私も歐羅巴に来てからもはや九ヶ月、西洋人の所謂『都市』の生活にも倦きて故國の土の香が慕しくなつて來た、殊に伊太利の都市はすべて石づくめの道路で、其の石の路を毎日歩き廻つたのもはや四ヶ月となつた。西洋人は東京は都市でないといふ、殊に所謂『惡道路』は道路でなくして道路豫定地に過ぎないとか、銀座通りに稻を作れとか悪口を云ふ。固より人工の精を盡くすことを以て文明の極意と信じて居る西洋人の考へから云へば都市なるものは人間文明の好紀念として、人間の努力に依て全く自然を變形せしめたものでなければならぬ。道路を石で敷き詰め、それを挟んで數層の窓が高く互に對峙して居るものが、即ち彼等の所謂都市なるものに外ならぬ。かくして荷馬車の馬が迂れば足から火花が迸るし、人が横町を通れば頭の上から犬に吠えられることとなる、而して伊太利の様な古風な都市では道路に日が當ることが少い爲め、冬は日蔭の冷いこと、東京などでは一寸考へられないことである、それは石の冷さであつて、冬の朝凍りついた東京の町を歩くよりも遙かに強い冷たさを感じるのである。固より伯林の様な近世に發達した都市では伊太利の都市とは全く異り、道路も廣く街路樹も立派であり、又石を避けて多くアスファルト等で敷き詰めてあつて、餘程快い感じを與へるのである。併しそれでも尙近代都市生活の苦痛には耐へ難いと見えて、家の前の些細の空地に草木を植ゑ、時には猫の額の様な畑を作り

其の間に小さな小屋を建て、二三脚の椅子を置いた場所などがある。此の種の設備の大きなものは伯林の町外れの空地には勿論澤山あつて、それをガルテンフェルドとかラウペンコロニーなどと云つて居る。私は伯林の町を散歩して其等の光景を見る毎に、近代都市生活の苦痛と土の香の有難味を感じずには居られなかつた。殊に伊太利のベネチヤなどでは海中に築き上げられた都市であるだけ町が石づくめであることは云ふまでもなく、其の通路の幅の狭いこと日本橋あたりの何々新道などの比ではないのである。其等の日當りの極めて悪い而して冷たいの細道を歩かねばならなかつた時には、勢ひ武藏野の郊外を想起せざるを得ないのであつた。ターナーの畫そのまゝであるとか云ふ晩秋のベネチヤの空の美しさも、南歐ナボリの澄明の蒼空と満地の蜜柑と相映する心地よい眺めも、多年親しみの深い武藏野の眺めに較れば左のみ慕はしいものではなかつた。さればこそ秋の半ば羅馬の町で柿の實を賣るのを見た時には、遠く薄の穂末にかゝる夕靄を眺めながら柿の實を嚙つて散歩した東京郊外の秋が偲ばれてならなかつた。成程、私は或る意味に於て懷郷病に罹つて居るのかも知れない、若し左様なればそれでも宜しい、私は西洋の自然と人事との美しさ立派さを見る毎に自分の郷土の美しさ親しさを感じない譯には行かない、私は人間としてそれは當然のことだと思ふ。

將來東京の發展がどうなるかは知らない。或は西洋の都市生活の様に部屋が住居となつて屋内の廊下は公衆の通路と同様となり、従て出入の度毎に部屋の入口を鍵で閉鎖することとなるかも知れない。公園にでも行かなければ草木の緑は見られないかも知れない。石と煉瓦とアスファルトで固められた都には下駄は不適當とならう。高足駄の如きは先づ第一に、驅逐されるかも知れない。それも自然の發達なら仕方あるまい。併し左様なればなる程、過去の追懷と郊野を慕ふの情とは強くなる。都市が國民生活の中心たる歐羅巴に於て、殊に古羅馬以來都市生活を誇りとした伊太利に於て、郊外に別荘の多いことは能く以上の事情を説明するものであらう。

江戸名所圖會出でて以來既に百年にも近いであらう。春陽堂の東京名所圖會が出版されたのもはや二三十年の昔となつた。今度一高史談會の諸君が東京史蹟案内を編纂されるのも、何かの機運が動きつゝあることを語るものであらう。新講談やら何やらに依て、江戸の傳説が東京人士の胸に復活されつゝあるのも決して偶然ではあるまい。

私は今伊太利の町々を放浪しつゝ、而して一高史談會の諸君と武藏野を彷徨したことを思出しつゝ此一篇を草した。而して史蹟に對する趣味が一心不亂に邁進する向上の一路にも一回頭の必要なることを悟らしむる一助とならんことを祈つて已まない。

大正十一年一月中旬

羅馬にて

大類

伸識

東京の背景

それぞれの都會には必ず其町の生存の基礎的要素となつて居る所の地理的背景がある。これが一の都會をして其地點を決定させ、且又其所に存続させて居る重要な條件である。然らば今東京について考へて、此背景と見なすべきものは何であるか。自分は東京の内外の自然を考察して、次に擧げて行く幾つかの要素を、此町の地理的背景として着眼したい。

第一は此町の周圍に展開して居る所謂關東の平野である。西は箱根・足柄の險から秩父の山脈、北は榛名・赤城・日光の山群を境とし、東と南とは太平洋の蒼波に限られて略々方形を形造り、坂東太郎を初として幾條かの河流は大方西北から東南へはすかひに流れ、沃野遙に連つて居る此地方は云ふ迄もなく日本に於て無比の大平野である。されば鳥が鳴く東、坂東八ヶ國、關八州等と呼ばれて來た此平野は、昔から屢々日本の運命を支配した。今日利根川の流域は日本耕地の十分の一以上を占めて居ると數へられる。

東京は其政治的條件を離れて尙此平野の大中樞たるべき地位に立つて居る。徳川時代以來此地が日本の政治的中心として選擇された重要な理由は此點にある。佐藤信淵は其宇内混同祕策の中

に次の様に喝破して居る。

凡四海を治るには先づ王都を建てずんばある可らず。王都は天下の根本なるを以て形勝第一の地を撰ぶべし。溟華は四海の樞軸にして萬物輻輳の要津なり。然れども分内狭く、人民極めて多く、土地より生ずる所の米穀或は居民の食ふに足らず。故に此地に大都を建て皇居となすは深く慮るべき所あり。然れば王都を建つべきの地は江戸に如くものあることなし。關東は土地廣平にして沃野千里、且相模・武藏・安房・上總・下總の五州を以て内洋を包み、斗禰・秩部・鬼奴・多麻の四大河内洋に注ぐを以て水路能く通流し、百穀百菓其他諸物の産物運送甚便なり。萬貨豐饒飢餓の患ある事鮮く、殊に峨々たる崇山三方を圍繞し東方一面大洋に濱し、進ては以て他國を制すべく、退ては以て自ら守るに餘あり、郊野曠漠にして馬強健に、民人は衆多にして勇壯、實に其形勢天下に雄たり。凡そ重に居て輕を養し強を以て弱を征する永靜の基礎を立るに宜し。故に王都を建るの地は江戸を以て天下第一とす。

日本に於ける重農學派とも云ふべき信淵は、特に各地方の農業的價値に重をおくが故に、遂に江戸を以て大坂以上と主張したものと思はれる。兎に角東京の背景としての關東平野の價値は明快に此信淵の論中に現れて居る。興味ある事は東京が關東地方の略、幾何學的中心に位する事である。試に關東の西南端相模の眞鶴崎より、東北端常陸の平瀨に一線を引き、更に西北端上野の

白根山より、東南端上總の勝浦に一線を引くならば、兩線は大體東京近傍に於て相交はる事を發見するで有らう。

第二に數ふべきは東京灣である。内海が深く陸地の中部に食込み來り、東京が此灣に臨んで居る事は此町に看過すべからざる着眼點である。關東の中樞は當然此東京灣の奥に起り來るべき運命をもつて居る。已に第一の原始時代即ち太田道灌の時書かれた江戸城靜庵軒詩序に、

城之東畔有河、其流曲折而南入海、商旅大小之風帆、漁獵來去之夜籜、隱見出沒竹樹烟雲之際、到高橋下、繫纜閣榭、鱗集蛟合、日々成市、則房之米、常之茶、信之銅、越之竹箭、相之旗旄騎卒、泉之珠犀異香、至鹽魚漆菓扈筋膠藥餌之衆、無不彙集區別。

とあるはもとより文人の文飾誇大であつて、其儘には信用し難いとは云へ、尙江戸が道灌築城の後幾干もなく遠近諸方の集合する要津となつた證據として誤であるまい。かう云ふ先天的の形勝に立つて居たからして、徳川時代に入るや江戸は忽ち天下の一大要港となり、特に河村瑞賢の東北航路開拓の後は、日本の東西は海によつて密接に此地に連絡するに至つた。

沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船。

三十五反の帆を巻きあげて、行くよ仙臺石の巻。

海に沿ひ又海に近づき易い事が、現今世界の多くの大都會の存立の要件である。「日本橋の下の水は和蘭に通ず」、太田道灌の原始時代から數億の資金を投すべき大築港完成の將來に至る迄、東京灣は常に東京の生命の玉の緒である。

第三は東京の中を貫流して居る隅田川である。此河は本來利根の原流を始め上野・武藏の水の大部を受け、正しく關東第一の大河であつた〔利根治水考〕。

此河の水上を尋ねるに、阿武隈川、おもひ川、渡瀬川、きぬ川、とね川、此五つの大河栗橋の上にて落合ひ、一つに成て武藏と下總のさかひ角田川をながれて此江戸湊川へ落つ。のぼれば下る舟筏のさなのいとまぞなかりける。〔慶長見聞集〕

日本の戰國以後の城廓地立の選定には、常に河流を防衛の爲めの東京を眼目と見なして居る。徳川時代の大名の居城を觀察して見れば、殆ど凡てが河川を城廓の防禦に利用して居る事に氣付くであらう。道灌の江戸築城は隅田川を前にして遙に古河方面に對峙する爲であつた事は史界の定説である。即ち此河は江戸の誕生の先天的條件であつた。然し東京に取つて隅田川のより大なる意義は其都市生活との交渉である。ロンドンのテームス、パリのセーヌの例を擧げる迄もなく、多くの都市に取つて河は實に缺く可らざる大なる情趣である。大川端の情調！ 自分は此言葉に

最も多く江戸生活の床しい情味を直感する。大江戸以來隅田川はどれ丈其市民の趣味と歡樂との對象となつて來た事であらう。北齋・廣重始め多くの浮世繪師が實にあらゆる題材を此河の附近から取つた事は、如何にこれが江戸人士の情的生活に重要であつたかを示すものである。其上此河を材料にした文學が詩に歌に俳句に俗曲に小説の叙景に數限りなくある。江戸人は熱情を以て自然をヒューマナイズしたローマンチストである。「夕暮に、眺め見飽かぬ隅田川、月に風情を待乳山、」向ふは下總葛飾郡、手前は武藏で豊島郡、此等の唄の中に何と云ふ甘さと哀しさとがにじみ出て居る事であらう。

自分は一生涯たとへ如何なる激しい新思想の襲來を受けても、恐らく江戸文學を離れて隅田川なる自然の風景に對する事は出來ないであらう。〔永井荷風、小品集、夏の町〕

自分は此河の描寫の最も巧妙なる一つとして谷崎潤一郎の「幫間」を推したい。千住の方から深い霞の底をくゞつて來る隅田川は、小松島の角で一うねりうねつて、まんまたる大河の形を備へ、兩岸の春に酔つたやうな慵げなゆるま水を、きら／＼日に光らせながら、一直線に吾妻橋の下へ出て行きます。川の面は、如何にもふつくらとして應揚な波が、のたりのたりとたるさうに打ち、蒲團のやうな手觸りがするかと思はれる柔かい水の上に、幾艘のボートや花見船が浮かんで、時に山谷堀の口を離れる

渡し船は、上り下りの船列を横ぎりつゝ、舷に溢れる程の人数を、絶えず土手の上へ運んで居ます。

明治以後になつて隅田川は更に一個の重要な新意義を附加し來つた。それは素張らしい勢を以て此河の兩側に展開して來た新時代の工業である。それは恐ろしい無遠慮さを以て繪の如き自然と傳統の情趣とを破壊し、眞黒な煤烟を渦かせて、鐘が淵より王子・赤羽迄一帶に東京のマンチエスターを現出しつゝある。これは人の好むと好まざるとに係らず、避け難き現代文明の姿である。かくて此河は此新時代の工業に結付いて、益々東京の重要な背景となつて居る。

第四は山の手から遠く西方の郊外に連つて居る洪積層の丘陵地帯である。此洪積層が即ち昔から歌枕に名高い所謂武藏野の原である。

武藏野、南は多摩川、北は荒川、東は隅田川、西は大嶽秩父根を限として、多摩、橘樹、都築、荏原、豊島、足立、新座、高麗、比企、入間等すべて十郡に跨る。草より出て、草に入る、草の枕に旅寝の日数を忘れ、問ふべき里の遙なり……〔江戸名所圖會〕

此地帯は秩父・多摩の山の根からずつと東に續いて來て、東京の所で沖積層の低地に落ち、此所に此町の所謂山の手を形造つて居る。北の上野・本郷・小石川、中の麴町・牛込・四谷・赤坂、南の麻布・高輪の高臺は、即ち此洪積層の落口であり、此等の高臺の縁は所々市中に於ける絶好の展望臺である。此洪積層の端なる高臺が、かのローマの七丘の如く大江戸の發祥地であつた。即ち太田道灌が築城の地として選擇したのは、此等の高臺の内中央に位せる一つである。江戸時代になつて名物の大名屋敷は多く此山の手の上に建設された。驚くべき大きに發達した後の江戸の町は、其西方の洪積層の地帯に最も理想的な郊外を見出した。薄は武藏野以來此野の名物である。

むさし野は月の入るべき山もなし、尾花が末にかゝる白雲。〔續古今〕

富士の根をふりさけ見れば白雪の、尾花につゞく武藏野の原。〔新後拾遺〕

今日はもとより最早昔日の面影はなくなつて仕舞つたとは云へ、尙いかにも茫漠として野趣が夥く原始的で何とも云へない味を持つて居る此林と丘と野の西の郊外あるが故に、東京は最も恵まれたる都市であると云ふべきである。かの獨歩の「武藏野」は近代の郊外の特徴を最もよく描き出した文學である。

武藏野に散歩する人は道に迷ふ事を苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の花はたゞ其縦横に通ずる數千條の路を當もなく歩くことに由つて始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此路をぶら／＼歩いて思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させるものがある。これが實に又武藏

野第一の特色だらうと自分はしみじみ感じて居る。武藏野を除て日本に此様な處が何處にあるか。北海道の原野には無論の事、奈須野にもない、其外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る所が何處にあるか。實に武藏野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。

都市の止めどもない急激な膨脹は現代文明の一特色である。かくて東京は恐しい勢で其周圍へ擴大をつゞけて居る。此際土地が高燥で日當りが好く、地下には無限に清冽な水を湛へて居る昔日の武藏野は、大東京に好個の住宅區域を提供して居る。以上が洪積層の地帯と東京との交渉の主要な觀察點である。

第五は下町から遙に河の彼方に互つて展開して居る沖積層の低地である。此は本來眞菰に名高い霞浦の邊にも比すべき大なる水郷であつた。考古學者はずつと古代此邊は海であつたと云ふ。比較的近い時代迄隅田から小利根にかけて、葭蘆の生ひ茂つて居る無數の洲の間を水が縦横に通じて居た。武藏野の尾花に對して此所の特色は蘆荻である。更科日記に此蘆荻の野の有様がよく描き出されて居る。

今は武藏國になりぬ。殊にをかきし所も見えず。濱も砂子白く、波もなく、こひちの様にて、紫生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬ迄高く生茂りて、中を分け行くに竹柴といふ寺あり。

此日記の著者が下總の方から洲の間をくろ戸の濱、まつさとの津と舟航して來て、武藏野として記したのはむしろ此水郷の野の事である。更に此水郷の昔を最も巧に言ひ現したものは堯惠法師の北國紀行である。

二月初、鳥越のおきな（舟）して角田川に泛びぬ。東岸は下總、西岸は武藏野につゞけり。利根入間の二河落合ふ所に彼古き渡りあり。東の渚に幽村あり、西の渚に孤村あり、水面悠悠として兩岸に等しく、晚霞曲江に流れ歸帆野草をはしるか（と覺ゆ）。筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西に有て絶頂はたへにきえ、裾野には夕日を帶、朧月空にかゝり、扁雲行盡して、四域に山なし。

連歌師宗長も「東路のつと」に此水郷を描寫して「角田川の河舟にて、下總國葛西の府の内を半日許り、蘆葦をしのぐ折しも霜枯は難波の浦に通ひてかくれて住みし里々見えたり、鶯鴨都鳥堀江の心地して……」と記して居る。家康は入府の後城下町を此低地の方面に計畫した。是即ち下町の起源である。此沖積層と洪積層との交りの結果、東京の極めて複雑な地形が生れて來る。此町の氣分が他の多くの都市の如く單調でない理由の一つは是である。昔山の手は武家を代表し、下町は町人を代表した。爛熟した江戸の特殊の氣分は主として此沖積層の氣分である。江戸の歴

史は平民文化發達の歴史であると云はれる。それは即ち此沖積層の文化の擡頭を意味する。今日全國を支配する各方面の中心機關は多く此沖積層の上に置かれてある。更にかの大東京の都市計畫は、中心の商業區域につゞく東部及び東北部の低地を、大體に於て工場區域に設定して居る。云ふ迄もなく商工業は現代都市の生命である。それ故に此沖積層の低地は大東京の生存を可能ならしめる重要な地盤であると云ふべきである。

以上數へて來た所は自然の造つた東京の背景である。自分はもう一つ之に幾分人文的な一個條を加へたい。それは日本の地形上自然東京の地點に集合すべき交通線である。現在日本東部の鐵道は東京を中心にして敷設されて居る。徳川時代には江戸を中心とする所謂五街道があつた。此等は共に何れも直接には此場所が政治の中心地であつたが爲めに出來たものである。然し之は日本の經濟生活が進歩すれば、當然大體之に近い現象が起るべき筈であつた。昔畿内の方から奥州に行く交通の大幹線は、武藏野の只中丁度國分寺の邊を通過して居た。其は武藏の國府が其方に置かれてあつた故でもあらうし、又隅田川の下流一帯は大なる水郷であつて其が交通の妨害になつた故でもあつたらう。然し東京灣の西の縁に沿つた一條の交通路は、已にすつと古くから存在した事が想像される。延喜式の諸國驛遞に武藏國驛馬、店屋、小高、大井、豊島、各十疋と載せてある。更に武藏から房總半島に行く通路は隅田から小利根に互る水郷を貫いて居た。三代格承和二年の太政官符に、武藏下總堺住田川渡船、下總國太井河渡船四艘と出て居る。我國旅行文學の歴卷とも云ふべき在五中將東下りの一節は、即ち東路の果に存在した此交通線の記載である。

猶行きく、武藏國と下總の國との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河と云ふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟にのれ、日も暮れなむといふに、のりて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。然るをりしも白き鳥の嘴と脚と赤き、鴨の大きな、水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、是なむ都鳥といふをききて、

名にしおはゞいざこととはむ都鳥、我が思ふ人はいやなしやと、
とよめりければ、舟こそりてなきにけり。

此等は皆地勢上自然に出來て來た交通路である。而して人文が進歩すれば、武藏野をよぎつた大幹線は、やがて東京灣に沿ふ濱街道に代られるのが當然の運命である。道路は山の根もしくは丘陵の上よりなるべく高低のない低地に下るのが一般の原則である。況んや隅田下流の沮洳地は沖積層の發達によつて次第に改まつて行く傾向がある。其上に海運が發達すれば、陸上の交通線

は時に之に連絡するを便宜とする。其れ故に東海道を進んで来る通路は相模の海を離れて又東京灣の岸に出で、荒河を越して一方下野から白河の方へ進み、一方常陸の海岸の方に分れて行くのが自然の傾向である。かう考へて來れば江戸時代の東海道・奥州街道及び水戸街道と、現今の東海道線・東北線及び常磐線とが、大體自然によつて定められた交通線である事に氣付くであらう。東京が房總半島の咽喉であるべきは今日猶古の如くである。甲州路から小佛の峠を越え、武藏野の丘陵の脊梁を進んでくれば自然東京に達する。關東の内地の多くから海に出る最捷路は又此東京灣の奥である。道灌時代已に此灣頭に諸方の船舶を輻湊せしめたのは之が爲めである。其れ故に昔の中仙道・甲州街道・千葉街道、今日の信越線・中央線・房總線も亦大體極めて自然の道路であらねばならない。是等の交通線は何れも東京の支柱となつて居るのである。

關東平野と東京灣と隅田川と洪積層の臺地と沖積層の低地と多くの交通線と、此等の凡ての要素を相交らせて見る時、東京の位置が寸分動かすべからざるものである事が發見されるであらう。東京は全く此自然の背景の産みの兒である。

此町が全國的の意義を持つ様になつたのは、云ふ迄もなく家康の入國以來である。落穂集等の傳ふる所によれば、家康が鎌倉・小田原の歴史的位置を排し、來歴のない荒野とも云ふべき中に新しい中樞を建設したのは、秀吉の徳憑によつて家康がそれに従つたのであると云ふ。自分は、餘り此地方の地勢に明るくなかつた筈である彼等の地理的見識の非凡なるに敬服するものである。

此書物には多少不適當であるけれど、一高史談會の諸君に序を強ひられるまゝ、之を以てこれにあてる事にした。

大正十一年十二月二十三日

今井登志喜

序

本會が大正二年の秋創立されて以來、其の事業の一として、實地の史的知識涵養のため折々東京郊外の史蹟を踏査研究することも、もはや數十回に上りました。其度毎に史蹟の現状や沿革等を適確簡明に記したテキストの必要を感じて居りましたが、それが動機となつて、終に從來踏査した場所の中から若干を選び、準備的に調べたことや、實地見聞したことなどについて、分擔をきめて書き集めてみようとの議が會員の間に纏りました。かくて曲りなりにも纏め上げ、これを會員が補正を試みて理想に近づけるための底本ともし、且はまた廣く同好の士の叱正を仰ぐ資にも供したいと、遂に印刷に付して世に出すことになつたのが、さきに大正十二年の春刊行した『史蹟を探る人々に（東京郊外篇）』なのであります。従つてこれは最初から我々自身さへものたりない感じがしてゐたので、不十分な點の少くなかつたのはいふまでもありません。のみならず其後、郊外へ向つての東京の發展は極めて著しく、殊に震災によつて受けた變化は最も甚しいものがあります。これらの諸點に鑑みて、こゝにその後の調査を纏め、底本たる前書の内容に補訂を加へ、殆んど全く稿を改め、面目を一新して『東京近郊史蹟案内』といふ名稱の下に新に世に出

すことになりました。前書の刊行以來、幾度か實査を重ね、努力を續けて來たのでありますが、猶調査の不十分な點も多く、且又東京の發展による今後の變化も年と共に加はるること、思ひます。此等に關しては常に注意を怠らず次第に修補を試みる積りでありますが、また同時に讀者諸氏の御示教を切望致す次第であります。

本書の初版起稿の當時よりよくこれを成し得たのは、全く一高の諸先生や大類博士をはじめ諸先輩の御懇篤なる御指導によるものであります。又實地踏査の際、或は資料の提供・質疑の應答等に便宜をおはかり下さつた方々の賜も決して尠少ではありません。厚く感謝の意を表します。猶第一高等學校教授文學博士齋藤阿具先生・東北帝國大學教授文學博士大類伸先生・東京帝國大學助教授文學士今井登志喜先生竝に第一高等學校教授文學士龜井高孝先生からは御多忙中にも拘らず序文或は跋文を賜はり、殊に龜井先生には今回の出版に際して一方ならぬ御配慮を煩はしました。こゝに諸先生に深甚の謝意を捧げます。

昭和二年三月

一 高 史 談 會

凡 例

目的

本書は史蹟踏査の際携へて實地の指針となることを主眼とします。

範圍

東京を中心とし、川越との距離を半徑とした圏内の地域であります。但便宜上一二の例外はあります。

組織

一 總說

本文は總說・各説からなり、是に挿圖と寫眞と附録とが附加へてあります。本書の範圍内に於ける地理的状況・歴史的沿革の概要を述べ、各説に記述された各史蹟の全體に對する關係と其の意義とを知るに資するものであります。

二 各説

- (一) 章別 凡そ一日の行程を以て一章とし、南から右廻りに排列してあります。
- (二) 記述の様式 主な史蹟は一項をたて、その現状・沿革・關係事項等を記述説明し、此等を連結するに便利な道順を以てし、併せて途上のやゝ注意すべものを適宜附記しました。
- (三) 組方 一項をたてた史蹟はゴジツク活字で示し、その現状や重要事項は九ポイント活字

を用ひ、道順・社寺の縁起・關係氏族其他の山緒沿革・口碑傳説・考證論説等は概ね六號活字を用ひました。尙各章首には、其の章の主要な史蹟を道順に従つて列記し、見出しに便してあります。

- (四) 参考 部分的参考書や参考論文等は、適宜文中若くは章末に註し、一般的のものは別に附録として卷末に載せてあります。

三 挿圖

本書は陸地測量部の地圖と併用する様にしてありますが、踏査上或は説明上それのみでは不十分なので、特に調査した要地の細圖と参考圖とを挿入してあります。

四 寫眞

本書の性質上多數は必要ないと考へますので、意義ありと思はるゝもの若干を採りました。説明は二十頁にあります。

五 附録

- (一) 参照地圖表 本書は陸地測量部の地圖と併用する様に道順等を説明してありますから、各章に要する地圖名を表にしたものであります。

- (二) 近郊地誌關係書目 部分的の参考書等は各章末に掲げましたが、一般的のもの、特に江戸時代の圖書を主として、之に明治以後の重要な参考書を加へて、適宜簡単な解題を試みました。

- (三) 特別保護建造物國寶目錄 本書の範圍内のものを表にして一覽に便しました。

- (四) 索引 主な史蹟を分類し、記述説明の檢出に便しました。

- (五) 年號表 史蹟踏査の實際地に見聞する事物に關し、年號の紀元年數と干支とを知るのを目的とし、檢出と携帯とに便利な様特に別刷にしてあります。

本書各章の起稿者は、左の九人で、分擔した章の終に署名しておきました。

石山乾二・鳥羽正雄・小笠原光壽・建部元春・中村榮孝・長澤規矩也・太田秀一・古谷善亮・迫水久常(イロハ順)

今回の改訂に關しては右の外次の五人も之を補助しました。

堀江實・小澤文雄・川崎庸之・高橋誠二・藤木邦彦(イロハ順)

寫眞の説明

○二宮館址 館址の東南端を南方から見た所、前の水田は堀跡、右の方に低く見えるのは多摩川と其の對岸の森である。中世地方豪族の居館の地形と規模とを知るに足る(第十一圖參照)。

○高月城址 城址をその西北方秋川の對岸から見た所、左の方は山下の郭、右の高い所が本丸である。斷崖が川に臨んで要害であつた様が窺はれる。中世の山城の一例である(第十二圖參照)。

○世田ヶ谷城址 中世の小規模な平城(居館)の一例である(第五圖參照)。

○武藏國分寺址 金堂址から藥師堂・仁王門・國分寺八幡等のある丘を望んだ所、すぐ近くの列石は金堂西端の礎石である(第八圖・第九圖參照)。

○寶仙寺三重塔 東京では少い三重塔の最古のものである(第八六頁參照)。

○圓融寺本堂(特別保護建造物) 東京の近くで最も古い鎌倉時代の建物である(第七四頁參照)。

○玉川上水 井ノ頭公園御殿山松本訓導碑附近、對岸中央の低地は神田上水と連絡した堀跡、兩側の小高い所は堤の跡、右端の一高生の立つて居る場所は今池の水を逆に玉川上水へ注ぎ込んで居る口である(第九三頁參照)。

目次

一 高教授文學博士齋藤阿具先生序 一

東北帝大教授文學博士大類伸先生序「羅馬より」 三

東京帝大助教授文學士今井登志喜先生序「東京の背景」 一五

序 一七

凡例 二五

總説 二九

各説 四九

一 品川・大森・池上方面 五五

二 川崎・鶴見と生麥・小机 六五

三 矢口・奥澤方面 七〇

四 目黒・世田ヶ谷附近 一一

五 二子・榊形方面…………… 七九

六 中野・堀之内方面…………… 八四

七 井ノ頭と深大寺…………… 八八

八 國分寺と府中…………… 一〇二

九 百草・立川方面…………… 一二九

一〇 二宮・瀧山方面…………… 一三七

一一 八王子附近…………… 一四八

一二 練馬と石神井…………… 一六〇

一三 東村山・山口方面…………… 一七一

一四 赤塚と岡…………… 一七七

一五 野火止附近…………… 一八一

一六 川越…………… 一八四

一七 王子・赤羽・志村方面…………… 一九二

一八 大宮と岩槻…………… 一九八

一九 松山附近…………… 二〇八

二〇 向島・葛西・柴又方面…………… 二二三

二一 小金附近…………… 二二八

二二 國府臺附近…………… 二三五

二三 中山・船橋方面…………… 二三四

二四 龜戸・小松川・行徳方面…………… 二五九

二五 千葉・生實附近…………… 四五

附録

一 参照地圖表…………… 二五九

二 近郊地誌關係書目…………… 二六一

三 特別保護建造物國寶目錄…………… 二六五

四 索引…………… 二六九

五 年號表…………… 卷末

一 高教授文學士龜井高孝先生跋……………

挿圖

- 第一圖 上世の東京近郊地方參考圖
- 第二圖 中世末近世初期の東京近郊地方參考圖
- 第三圖 生麥事件説明圖
- 第四圖 小机城址の圖
- 第五圖 世田ヶ谷城址附近の圖
- 第六圖 榊形城址附近の圖
- 第七圖 深大寺城址附近の圖
- 第八圖 武藏國分寺境内の圖
- 第九圖 武藏國分寺礎石の圖
- 第一〇圖 府中附近の圖

- 第一一圖 二宮館址の圖
- 第一二圖 高月城址の圖
- 第一三圖 瀧山城址の圖
- 第一四圖 八王子城址附近の圖
- 第一五圖 八王子城主要部古圖
- 第一六圖 練馬城址の圖
- 第一七圖 石神井城址附近の圖
- 第一八圖 川越城舊狀圖
- 第一九圖 志村城址の圖
- 第二〇圖 岩槻城主要部舊狀圖

東京近郊史蹟案内



總説

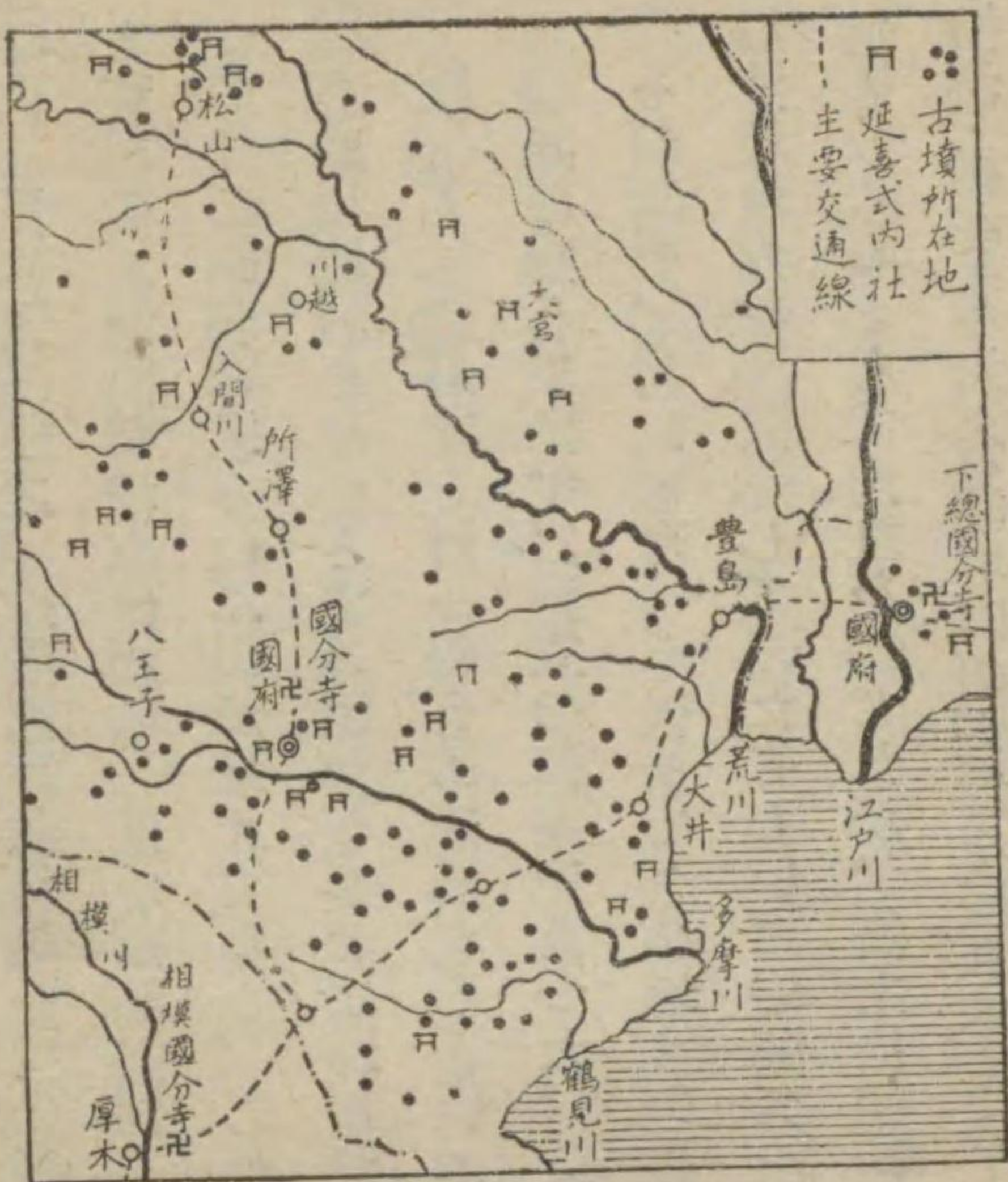
東京の近郊、即ちそれは一言にして云へば武藏野である。西には秩父・小佛の山々を遶らし、東南には東京灣を控へ、東北に利根の水脈あり、荒川は中央を貫流し、多摩川はその西南を流れてゐる。多摩川の南岸地方を除いては、殆ど平坦な洪積層の臺地が中央に展開し、その單調を破つて所々に窪地もある。それ等は多く地下水を湧出して池をなし、附近の小川の水源になつてゐる。井ノ頭・三寶寺・善福寺・妙正寺等の池や神田上水・石神井川等は即ちそれである。西、秩父の山麓に起つて東、東京灣に没するまで極めてゆるい傾斜をなし、上部は俗にいふ赤土即ちロ

ムで、最上部は眞黒な腐植土で掩はれてゐる。太古は森林であつたとも、草原であつたとも云はれるが、今では雑木林がその名物になつてゐる。東郊は之に反して沖積層の低地で今猶蘆荻沮洳の地もあり、大分趣が異つてゐる。

此地方に於ける原始時代の有様を想像すべき遺物・遺跡の分布状態をみるに、貝塚は所謂多摩の横山の南端なる海岸地方の程ヶ谷・鶴見方面、中央の臺地の縁邊たる大森から高輪・芝・麴町・本郷・上野・田端・王子邊にかけての方面、その東の荒川・利根の水脈の流域地方たる岩槻附近、又國府臺・市川邊から千葉へかけての下總西部の臺地に其の頃の遺物とともに散在してゐる。各種の石器や所謂アイヌ式・彌生式等の土器は、各臺地の縁邊、殊に川池泉等水に濱した所に多く發見せられる。後世まで萱原や雑木林でその名を誦はれた最狹義の武藏野即ち府中・川越・田無間の臺地には殆ど發見されない。

所謂大和民族の勢力の東漸によつて、西の方から開けて來た日本古代の文化は、關東に入るにあつて、一路は東海道方面から相模を経て房總へ進み、一路は東山道方面から上野・下野へと進んだとすれば、其の中間に位する武藏は比較的他より遅れたとも見られよう。文献の傳によつて臆けに知らるゝ頃、武藏地がで重きをなした氏族は天穗日命の子孫出雲臣の一族であつた。これは附近の國造が稱する系統から考へると上總・下總方面から後の埼玉郡・足立郡の地方に入り、大宮の附近に本據を据ゑたものらしい。かくして成務天皇の御代に定められたといふ无邪志の國造は出雲臣の祖二井之宇迦諸忍神狹命の十世の孫兄多毛比命であつた。當時は後の武藏國のうちでも荒川の上流秩父地方は別に一區を劃し、知々夫の國造があつたのである。國造本紀にはこの二つの外に胸刺國造といふのが見えてゐる。これについては、後に武藏の國府が置かれた多摩郡、即ち多摩川流域を中心とする國かとも云はれるが、國造本紀の此記事は同一時に對立してあつたのではなく、无邪志と同一のものであらうといふ説に賛成したい。此等の國造は地方土着の豪族で、朝廷に對しては半ば獨立の領主であつた。武藏國造家は直を姓とし、笠原直・物部直・大伴直等皆その流で、何れも可なり後までこの地方の豪族であつた。このうち物部直の族は主として入間川流域地方を本據としてゐたらしい。安閑天皇の御代に至り、國造笠原直使主の同族小杵が、國造とならうとして内訌を生じたが、使主は朝廷に訴へて小杵を誅し得たので、其の御恩を謝して横渟・橋花・多氷・倉樫等四の屯倉を置き奉ることとなつた。此等朝廷の直領地となつた屯倉は多摩川流域地方であつたであらう。そして恐らくそこには朝廷の役人が派遣されたことであらうと思はれる。

大體この時代の遺蹟・遺物にして、この時代の地方の状況を窺ひ知る資料たる古墳も、原始時代の石器・土器と近い分布を示してゐる(第一圖参照)。これも自然の地理的状況から當然のこと



第一圖

である。此等遺蹟・遺物の上からみれば、この地方の文化は上野・下野の邊に比べれば稍劣つてゐた様に思はれるが、それでも可なり發達してゐたらしい。東京市内に屬するが、駒込の富士や芝公園内の瓢墳の如き稍々みるべきものもあり、此等によつて又この方面に可なりの勢力者が散在してゐたことが窺へる。

孝徳天皇の大化二年(646)に至り、その改新によつて諸國ともに從來の國造・縣主等を廢し、國郡の制を布かれて國司・郡司を置かるゝこととなつた。そこで先づ國司を任じて國家所有の公民大小所領の人衆の戸籍を作り田畝を校せしめんとせられたのである。しかし改革の

當初各地方には國造其他舊來土着の地方豪族の勢力も根強く、直ちに完全な中央集權的政治が行はれ難い様な事情の所もあつたであらう。多くの地方では從來の國造は郡司として依然舊勢力を維持し、中央から任命されて下る國司は、これ以前にも各地にあつた朝廷の直領地を治め、兼ねて國造等地方豪族を監察する様な任務を持つてゐた國クニノミコトモチ宰サニ或は國クニノミコトモチ司シといつたものに、實際に於て近い状況にあつたのではあるまいか。かくして五十餘年を経、文武天皇の大寶元年(702)所謂大寶令の制定せらるゝ頃に及んで漸く比較的完全に中央政府と連絡した地方政治が確立せられたのではなからうか。當時武藏にあつては荒川・入間川の流域たる後の足立郡の大宮を中心として、舊國造の勢力が依然として存し、これに對して遠來の國司は、從來朝廷の直領地たる屯倉のあつた多摩川の流域を以て、在來の勢力を延長して新政を行ふべき本據と定めたものではあるまいか。それで殊更に舊來の歴史的勢力のあつた地方を避け、秩父國造の居た秩父にも、足立郡の大宮にも置かず、多摩郡なる今の府中町の地に國府を置いたのではあるまいか。さもなければ、舊來の關係上依然東山道に屬してゐた武藏が國府は、當然早くから開け且交通上便宜な武藏の北部か中部に置かれたであらう。國造家の後にも猶足立郡に國造として存したこと―たとへ地方の政治から離れて、單に古いまつりごとの形式の一部分たる神祇の祭祀を行ふ宗教的・儀式的の存

在乃至は一種の名譽的表象となつたとはいへ——は、これと全く無關係であらうか。

國府は奈良朝時代に至り、何事も唐制を模倣して大規模に形式を整へる時代にあつて、大中央集權の勢威を誇示すべく、最も整へられたことと思はれる。中央にあつては平城京の經營あり、諸の大寺院を始め大佛の造立もあり、莊大華麗なる天平時代の偉觀を呈したが、地方に於ても亦これに伴つて、國司の廳も厳しく構へられ、國分寺の大伽藍は建立せられ、金堂・講堂・七層の大塔まで燦として冲天にかゝやいたことであつたらう。

しかしこれは決して地方一般の文化や經濟狀態が發達した結果として自然に出來たわけではなかつたのである。従つてなほ東國地方一般の狀況は極めて荒涼たるもので、概して人口稀薄で到る處に茫漠たる原野が多く、たゞ泉の邊、河川湖沼の沿岸等の平野丘陵等農業と住居とに適する様な所には、稍聚落が散在して居た位なものであつたらう。これは和名抄等に見える郷名の分布などからも想像出來る所である。此等の中でも、もとより國府とか古來由緒ある神社或は佛寺の附近等には、國衙の官人や、舊來の地方豪族・神人僧侶等で可なり人家の集つた場所もあつたであらうが、勿論都市などと稱し得る程のものではなく、市場をさへ備へる程に發達したものは殆ど稀であつたらう。

かくて茫漠と續いてゐた原野にも、人口の増加に伴つて、灌漑の便がある所には次第に開墾が行はれ、農業の經營によつて發展しようと思つたものは之に従事し、又水利の悪い荒野丘陵等にあつては牧畜を行ふものも増加したであらう。譜第を以て郡司に任せられる様な地方古來の豪族や、土地の開墾・莊園牧場の興廢に關して權能を有した國守として來任したものなどで、未開不毛の地を開き、莊園を起し、子孫をして之を經營せしむる等のものも生じ、又自ら牧を營み或は官牧の監となつて土着するものも少くなかつた様である。中央から下つた貴族の子孫などには舊來土着の地方豪族の勢力と合體し、之を繼承したものもあつたであらう。此等は土着し土地を領して住人となり、やがて兵仗を帯びて武門武士となつたのである。稍時代が下つて武相の野に蔓延した所謂武藏七黨などは其の著しいものである。彼等は皆廣大なる土地を領有し、次第に中央の權門勢家と結び、この中央との關係によつて、社會的には其地位を高め、政治的經濟的には其郷國に權威を伸長し領有を確實にしようとする様になつた。こゝに莊園といふ特殊な制度が發達して來たのである。

桓武天皇の延暦十一年軍團兵士の制が廢せられ、地方の武備もやゝ弛んだが、後之に代つて地方の警戒に任すべく檢非違使・押領使・追捕使等が置かれる様になつた。彼等地方の有力者にして、

之に任せられるものもあり、或は又、京に上つて衛府に仕へるものもあつた。蝦夷と境を接し、常に我北進勢力の先鋒として活動した東國人は又廣濶なる山野に自然の恵をも享けて、馬に騎り、弓箭を帶び、常に武を練る者も少くなかつた。彼等は此境涯にあつて、京洛の貴族が平安の小天地に蹋踏して文弱に流れ、優柔怯懦なるに似ず、未開の廣野に新天地を開拓せんとする勇健濶達なる氣象を有してゐた。こゝに所謂武門武士を生じたのである。彼等住人は元來田地・牧場の開發管理經營即ち直接間接に農業生産にたづさはり、こゝに其經濟上の根底を有してゐた故に、勢ひ土地の景況に従つて家毎に各々村落に分散居住し、社會的經濟的に小單位を以て生活しなければならなかつた。従つて一地點に多數のものが集住する都市的生活は出來なかつたのである。此等土着豪族の分散居住した狀況は武藏七黨の苗字などによつても窺ひ知られる。もとより彼等の間にも惣領分家其他の血縁關係等によつて團結を作り、何々黨と稱し、一朝事ある時には、旗頭をいたゞいて出動する様なことはないでもなかつたが、概してその依存する經濟狀態に基いた社會組織から分裂を重ね、割據的状況にあつたといつてよからう。今其等の地方豪族の生活狀態を文献や遺跡によつて想像するに、彼等は普通自己の領有管理經營する地域のうち、土地高燥要害堅固で、廣濶なる田地牧野を瞰下し得る様な丘陵の上或は山岳の中腹に居館を構へ、或は又平坦の地方にあつては堀を周らし、土居を築き、城戸キドを構へ、矢倉を設け、以て警防に備へた様である。此等の領主に從屬する數十百の家ノ子郎等は館の内外に居住し、農牧に使役さるべき家人奴婢農民等は其附近に聚落をなして住んでゐたのであらう。猶又武器其他日用品を製作する工匠の輩をも住せしめたものもあつたであらう。即ち後世桃山時代以降に於て見らるゝ如き大規模な城下町の萌芽は實に武門武士の發生とともに生じたといつてもよからう。而して此等の聚落にあつては、殆ど其の範圍に於て自給自足し直接に物々交換して用を便するもの多く、未だ市場を備へるには至らなかつたのを普通とする様に思はれる。鎌倉に幕府が開かれる頃まで、一般に此の地方は此の如き小村落散在の狀況を以て此の時代を經過した様である。

此の如き状況にあつては、彼等の各家々が如何に富裕であらうとも、個々の武人が如何に剛強であつたとしても、社會上政治上の大勢力とはなり得ず、京に出でては僅かに東國の邊民として權門勢家の願使に甘んじなければならなかつた。然るに此等のばらばらな小單位を打つて一丸となし、一大勢力として天下を左右するに至らしめたその核心となつたものは源平二氏の本宗、殊に前者であつた。

上古以來奥羽に於ける蝦夷の鎮定は重大な問題であつたが、平安朝時代の初に一先づ鎮定に赴

くとともに、特殊の地方を除いては軍團の制も廢せられ、其後地方政治頽廢の積弊をうけて、天喜・康平の頃(1035)に至つては、俘囚頼時・貞任等の亂起るに及んでも、官征するに良將を缺き、諸國派するに兵なく、送るに糧なき有様となつた。幸に鎮守府將軍源頼義を陸奥守に任じ、その私恩を施して地方の豪族を集むるなど、臨時の方策を以て亂を鎮定することが出來たが、こゝに武人執權の端緒は開かれたのである。當初は猶頼義・義家等も中央に於ける大勢力とはなり得なかつたが、次第に此等の武將と地方武士との間に特殊な固い主従關係を生じ、それが遂に嵩じて、この團結した勢力はやがて東國の邊陲相模鎌倉に幕府を開き、武將頼朝をして天下に號令せしめ、武家政治七百年の基をたつるに至らしめたのである。

鎌倉に幕府が開かれてから、頼朝を輔けてこゝに至らしめた關東の武士(それは多く武相の武士)にして、或は守護として、或は地頭として全國の各地に散在したものもあり、或は又幕府の要路に立ち、鎌倉に邸宅を構へて住むものもあつたが、猶多くは平常舊によつて地方散在の館に住し、時々京・鎌倉に番上勤仕した狀況であつた。此の如き狀況を以て前代と大差なく、鎌倉時代百五十年間をも經過したのである。

然るに元弘年中に至り、後醍醐天皇の幕府御討伐によつて關東の狀況に動搖を生ずることになつた。關東の動搖は先づ新田義貞の舉兵に始まる。始め事の起るや、關東の武士は何れも幕府の軍に従つたが、彼の舉兵によつてこれに従ふものをも生じ、遂にその南して鎌倉を攻むるにあつて、久米川・小手指原・分倍河原・關戸の戦となり、沿道の諸地に少からず影響を與へた。かくして元弘三年(1333)五月鎌倉は陥り、北條氏亡び、建武中興の大業は成し遂げられたのである。しかし間もなく、武家政治の昔を希ふ一部のものが、足利尊氏を中心として公家中興の政治に叛旗を翻し、その持明院統を擁立し奉るに及んで南北對立の姿となり、日本全國津々浦々まで、兩軍の何れかに屬して攻争が絶えないことになつた。關東は新田・足利兩氏を始として主なる武家の本據地であつたから、屢々攻争の巷となつた。本書の範圍では、正平二十三年川越に平一揆の蜂起した如き、矢口ノ渡に新田義興の誘殺されたるが如き即ちこの間の出來事である。かゝるうちにも足利氏の代表する武家方の勢力が旺盛となり、實際上再び武家政治の世となつた。しかし足利氏は持明院統を擁立して吉野の朝廷に對抗する關係から武家政治由緒の地たる鎌倉に本據を据ゑ兼ね、幕府を京都に置いた。而して歴史的中心地鎌倉には關東管領を置いて武家の本源地たる關東を支配せしめることとし、尊氏の子基氏を以てこれに充てた。

然るに各地の動亂に寧日なき幕府にとつて、その股肱としてこの要地にある鎌倉管領は、次第

に權威を増長して管領を公方、執事を管領と稱し、二代氏満・三代満兼に至り將軍に抗するの氣勢を示す様になつた。

幕府は亦之を牽制すべく執事(管領と稱す)上杉氏を始め關東の諸豪族を後援する所もあつたので、關東北部の諸豪族と鎌倉公方との間には争亂が引續いた。その都度武藏は鎌倉勢の通過地となり、殊に府中はその策源地たるの觀があつた(府中高安寺の條等参照)。こゝに一寸注意すべきは府中・所澤・入間川附近が屢々戰場となつたことである。これは當時關東の中心が鎌倉にあり、これに對抗する勢力が關東の北部にあつて、此等の地點がこの兩者の交通線上に位し、この線と丘陵河川とが縦横に交はる所であつたからである。

鎌倉府は四代持氏の時に至つて先づ上杉禪秀の亂(應永二十三年1426)あり、相模・武藏附近の諸豪族は何れかに屬して關東の諸地彌々亂れ、次いで上杉憲實等のことによつて永享の亂(永享十年1438)となり、京軍は鎌倉に侵入し、公方持氏は敗れて翌年二月自殺し、四代八十年にして鎌倉管領は亡び、關東は中心を失つてしまつた。然るに上杉氏は下、關東の諸氏に對しては管領(執事)として威重く、上、幕府の覺えもよかつたので、憲實が幕府の命を奉じて關東の政務を行ひ、鎌倉府の實權を掌握する様になつた。憲實は間もなく引退して弟備前守が管領の職に就いたが、

久しからずして結城氏朝等反上杉氏の一派が持氏の遺孤安王・春王を奉じて下野・常陸の地方に起つた。これが所謂結城合戦である。關東の諸豪族は二分して各地に攻争し一時大亂となつたが、遂に上杉氏の勝利に歸し、その勢力は關東に確立するに至つた。安王・春王等は捕へられ京都に送られる途上美濃に斬られた。其後末弟永壽王は將軍義教の死とともに、幕府の方針が變つた結果、結城落城の後九年、寶徳元年(1449)關東に下向して鎌倉に入り關東管領(即ち所謂鎌倉公方)を繼ぐことを許された。しかし此間に既に關東の大勢は上杉氏に歸してゐた。永壽王は後元服して成氏と稱し、憲實の子憲忠がその執事(即ち所謂管領)となつた。ところが暫くにして此の兩者は不和となり、遂に成氏は不意に憲忠を攻め殺してしまつた(享徳三年1454)。こゝに於て上杉氏は成氏を討つ軍を起し、上杉持朝・長尾昌賢・太田資清等は鎌倉に攻め入らうとしたが、途上島ヶ原に撃退された。よつて持朝・昌賢等は幕府に請うて成氏を討つことを許された。成氏は康正元年(1455)正月上杉氏を討つため鎌倉から武藏府中高安寺に出陣し、分倍河原の附近に戦つてこれを破つた。上杉方はその將憲顯(秋)創を蒙つて高幡で自殺し、持朝の子顯房も戦死して散々の敗北となつた。かくて持朝・昌賢等は常陸に走り小栗城に據つたので、成氏は小田・築田・小山等常總の諸氏をして之を破らせた。昌賢等上杉方は其後越後の守護上杉定昌等の援を得て下野只木

山に籠つたが、こゝも攻め落され、走つて武藏埼玉郡騎西城に據つた。成氏は下總古河城に陣して上總・下總・武藏・相模等の兵を募り、これを討たうとしたが、幕府の軍が鎌倉に攻寄せると聞き、鎌倉に歸つた。然るに幕軍來り攻むるに及んで鎌倉を保つことが出來ず、走つてまた古河城に據つた。其後は遂に鎌倉を恢復することを得ず、鎌倉府は全く分散してしまつたのである。

こゝに於て常總地方の豪族を後援とする成氏と越後・上野・武藏・相模・伊豆を根據とする上杉氏とは大利根の水脈を挾んで東西相對峙する形勢となつた。幕府は主を失つた關東に門地高き一族を置き、上杉氏を助けて古河公方に對峙せしめようとし、澁川義鏡を下して足立郡蕨城に居らしめた。しかしその聲望は遠く成氏に及ばなかつた。そこで義鏡等は更に幕府に請ひ、將軍義政の弟政知を下して關東の主と仰ぐこととなつた。政知は駿河の今川氏等を後援とたのむ關係などから鎌倉に入らず、伊豆の堀越に住した。堀越卿所・堀越公方など稱せられるのが即ちそれである。従つて鎌倉府の再興を見ることが出來ず、關東はいよゝゝ割據對立の狀況となつた。當時山内上杉房顯の臣上野白井の長尾昌賢と併んで、川越の扇谷持朝の臣に太田資清・持資父子の傑物があつた。持朝が入間郡仙波の館から三芳野郷へ城を移すのと前後して、持資は康正二年兩總の敵に對して江戸に築き、長祿元年四月に落成して品川の館からこれに移つた。江戸城の成るとともに父資清の築いた岩槻城も同年三月に落成し、成氏方の古河・關宿・菖蒲・野田其他下總方面の諸城に相對してこゝに全く對立の形勢が定まつたのである。

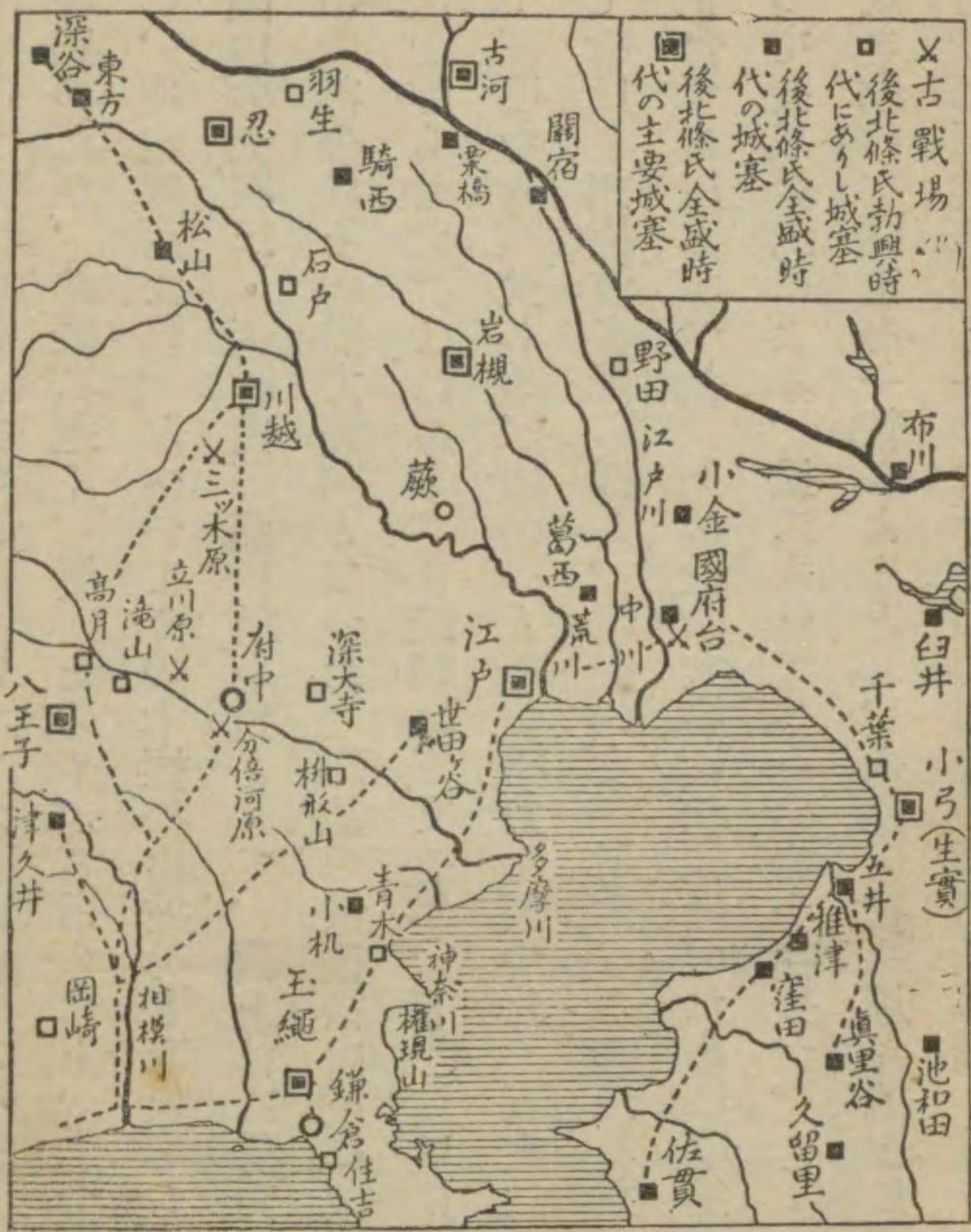
かゝるうちにも房顯(山内)・持朝(扇谷)等相次いで歿し、山内家は顯定がつぎ、扇谷家は政實がついだが、政實は間もなく死して弟定正の代となつた。然るに其後上杉氏の間には内訌が起り、昌賢の歿後には鉢形城を中心として武相にわたる其子景春の亂あり(文明九年十年)、山扇兩家の争によつて太田道灌の遭難あり(文明十八年)、その子資康のかへつて顯定によるあり、關東の混亂は彌々複雑になつた。かくして山扇の兩家は、長享二年二月には相模實蔭原に、同十一月には高見原に戰つた。其後明應三年定正は伊豆の北條長氏の援を得て顯定と荒川に對陣中落馬して死し、其嗣子朝良が兵を收めて川越城に歸る等のこともあつたが、兩家の争は繼續され、古河公方と鼎立の姿であつた。しかも後には、古河公方對上杉氏の争よりも兩上杉の争の方が主となり、一方は古河に通じて他方を討つなどといふ様に變化して行つた。かく兩家の南北に分れての對峙中、北、山内家の背後越後には長尾爲景起り、顯定の死後は長尾景春も之に應じ、南、扇谷家の背後駿河には伊勢長氏起つて伊豆・相模を略することとなつた。しかも猶兩上杉氏は父祖以來の内争を續け、次第に自ら滅亡へと進むのも氣づかなかつたのである。永正元年(1501)扇谷朝良は駿河

の今川氏親・伊豆の北條長氏の援を得て、山内顯定と立川原に戦つて敗れ、遂に川越城も圍まれて翌春和して江戸に退くに至つた。

次で關東に起つた重大な事件は北條氏（鎌倉時代の北條氏に對して後世「後北條氏」といふ）の勃興である。その初代長氏（初め伊勢氏を稱す、入道して早雲といふ）はもと駿河今川氏の部將であつたが、延徳三年（1491）堀越公方政知の死するや、その内訌に乗じて、その子茶々丸を討つて伊豆を略定した。かくて明應四年（1495）には大森氏を逐つて相模小田原城を奪つた。これを手初として五代約百年の間に、歴代の英主相ついでその奇抜なる戦略と、當時にあつては比較的整つた軍隊とを以て舊勢力上杉氏を侵し、巧妙なる外交と婚姻政略とによつて、よく武相土着の舊豪族を懐柔し、周到なる民政を行つて民心を收攬し、兼て經濟的根柢を確實にしつゝ、關東の大部分を領有するに至つた。今その經過の大要を記せば凡そ次の如くである。永正九年（1512）には三浦氏を逐つて相模岡崎・住吉の二城を取り、同十五年には新井城を落して同氏を亡し、全く相模を領有した。翌十六年（1518）早雲は伊豆韮山に卒したが、其子氏綱よくこれをついで、大永四年（1524）には、上杉朝興を破つて江戸城を取つた。北條氏は安房の里見氏・下總の千葉氏・古河公方・上野武藏の上杉氏等が何れもこの内訌によつて地を顧みる暇のない間に、早く一敗共同して根柢を養ふこと十餘年、天文六年（1537）上杉朝興の死後其嗣子朝定と戦つて川越城を奪つた。兩上杉氏・古河公方等は漸くにして北條氏の恐るべきものなるを悟つて力を併せて川越の恢復を圖つたが、時既に遅く、屢々そのやぶる所となり、天文十五年の戦に於て遂に憲政・晴氏は敗走し、朝定は討たれ、かへつてその本據松山城をも奪取せらるゝことになつた。かゝる勢に恐れて、瀧山の太石氏・天神山の藤田氏を始として、舊上杉氏勢力下の諸豪の降り投するもの多く、武藏の大部分はその勢力範圍となつた。川越の役後松山城には塀和氏を川越城には大道寺氏を置いて之を守らせた。これよりさき氏綱は天文七年（1538）里見氏と小弓御所とを下總國府臺にやぶつて義明を敗死せしめ、總州へもその勢力を振つた。天文二十三年（1554）には氏康は古河を陥れて晴氏を相模波多野に移し、氏康の女の所生なる義氏を立て、公方とし、古河公方の勢力もその包含する所となつた。上杉氏は次第に北條氏のために壓迫せられ、天文の末山内憲政は越後に走つて長尾景虎により、遂に永祿元年その家を譲つた。こゝに景虎は上杉氏を冒し、晴氏の嫡子藤氏を助けて關東を一統しようとし、永祿の初め屢々關東に侵入し、常陸の佐竹・安房の里見等とも通じて北條氏と戦つた。この頃甲斐の武田氏も漸く盛になり、南は駿河方面に北條氏と境を争ひ、北は信濃・上野方面に上杉氏と對峙し、この三氏を中心として、各地大小の豪族は或は結び或

は離れ、背叛常なく、關東の混亂はその極に達し止む所を知らぬ有様となつた。従つて北條氏は

里見・上杉・武田を始め殆んどすべての四圍の諸豪と交々戦を交へた。夫等の中で著しいものは、永祿四年の上杉謙信の侵入、同十二年の武田信玄の侵入、永祿七年の里見氏との戦等である。松山城・瀧山城・國府臺等の戦は此の間に起つたのである。かゝるうちにも、天正元年（1573）には武田信玄卒し、同六年には上杉謙信も卒して北條氏はその全盛時代を現出した。



圖二第

こゝに後北條氏盛時に於ける領内の状況を一瞥するに、その最大中心は相模小田原にあり、本

書の範圍では、地方的中心として西に八王子城、南に小机城、東に江戸城、北に川越城・岩槻城・松山城等があつた。八王子城には西南武藏の豪族大石氏(上杉氏の被官)を繼承して當時の北條氏では屈指の人物であつた氏照(氏政の弟)があり、西の方武田氏に備へるとともに西南武藏の鎮であつた。小机城は、氏政の子氏堯に屬して笠原氏が之を守り、相模東部の中心玉繩城と江戸城との連絡をなし、江戸城には遠山・富永等があつて房總に備へ、川越城には大道寺氏があつて武藏の中央を鎮し、松山城には堀和氏等があつて上野方面を押へ、且鉢形方面との連絡を保つて居たのである。此等の諸城を連ねて主要な交通路があり、その途上には適宜數里をへだて、宿驛を設け、傳馬を備へ、市場をたて、その繁榮を圖るとともに、物資をこゝに集めて戦時の徴發に便したのである。此の頃から地方の小豪族は兼併されて、此等の要地に集められ、その背離を防ぐとともに、事變に備へたから城郭が次第に大規模となり、従つて地方散在の小さな城館は減少して行つた。城郭に武人が多數集住するとともに城下には、工匠も集め置かれ、市場も必ず設けられ、かくして次第に都市が成生發達し、又地方一般の經濟状態も進歩發達して行つた。八王子の如き川越・岩槻の如き世田ヶ谷・松山の如き何れも好個の事例を示してゐる。

かくて天正十年の春、織田信長が武田氏を亡して其の舊領を收むるに及び、北條氏はその部將

瀧川氏等と領土を接する様になつたが、其の死後更にこの勢力が豊臣秀吉に繼承せられて、その麾下と領域に事を構ふるに至つた。こゝに秀吉の大規模な北條氏征討の軍が起されることになつたのである。天正十八年(1590)の春、東海道から進んだ本軍は四月の初小田原城を圍み、北陸道方面から進んだ前田・上杉等の諸軍や又淺野・木村等の諸軍は關東各地に散在する諸城を攻めた。此等は大抵其の主が小田原城に籠つて留守なので、戦はずして降り散するものも少くなかつた。そのうちで比較的抵抗したのは、上野の松井田、武藏の忍・八王子・岩槻等であつた。小田原は籠城三ヶ月の後七月の初に至つて開城し、氏政・氏照等は自盡し、五代九十餘年にして北條氏は亡びてしまつた。

後北條氏の滅亡後、關東の地は徳川家康に與へられた。家康は八月一日(天正十八年八月一日)江戸城に入り、やがて舊北條治下の諸城へ其部將を配置し、着々新領土の經營を進めた。

後北條氏の滅亡と徳川氏の入國とは、關東殊に武藏・下總方面に於てすべてが中世的状态から近世的状态に入る甚しい變化を生ぜしめた。即ちその最も大なるものは、中古武家勃興以來この方面に土着散在した地方豪族が北條氏とともに失脚し、これに伴つて地方的中心たる小城塞が廢止せられたことである。武藏七黨・千葉六黨などが勃興した平安朝の頃から此の地方に散在した形を残して居つた。

然るに北條氏の滅亡によつて、これに屬して居た土着の豪族は一掃せられ、徳川氏が入國し、其の臣下を封置するに及んで、全く新なる支配者が一團に纏つて、他國から比較的大きな中心地へ移つて來た。而して此等は種々の事情の下に、もはや地方へ分散住居することはなくなつたのである。かくて、地方の政治・軍事・社會・經濟の中心に異動を生じ、ひいて地方一般の狀況を變化せしめることになつた。その一つはこれ等の要地を連絡する交通路が變つたことである。この理由の一つとして兩者の勢力範圍の相違による要地の變化を擧げてよからう。即ち彼にあつては伊豆より起つて關東(狹義)に入り、箱根の嶮を背にして小田原を本據とし、一面甲斐・駿河方面と對抗しつゝ東北に向つて領土を擴め、その最後に至るまで、常に四隣と交戦状態にあつた。従つて其の領域の形は關東の西部に細長く、この形勢に従ひ必要に迫られて其の要塞は配置せられ、これ等を連ねるべく交通線が次第にきまつて行つたのであつて、始めから理想的に計畫した

ものではなかつたのであつた。

然るに徳川氏にあつては、豊臣氏といふ大勢力を背景とし、殆ど全關東にその勢力を行ひ得たとともに、新に此の大領土に封ぜられたのであつたから、比較的自由に計畫施設することが出来た。それで其の本據を全關東の中心江戸に置くとともに、それに從屬する諸城の配置はこれを中心として計畫されたのである（もとより殆ど全部前代の上杉・北條若くはそれ以前のものを用整理したものではあつたが、其等は何れも城郭としての地理的條件に適つたものが多かつた）。しかも當時は一般に割據分裂的であつた前の時代とは稍、趣を異にし、比較的大規模な統一といふ機運が各方面に動いてゐた頃ではあり、且他日大いに爲すあらんとした徳川氏のことであつたら、交通の如きも既に全國的な立場から江戸を中心として計畫されたのである。後の所謂五街道の如きも、大體この頃に自然と定まる様になつた。そして又一方此等の交通路を顧慮して城塞も廢止縮少或は修築せられたのである。本書の範圍では小机・八王子・松山・小金等の諸城が相次で廢されたのも、一因はこゝにあつた（但此等の諸城は城そのものも新時代には稍、不適當なものであつたことも、もとより一因ではある）。

かくして、關ヶ原の役（慶長五年1600）後は、曾て豊臣幕下の一大名であつた徳川氏は、天下の實權を掌握し、次いで征夷大將軍（慶長八年1603）に任ぜられ幕府を江戸に開くに及んで、江戸は天下の覇府となり、前記の江戸中心の形勢は愈々動かすべからざるものとなつた。こゝに本書が取扱つた地域が、郊外として特殊の發達を始めることになつたのである。かくて江戸には所謂八萬騎の旗下の諸士は勿論、天下の諸侯は悉く參勤し、こゝに邸宅を賜はつて住する様になり、従つて又經濟的にも一大中心地となり、海陸の交通はこれを中心として次第に盛になつた。陸路では東海道を最とし、中山道・日光道中（先は奥羽道中に連る）等が殊に繁榮した。此等を始め主な道々には處々に宿驛が設けられ、人馬繼立の制が整へられた。宿驛には大抵月六齋等の市が立てられた。これ等の宿々は江戸時代三百年を経て全く町になつてしまつた。東海道の品川・大森・川崎・神奈川の如き、中山道の板橋・蕨・浦和・大宮の如き、甲州街道の高井戸・府中・日野・八王子の如き即ちそれである。此等に立てられた市場の變遷は經濟史研究上極めて面白い資料を提供してゐる。

江戸の近郊は大抵幕府の直領（當時御料といひ俗に天領といふ）で、その間に僅かの旗本知行所や大名の領地や社寺領が介在してゐた。幕府は北條氏のあとをついで、足立・埼玉・葛飾方面の低濕地と多摩・豊島方面の高臺との開墾に努力した。利根川方面の治水と武藏野臺地の水道とは一

面江戸の都市計畫事業の一部でもあつたが、又それ等との關係も見逃すことは出来ない。江戸の發達につれて近郊の社寺も立派になつた。大師・地藏・阿彌陀・觀音等の何ヶ所第何番といふ様な組合せもこの中期に出來たものが多いが、明治維新の神佛混淆分離や一般世態の變化とともに衰へたものも少くない。

維新後江戸が東京となつてからのことはこゝには略する。(鳥羽)

各 説

一 品川・大森・池上方面

品川臺場 東海寺 品川寺 海晏寺 大森貝塚 本門寺

東海道五十三次の一驛たる品川宿は、最早近代文化の侵蝕に宿驛らしい特色は失はれ、たゞ江戸繁昌記・江戸名所圖會・江戸名所花暦等の古書や錦繪などによつてのみ、ゆかしき古を偲び得るにすぎない。交通の要衝としてその名は愈々高いが、史蹟として探るべきものは年と共に減んでゆく。

市電品川終點で下車し、後を仰げば御殿山、前を望めばお臺場、たゞ懐しきものはこれのみ。

品川臺場 東京市 芝區

品川灣に並ぶ六箇の臺場は、西から四・一・五・二・六・三番の順で、品川町の東端洲崎にあつた御殿山下臺場と合せて七つ、幕末海防の遺蹟として名高い。一・二・三は大きくてやゝ沖にある。三

品川・大森・池上方面

番は五角形、他は六角、一邊の長さ五十間乃至九十間餘、面積は大きい一・二番が約一萬三千坪、小さい五・六番が五千四百餘坪である。外面を水面から高さ平均四間餘の石垣で壘み、江戸に面した方に入口が設けられてゐる。品川から洲崎まで十一箇を以て江戸の海岸を掩ひ、聯絡して之を守る計畫であつたが、これだけで中止されてしまつた。其様式と目的とが從來のものゝ異り、歐洲式の、又大砲を用ふることを主眼とした對外的のものである點に於て注目し値する。

外船の渡來漸く繁き幕末に當り、江戸灣も觀音岬方面灣口の防備に努力されたが、種々の原因から充分でなかつた。嘉永六年(1853)米艦が浦賀に來てから、痛切に其必要を感じ、灣口を充分に固める説、品川海岸に石壘を設ける説等もあつたが、技術といひ、財力といひ、急に充分なことをすることが出來ず、當時も不完全とは知りながら、人心鎮撫等の政策をも含んだ應急的處置として、この臺場の築造となつた。米艦の浦賀を去つて二ヶ月後工事に着手し、一・二・三番は八ヶ月を経て翌安政元年四月に成り、他も續いて出來上つた。四番は文久三年(1863)に半ば成り、七番は海中埋立のみで中止された。第三と第六とは現在指定史蹟である。

新國道に沿うて南行すれば、右側に所謂北の天王がある。即ち郷社品川神社(素戔鳴尊・天乃比理乃賣命・宇賀乃賣命・菅原道眞)で、南品川宿品川橋脇の郷社荏原神社(高靈神・天照大神・豐受姬命・素戔鳴尊・手力雄

命)を南の天王と稱するのと相對する。

北の天王からなほ南進し、目黒川を渡る少し手前を右に曲つてゆけば、東海寺の門前へ出る。

東海寺

萬松山 臨濟宗 荏原郡 品川町 元品川宿

寛永十五年(1638)家光の開基で、澤庵を開山とし、本派の觸頭として五百石を領した巨利であつた。元祿の火災以來衰へて、今は塔中玄性院を本堂として見るかきもない。

今、盛時の境域を回顧するに、大門は步行新宿にあつて所謂御成道、中門は北の天王下、御成御門は御殿山下の島の中、西門は遙か西北の居木橋、南門は當山十境の一たる要津橋エツシンの南に當つてゐたらしい。たゞ鐘樓(豁夢樓)だけが十境の形見として遺つてゐる。山手線分岐點附近の墓地には澤庵和尚・賀茂眞淵・服部南郭等の墓がある。なほ寺の東南には寺院が密集してゐる。日什の創建で、所謂品川問答の行はれた舊蹟たる經王山本光寺(顯本法華宗)などもこのうちにある。

再び國道を南すれば、青物横町停留場の直ぐ傍に舊街道に臨んで品川寺ホンセンがある。

品川寺

海照山普門院 眞言宗 品川町 南品川宿 六丁目

江戸六地藏の第一番。その大きな銅像(寶永元年の建立)が通りからすぐ目につく。

品川・大森・池上方面

寺の創建年代は詳でないが、始め金華山大圓寺と云つたのを承應年中法印弘尊が堂宇を建立して現名に改めたと云ふ。東海道三十三ヶ所中第二十一番の觀世音靈場である。すぐ南の龍吟山海雲寺（曹洞宗）の手體荒神は火防と開運とて有名である。その南二町許て右に折れ、電車路と新國道とを横切れば海晏寺門前へ出る。

海晏寺

補陀落山 曹洞宗 品川町 南品川宿 七丁目

門内右に堂宇があり、左に北條時頼の古塔がある。塔は表に「最明寺殿覺了房道崇」裏に「弘長三癸亥年十一月廿二日正五位下行相模守平元帥時頼」とある。其の後に梅若實の像があり、又岩倉具視・松平春嶽等の墓もある。當寺は建長三年（1171）時頼の開基、開山は大覺禪師道隆、本尊は門前の海で捕れた鮫の腹中から出たと傳へる千手觀音（所謂鮫洲觀音）である。中興天叟、慶長元年改宗。

當寺は古來紅葉の名所として有名であつた。

海晏寺を出て間もなく右折して進み、省線々路に突當り。左行すれば大井驛である。大井町には、昔櫻の名所だつた來福寺（眞言宗）・西光寺、江戸砂子が地名の起原をなすとした古井「大井」のある光福寺、安和

大森驛の北の邊を入景坂といひ、その西の丘を木原山といつてこゝに有名な貝塚があつたのである。

大森貝塚

入新井町 木原山

この貝塚は明治十一年モールス氏によつて發見せられた。呼んで大森介墟といふ。土版・石斧・石皿・骨角器・人骨等が發掘されたことは、詳しく發見者によつて報告された。Shell Mounds of Omori (1879) の著が即ちこれである。これが我が國の貝塚が學術的に發掘された始めて、考古學・人類學研究上偉大な影響を遺してゐる。

詳しくは鳥居龍藏氏の「武藏野及其附近の有史以前人骨に就て」（武藏野四ノ一 所載）等參照。

扱踏切を渡つて東し、東海道に出ると不入斗^{イリヤマズ}で鈴ヶ森八幡（延喜式内社で今磐井神社といふ）があり、その北方に慶安四年（1651）以來維新までの刑場址がある。踏切を渡らずに矢口の方へ行く路を南進すれば自然に池上へ出るが、木門寺へは蒲田から池上電車で行く方が便利である。池上停留場から約三町。

本門寺

長榮山大國院 日蓮宗 池上町 下池上

總門は元祿年中（1688）に建てられたもので、本阿彌光悅の所謂一字千字の額「本門寺」が懸つてゐる。石階を上ると正面に樓門がある。

樓門は入母屋造銅板葺五間三戸(特別保護建造物)、左右に仁王像を安んじ、中央に太虚庵光悦筆「長榮山」の額がある。慶長十三年秀忠が乳母正忠院の立願によつて建立したものである。仁王像(傳行基作)は日現が古川薬師堂の別當と宗論して勝つた結果得たものといふ。五重塔(特別保護建造物)は樓門の右にあつて第一・第二層は本瓦葺、他は銅板葺、此も慶長十三年秀忠の創建で、もと祖師堂前にあつたものである。祖師堂は十三間四方、正面に日蓮の像、脇壇に日朗・日輪の像を安置してある。文永十一年(1274)池上宗仲の開創に係り、後慶長年間加藤清正が四十間四方の大堂(日本三大堂の一と稱する)を再建したが焼失し、享保年中に至つて徳川吉宗の喜捨を得て建立したもので、明治になつて大修繕を加へて今日に及んでゐる。釋迦堂には釋迦如來・四菩薩及び四天王を安んじ、天井の雲龍の畫は狩野隆信の筆である。清正堂には清正の像を安置し、明治四十五年三百年祭に當つて建てられた堂前の清正虎狩の銅像は彼の一面を語るものとして面白い。

人のよく知る如く弘安五年(1822)十月十三日、宗祖日蓮は當時池上右衛門大夫宗仲の邸宅であつたこゝに於いて寂せられた。かの「お會式」は即ち忌日に當る。客殿の西なる多寶塔は宗祖の遺骸荼毘所の址、従つて境内に眞骨堂がある。

當山は宗祖が入滅に先つて開堂供養の式をされたのに起る。文保元年(1311)二世日朗により堂宇が大いに修造されて巨刹となつた。遙かに下つて徳川時代には紫衣の勅許も得、寺領三百石、將軍の歸依によつて大いに榮え、以て今日に至つた。

墓地には日朗・日輪・池上夫妻・狩野探幽・星亨等の墓がある。

歸りは池上電車で、すぐ蒲田へ出るもよし、又反對に洗足池畔に勝海舟墓を訪うて、目黒蒲田電車で目黒へ出るもよからう。「費用五十錢内外」(小笠原)

参考 築城本部編「築城史料」

大類 仲氏「城郭之研究」「戦争と城塞」

佐々木忠次郎氏 モールス先生発見の大森貝塚址の保存に就て(史蹟名勝天然紀念物一ノ七)

二 川崎・鶴見と生麥・小机

川崎大師 總持寺 生麥事件の故地 雲松院 小机城址

品川驛前から京濱電車で行く。電車が六郷土手にかゝる邊から左右に櫻樹が多く、花時には駘蕩爛熳の趣を添へる。大師停留場下車、まゆ玉や達磨——共に養蠶に關係がある——をつるし、麥稈細工貝細工等を並

川崎・鶴見と生麥・小机

べた店の立並ぶ路を行けば、少し戻るやうになつて川崎大師の山門に出る。

川崎大師

金剛山金乗院平間寺 眞言宗 神奈川縣 川崎市 大師町

正面の本堂は天保年間、弘法大師の一千年忌に際し再興したもの、堂内では白河天皇の御獻燈といふのが先づ目につく。本堂の他に境内には數棟の堂宇が散在してゐる。

この弘法大師は厄除大師として名高い。厄除大師は近郊に、中野寶仙寺・谷原長命寺・西新井總持寺・白金兩所の高野寺・龜戸龍光寺等があるが、今では西新井のと川崎のとが繁昌して、殊に川崎の大師は幸運にも西新井を凌いでゐる。その縁起に就ては、江戸名所圖會・東海道名所圖會・遊歴雜記・平間寺縁起書等皆云ふ所を一にしてゐる。固より凡てかゝる縁起は純正科學的には信仰をシヤステイフアイする爲に潤色を加へられてゐるとしても、應用社會學的に見て之が今日の信仰の基調を爲してゐるとすれば教化上捨て難いものがある。縁起 昔崇徳天皇の大治年間(1131)源義家の臣で平間兼豊及其子兼乗が戦功に仍つて邑を尾張に賜つた。然るに冤を蒙つて、此地に流され漁獵で生計を立てゝゐた。その内に父は死し兼乗も四十二歳となつた。或夜の夢に高僧が現れて其御告に海上光明の處に網を入れば佛像を得べし、汝信仰して懈怠なくんば災難滅却し當來必ず都率天の淨土へ往くべしと宣うた。高僧は高野大師で、佛像は彼が大唐にある日、未代有縁の衆生を結縁せしめん大誓願を立て、厄除の自像を刻み海中に流したものであつた。果して夢の如く彼は佛

像を得たので、草庵を結んで朝夕供養を怠らなかつた。會々此里に遊化した高野の尊賢上人が彼に力を合せて堂宇を營むことに骨を折つた。天承元年(1131)四月廿一日それが落成して寺は平間をそのまま平間寺と呼ばれることになつた。

縁起に關して新編武藏風土記稿は異説を取つてゐる。即ち本尊は海から平間氏が御救ひ申したのでなくて、元平間村稱名寺の佛像で、川に捨てられたのを、下流で拾つたのだといふ。

扱引かへして再び京濱電車に乗り、總持寺停留場で下車。なほ總持寺へは川崎へよらずに行くならば、省線電車で鶴見驛まで行く方が便利である。總持寺に隣つて花月園の遊園地があり、園中には子育觀音(子生山東福寺、眞言宗)がある。

總持寺

諸嶽山 曹洞宗 橋樹郡 生見尾村 鶴見

曹洞宗の大本山で、元能登國鳳至郡櫛比村にあつたが、明治三十一年一山火災に會つて烏有に歸し、當地に移つたものである。

寺記に據ると、後醍醐天皇の元亨元年(1321)定賢律師が瑩山禪師の徳に欽慕し、その住山開堂を請ひ禪師も之を唯諾して入山せられ、茲に諸嶽山總持寺が誕生を遂げた。當時天皇は特に紫衣を賜ひ、日域無雙の禪苑、

曹洞出世の道場たる綸旨を下し總持寺を擧げて官寺と爲し、寶祚延長の祈願道場に列せられた。加之總持寺は瑩山に次いで、當時洋行歸りの蛾山を得て寺門益々榮えた。綸旨を拜する事五度、門末を開くこと一萬三千、檀信を撮する事百五十餘萬と數字を擧げてゐる。明治三十一年の火災に遭つて、時の貫首石川禪師は大英斷を以て北海の邊陲より鶴見の高陵に移轉再建することにした。遷祖の大禮の行はれたのは、四十四年十一月五日であつた。

衆寮・佛殿・放光殿・紫雲臺・侍鳳館・常照殿等は主な建物で廻廊で連つてゐる。襖地は當代畫工の手になつたもので華麗を極めたものがある。鐘樓は三間に三間半あり、鎌倉式の建築で見るからに遒勁偉大の感を與へる。佛殿は方十二間入母屋二重屋根の禪寺らしい壯嚴な建築である。天氣のよい日には池上邊からその屋根がハッキリ見える。本尊の釋尊を中央に、迦葉阿難の脇士を安置してある。放光殿は十六間に十四間で、茲は位牌堂である。國寶として唐畫の提婆達多と大法被とがある。後者は元祿美術を記念するもので四間に三間半といふ大帷幄である。文字は大乗寺月舟の筆。

又京濱電車に乗り、生麥停留場で下車、東海道に出て神奈川宿の方へ三四町行けば生麥の宿である。

生麥事件の故地

生見尾村 生麥

事變の起つた地點は、生麥宿の西はづれで、遭難之碑が舊國道の海岸寄りの方にある。碑面に左の文句がある。

文久二年壬戌八月廿一日英國人力査遜

殞命于此處乃鶴見人黒川莊三所有之地也

莊三乞余誌其事因爲之歌 歌曰

君流血兮此海塢我邦變進亦其源強藩起兮

王室振耳目新兮唱民權擾々生死疇知聞萬

國有史君名傳我今作歌勒貞珉君其含笑

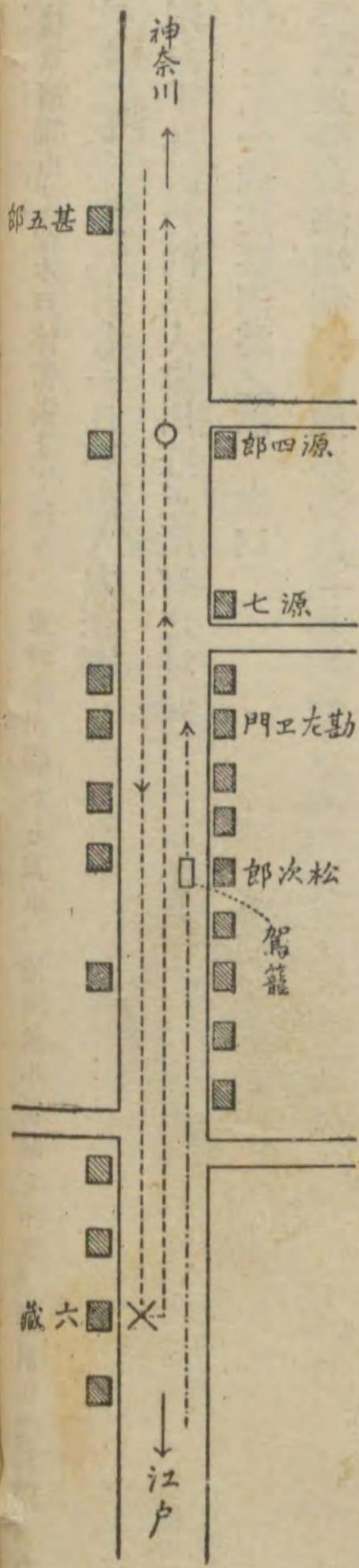
于九原

明治十六年十二月 敬字 中村正直撰

生麥事件については國史大辭典(一九二六頁)に詳細に出て居り、尙先年日本歴史地理學會で此方面に研究旅行を試み、鶴見の人黒川翁(生麥の藥屋の御老父)が實地について親しく説明の勞を取つて下さつた。その時の實地踏査を經とし日頃の研究を緯として、尾佐竹判事が歴史地理(三七ノ二・三・四)に嚴正精密に此殺害事件を書かしてゐる。殊に第四號(三一頁)に於ては、その大要を掲げられてゐる。

文久二年八月二十一日午後二時半頃（西曆一八六二年九月一四日）の出来事、幕府の威信全く地を拂ひ、攘夷論は其頂點に達した世相であつた。將軍上京攘夷斷行の勅使大原重徳が、島津久光に守護されて遙々東下した。椿事はその歸路に起つた。行列が勘左衛門方前（今宇本宮五九八關口常吉）に差しかつた時、馬上遠乗に出掛けた英國人リチャードソン、マーシヤル、クラーク、ボラテールの一行に六藏方前で會し、島津の從士共は將に馬首を轉じて歸らんとする一行に斬りつけ、英人一行は逃れて源四郎方前、今同五四三川端久吉）に至つたときリチャードソンは傷口より腸部脱落して氣力盡き、約二町を距る字並木一甚五郎方附近にて落馬した。追つてきた從士海江田（信義子爵）、奈良原（繁男爵）等六名が更に畑に引きづり込んで慘殺した。是がその事件の顛末である。

残る三名の外人は生命は助かつたやうである。因に此事件は、幕府は翌三年五月八日、薩藩は十一月朔日に、夫々償金を出して事が済んだ。今左に参考にまで當時の軒竝を黒川翁に乞うて茲に掲載する。（以上古谷）



第三圖 生麥事件說明圖

扱京濱電車で仲木戸停留場まで行き、東神奈川驛から乗車、横濱線小机驛で下車。驛前に雲松院がある。

雲松院

臥龍山乾徳寺 曹洞宗 城郷村 小机 愛宕下

本尊釋迦、脇士文珠・普賢。開山は季雲永岳。度々火災にかゝり建物は特に見るべき程のものがない。

本堂の東、山腹の墓地に、小机の城主笠原氏の墓がある。寶篋印塔が七つ程あるが、安政の大地震に倒れたのか立て直したため、各部の入れちがったものもある。又刻字も磨滅してゐて殆ど見えず、僅かに笠原……信勝などに見えるのがあるのみである。

古く神太寺と云つて、字神太寺の地名もこれから起つたと云はれるが、寺傳によれば、大永年間（1521）小机城主笠原越前守信爲（小田原記曰弘治三年死）の開基で、其の法名乾徳寺雲松道慶に因んでかく稱すると云ふ。享祿二年には、信爲亡主早雲寺殿の茶湯料として永五百文を寄附した。永祿四年（1561）から天正四年（1576）までの北條氏康・氏政の寄進に關する朱印状も數通あると云ふ。慶長四年徳川氏から寺領二十石を寄附せられた。其後火災に遭ふこと三回、追々復舊につとめて今日に及んだ。

猶、天正十八年（1590）豊臣氏の禁制・笠原家系圖・ハリス來朝の中用ひた椅子・敷物等を藏する。

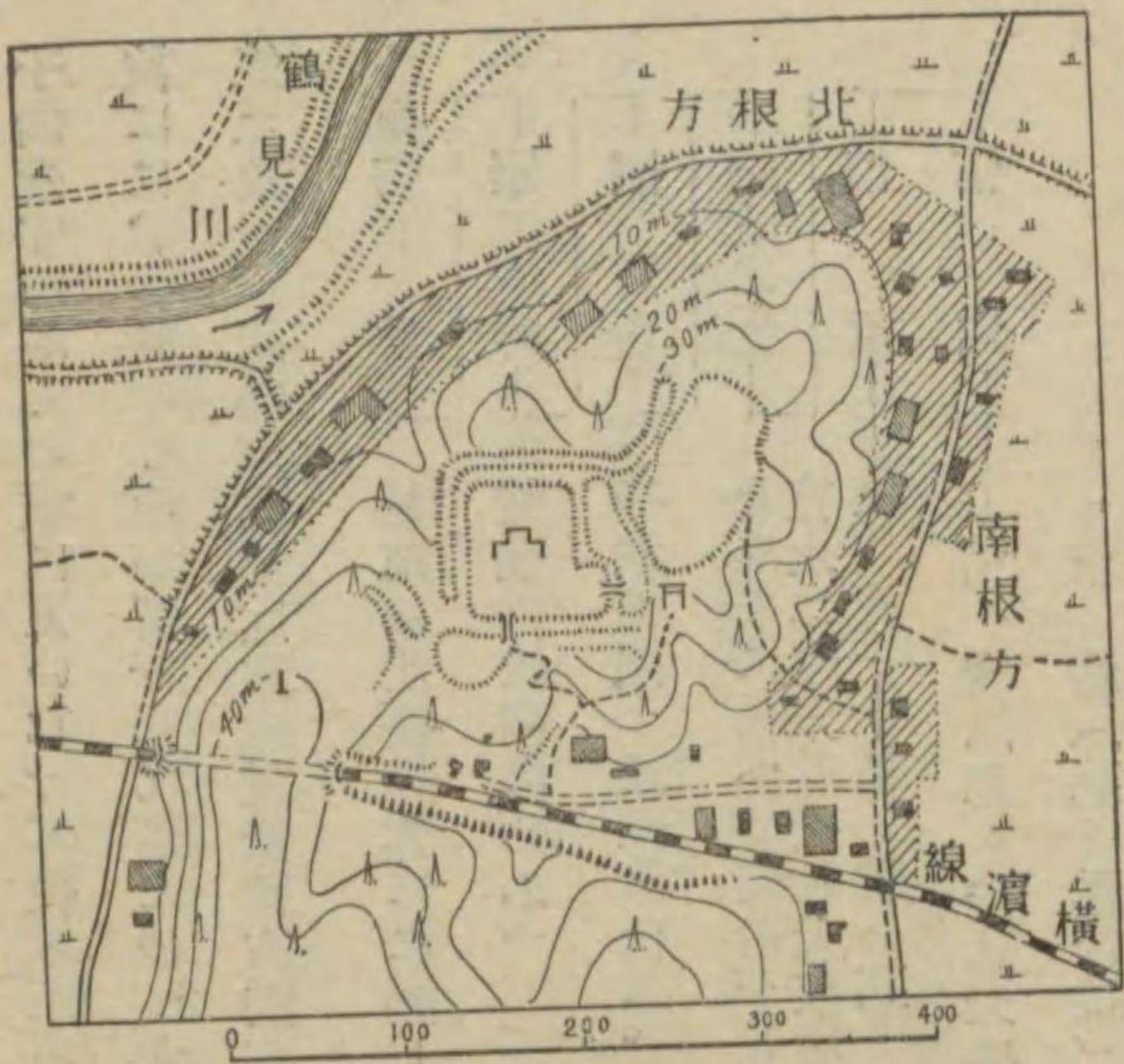
寺を出て、驛前を東西に通ずる大通りを、西に向つて行けば、西北の方に見える山が即ち小机城址である。

約四町行つて、右に曲り、小學校の前を歩き過ぎて、踏切を通つて少し行くと、人家の間に登り口がある。手前の道は西の郭へ、先の道は東の郭へ登る道である。先の道から登つて、東の郭を一巡し、西方の小郭へ入り、更に其西の郭に入り、この南の口から出て、西へ丘の峯傳ひに、横濱線の隧道の上邊まで行き、再び前の南の口まで戻り、こゝから南へ下る道を降りるのが好都合であらう。

小机城址 城郷村小机

城は鶴見川流域の平野に突出した臺地の一端を利用したもので、三方は急な崖、南の方だけが頂の幅十間程の丘脈で丘陵に連つて居る(今この丘の下を横濱線が通つてゐる)。主要な郭は東西の二郭で、ともに石垣を用ひてないから幾何學的に正確な形ではない。東の郭は地形に沿うて不規則な形をしてゐる。三方は急な崖で、殊に西側と北端には人工を加へて、六七十度の急傾斜をなしてゐる。南北約五十間、東西約二十間、土居は大部分壊れて居るが、西南の部分はやゝ完全に残つてゐる。この所を鐘撞櫓の址と傳へる。この郭から、空堀を一つ越して西に、幅五間ほどの細長い一郭があり、更に空堀が一重あつて、西の郭と土橋で連つてゐる。西の郭は、東のに比べると、よほど人工が加はつてゐる。東南端が少し突出してゐるが、大體矩形で、土居も四方の空堀も比較的完全に残つてゐる。虎口は東と南とに各一つあり、ともに幅一間程の土橋がある。大

さは、東西約三十二間、南北約二十間である。猶この郭の防禦のため、その西に堀が一重にあつて、西方の丘脈との連絡を絶つてゐる。



第四圖 小机城址の圖

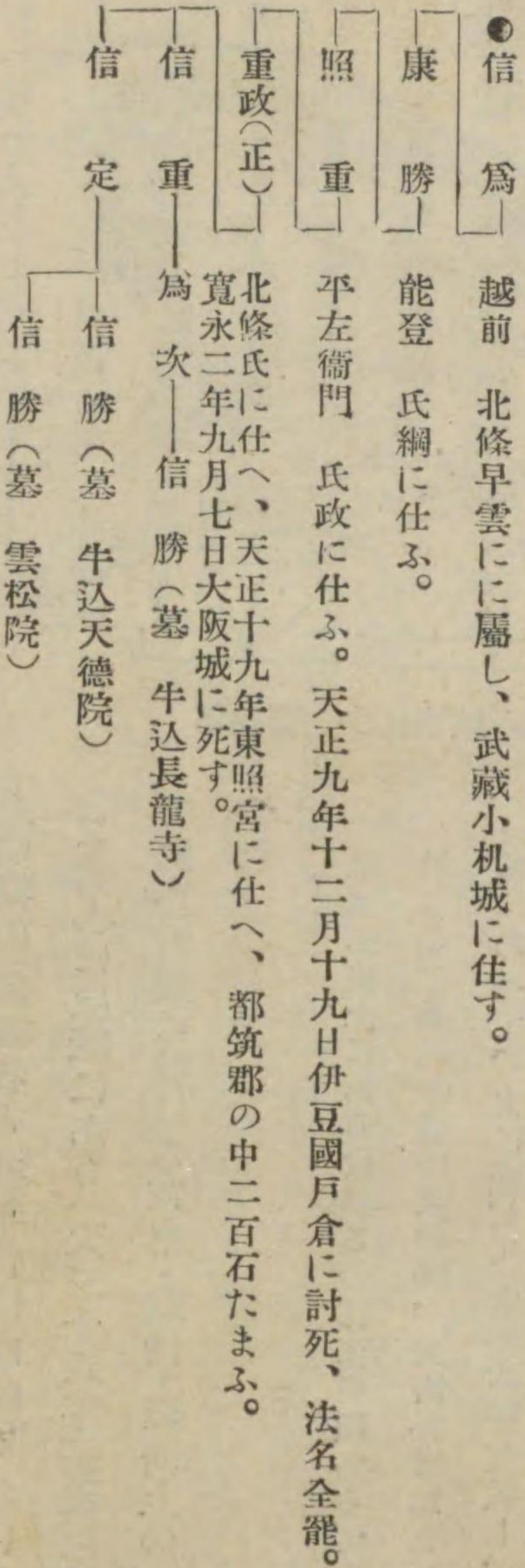
此の城の創築者と其年代は明瞭でないが、文明頃(1469-)には既にあり、天正十八年迄戰國時代を通じて西南武藏に於ける軍事・政治・經濟上の一中心であつた。

此城が史上にあらはれるのは文明頃からである。文明九年(1477)長尾景春の亂の時、矢野兵庫助と云ふものが當城にあつて、之に應じて上杉氏に反抗し、翌年三月上旬の臣太田道灌の弟資忠に攻圍された。景春はこれを救ふため、其の本據鉢形城(武藏大里郡、舊男衾郡)を出でて、先づ多摩郡二宮城に入つた。然るに上杉定正は、

河越城から進出して二宮城を圍んだため、景春は成田城に走り、小机城は陥つてしまつた(此戦については平塚城・練馬城・石神井城・二宮城等の條参照)。稻付靜勝寺所藏の道灌略譜には、道灌此年二月成田某の守る

川崎・鶴見と生麥・小机

所の小机塞を攻むとあると云ふ。以來上杉氏の勢力下に屬して居たと思はれるが、大永四年(1524)上杉朝興が北條氏綱に江戸を追はれて河越に退き、武藏の南部は北條氏の手へ歸したので、この頃から笠原越前守其子能登守等をこの城に置いた。其後天正の末頃には氏政の弟氏堯の屬城で、笠原氏が之を守り、同十八年の役には、少數のものが留守して居たので大したこともなく落ちた。
笠原氏 (藤原支流)(寛政重修諸家譜等)



猶、天正十八年小田原の役に、松田憲秀をして叛せしめた其子政堯は笠原新六郎といひ、笠原能登守の養子であつたが、能登守に實子が出来た爲小机城を繼がず、伊豆戸倉に居り、天正八年北條氏に叛して武田氏に

通じ、討手に向つた笠原の實子平左衛門を討死せしめたものである。
歸路は横濱線で東神奈川驛へ出て省線電車に乗れば便利である。「費用一圓三四十錢位」(鳥羽)

三 矢口・奥澤方面

蒲田神社 古川薬師 新田神社 九品佛 満願寺

蒲田驛で下車。驛の東正面に菖蒲園がある。元は中々有名であつた。これから京濱電車の梅屋敷停留場に向ふと途中左側に蒲田神社がある。

蒲田神社 郷社 荏原郡 蒲田町 北蒲田

祭神 應神天皇 天照大神 春日大神 武内宿禰 荒木田素津彦

當社は俗に蒲田八幡と呼ばれ、清和天皇の詔によつて、貞觀六年(864)八月十四日官社に列せられたことは三代實錄に見える。當時は蒲田神社と書いたが、當社の由來を見ると醍醐天皇の御代に文字を改めて蕪田神社と申されたとある。多分延喜式神名帳に(卷九ノ十七東海道第十一)武藏國四十四座荏原郡二座中の一蕪田神社と誤つてゐるのに附會したのであらう。

神社から約四町で梅屋敷がある。文政の初、梅木堂といふ藥屋が、和中散を賣る傍ら、梅樹を栽培して東海道往來の客を迎へたのに起るといふ。安永・天明頃からは海道的一名物となつてゐた。側の梅屋敷停留場から京濱電車に乗り、雑色で降りる。東海道に沿うて進むと、左側に頼朝の勸請と稱する六郷八幡宮がある。少しかへつて西に入り、數町ゆき四つ角から左に折れてゆくと古川藥師がある。

古川藥師

醫王山世尊院安養寺 眞言宗 六郷村 古川

當寺は玉川八十八ヶ所第六十九番、東海三十三所觀世音靈場第十九番に當る。緣起は堂前の立札に詳細に記してある。元明天皇の和銅年間行基菩薩が藥師・彌陀・釋迦一刀三禮に彫刻あり、精舎を建て如來を安んじ、東光坊と號したが、聖武天皇が其の靈驗に感ぜられて、銀杏を中堂の左右に植ゑ、且堂宇を建立し、現在の山號を下され、大伽藍となされたといふが勿論附會の説である。今の堂は後正徳六年(1696)の建立と云ふ(東京府志料八七)。本尊藥師如來、脇士彌陀・釋迦各五尺餘の像である。

古川藥師の西は多摩川の堤で、堤傳ひに上ると十數町で矢口の渡に出る。これから北すること數町で左側に新田神社がある。

新田神社

府社 矢口村 矢口

祭神 新田義興

背後の陰鬱な塚は廟所である。建武の昔北畠顯家を助けて鎌倉を攻めた新田左兵衛佐義興は、正平七年(1352)自ら東國に兵を起し足利基氏を走らせたが、尊氏と争ふに及び敗れて信濃に奔り、越後に移つた。次で武藏野に廻つて基氏を圖らうとしたので、鎌倉の狼狽一方ならず、執事畠山國清は卓怙にも竹澤良衛・江戸堯寛の二名をして義興を矢口渡頭に誘殺させた。時に正平十三年(延文三年)(1358)十月十日。新田神社の西北の頓兵衛地蔵は俗にとろけ地蔵と呼び、當時竹澤等の謀に與して義興を苦しめた渡守頓兵衛の守本尊であつたと云ふ。像はひどく磨滅してゐる。

當時の矢口ノ渡は古鎌倉街道にあつたので、廟後の水田の邊に當るらしい。此の邊は悉く入江で玉川の水も此地に沿つて流れてゐたと云ふ。頓兵衛地蔵のある堤の西一帯の凹地に河原と云ふ地名が残つてゐる。

頓兵衛地蔵から數町西北方に當つて淨土の古刹終南山光明寺の雷留觀音堂がある。此の鵜ノ本は先史時代の遺蹟に富んでゐる(大森貝塚條參考書參照)。なほ北方の沼部にも嘗て貝塚が発見された(人類學雜誌八六、九〇)。なほ北進して奥澤に行く。九品佛のある淨眞寺はすぐわかる。

九品佛

九品山唯在念佛院淨眞寺 淨土宗 玉川村 奥澤

矢口・奥澤方面

般舟場と額を懸けた舊い總門は南にある。閻魔堂を過ぎると左に紫雲樓と云ふ仁王門が聳え、鐘樓は左手に本堂は右手に見える。本堂は十一間四方、龍護殿と扁額に刻んである。本堂の右に曼荼羅堂、前面緑の樹蔭に三字の佛堂がある。佛堂には丈六金色の阿彌陀佛三體宛を安置してあるので俗に九品佛と呼んでゐる。其の背後の丘上には開山珂碩上人の墳墓等あり、其直ぐ下に星の井がある。今は落葉がつまつて水も見えないが、信者が偏に稱名すれば晝でも水底に星の光が顯れると云傳へてゐる。

當寺は延寶六年(1678)珂碩上人の草創で、本尊は聖德太子の御作と云ふ阿彌陀如來像。寺寶には開山自作像・芝枯シバカラシの名號等があると云ふ。九品佛はいづれも丈六の坐像で、一體毎に圓光があつて、小佛一千十一軀を附してあるとか、金色の光は暗い堂の内に莊嚴な氣分を與へてゐる。鐘樓の鐘は寛永五年の鑄造で、九品の阿彌陀如來九體が浮出てゐる。今芝の増上寺の別院になつてゐる。異説はあるが此地はもと吉良氏の城であつた所で、總門のある所が大手であると云ふ。寺域を圍む土壘は勿論城に關係のあるものに違ひない。

淨眞寺の裏から出て田圃の間を西に辿ると、等々力の満願寺に達する。玉川電車の駒澤停留場からは三十町許である。等々力は兎々呂城にも作つたと云ふ〔新編武藏風土記稿〕。

満願寺

致航山 眞言宗 玉川村 等々力

可なり剝落ちた「致航山」の額は細井廣澤の書である。門内正面に本堂、左手には地藏堂と鐘樓(鐘は安永五年)とがある。本堂後の墓地の最も近い右手の圍内が細井家累代の墓地で、入つて直ぐ左にあるのが廣澤の墓である。

當寺はもと世田ヶ谷の吉良頼康の祈願所であつて、當時は頗る盛大であつたと云ふ〔江戸名所圖會〕。慶安年間寺領寄附の朱印を得た。本尊は大日如來、定榮が開山であるとも云ふ。玉川八十八ヶ所第五十四番の札所で、細井廣澤の遺書を藏してゐる。

これから東南十五町目黒蒲田電車の調布停留場にかへる。なほ矢口の新田神社から奥澤に出ずに池上の本門寺へ出るか又は洗足の池に出てもよいし、奥澤から目黒蒲田電車で歸つてもよい。〔費用約五十錢〕(小笠原)

四 目黒・世田ヶ谷附近

岩窟辨天

海福寺

羅漢寺

祐天寺

鬼子母神

圓融寺

豪徳寺

世田ヶ谷城址

山手線目黒驛から行つて、左へ曲りすぐ右へ降りる坂がある。これが行人坂である。目黒附近に史蹟を簡単に説明した標木の立てられてゐることは何より喜ばしい。坂の途中左に大黒寺がある。松葉山大圓寺と號し、通稱又「吉三の寺」ともいふ。大黒天があり、吉三が開山だと傳へるからその俗稱が起つたのである。明和九年二月廿九日の大火の火元として永い間再建は許されなかつたが、近年隣の明王院が廢せられ、その念佛堂をこゝに再建して舊寺名大圓寺を繼いだのである。明和大火供養の五百羅漢・般若塚・吉三の墓などがある。なほ坂を下つて少しゆくと目黒川に太鼓橋の遺蹟がある。橋を渡つて眞直に行き突當つて左折すると右側に岩窟辨天がある。

岩窟辨天

靈雲山蟠龍寺

淨土宗

荏原郡

目黒町

下目黒

江戸名所圖會にある阿彌陀如來の像は先年賣却されて、今は善光寺如來(?)が本尊であると云ひ善光寺如來十五靈場の第三番である。元は行人坂にあつて、かなり格式も高かつたさうであるが、今では山の手七福神の一である岩窟辨天で有名である。辨天は弘法大師作と傳へる石像で、本堂後の崖を鑿つた中に安置してある。

蟠龍寺を出て右へ二町許行くと、右側に海福寺がある。その隣りが有名な羅漢寺である。

海福寺

永壽山海福寺

黄檗宗

目黒町

下目黒

寺は寛永五年道安和尚の草創。元眞言宗だつたが、僧隱元歸化するや、請うて開山とし今の宗旨に改めた。始め深川萬年町にあつたが、明治四十二年九月こゝに移したのである。石段を上ると右の方に、寶篋印塔の壞れたのが散亂してゐる。是は文化四年八月十五日富岡八幡宮祭禮の日、永代橋が落ちて溺死した多數の者のためその百ヶ日に有志が建てたので、溺死者の戒名と町名とが記されてゐる。又本堂背後に武田氏から傳はつたといふ塔がある。元九層塔であつたが、明治二十七年の地震に倒れてしまつた。

羅漢寺

天恩山

黄檗宗

目黒町

下目黒

此の寺は元祿年間に出來たのであつて、始めは大島町(幕府の御材木藏の東)に堂宇を起し、その後殿閣も具備して盛大を極め、江戸市中托鉢の先驅をしたりした。併し安政年間の地震暴風雨のために大に損害を蒙り、明治二十三年に本所緑町四丁目、同四十二年に更に目黒に移つて、今は見る影もない程であつて、大雄殿と掲額した堂に五百羅漢が安置されてある。是は昔は非常に有名なものであつて、古い江戸の地圖に十か二十程名所の書いてある中には、必ず「五百羅漢

さいえ堂、日本橋より一里十五町」と記されてある位だ。今でも陸地測量部の一萬分ノ一「深川」を見ると、羅漢道といふ名が残つてゐることが分る。さいえ堂と云つたのは元境内に三匝堂があつたので、俗にかう云つたのである。但し羅漢が此の堂の中にあつたのではない。寺も江戸ではかなり有名なものであつて、江戸名所圖會によると河東第一の名刹であつて、享保九年十二月に將軍が來てからは、鷹狩の時には必ず立寄つたと云ふ。

五百羅漢のいはれに就いては、主として東都事蹟合考などによれば、次の様なことが書いてある。貞享の頃京都に松雲と號する佛師の上手があつて、豊前の羅漢寺の五百羅漢を見てから、江戸に五百羅漢を建立しようと思つた。そこで江戸へ出て之に著手した所、之を援助する者が現れ、遂に綱吉の生母桂昌院の寄附によつて出來上つた。元祿八年には更に寺領地及び寺號を賜り、假に堂宇を建立して佛像を移した。松雲の死後假堂もこはれ、佛像を雨に曝されてゐたので、中興の象先和尚と云ふのが之を憂へその再建に努力した結果、享保十年に佛殿が出來て、同十四年二月入佛供養を行つた。

羅漢寺を出て右へ行きすぐ左へ曲れば、その突當りに蛸藥師がある。繪馬に蛸を描いたのが澤山納められてある。こゝから一町程行つて右へ曲ると突當りが目黒不動(泰叡山瀧泉寺、天台宗)で、五色不動の一到數

へられる。寺の縁起や諸堂の名などは、「目黒不動尊縁起」に詳しい。

因に所謂五色不動の現位置を記せば次の通りである。

- 目青不動 竹園山教學院 荏原郡世田ヶ谷町(元麻布隨緣山觀行寺内)
- 目赤不動 大聖山南谷寺 本郷區駒込片町三十七(元動坂にあつた寺)
- 目黄不動 牛寶山最勝寺 南葛飾郡小松川町逆井(元本所荒井東樂寺)
- 目白不動 東豊山新長谷寺 小石川區關口駒井町六
- 目黒不動 泰叡山瀧泉寺 荏原郡目黒町下目黒

五色不動の起りについては、五行思想から來たといふもの、地名から起つたといふもの、不動尊の眼の色によるといふもの、密教から出たといふものなどがある。

不動の裏門を出て右へ一二町行くと、左側に「甘諸先生墓」(青木昆陽)がある。墓の通りを今來たのと反對に行き、突當つて前に通つた道へ出て、左へ曲つて二三町行けば左側に三目黒總社といはれた大鳥神社(祭神日本武尊・國常立尊・橘樹媛)及び同社舊別當松輝山大聖院生蓮寺(天台宗)がある。神社は大同元年鎮座泉州大鳥神社を勧請したもの、大聖院本尊は所謂見かへり阿彌陀である。なほ高峯山長泉院大玄寺(淨土宗、所謂新寺)に寄つてその墓地を抜けて小路に出て、それを右の方へ行き

突當つて左折すれば、一二町で祐天寺前に出る。

祐天寺 明顯山善久院 浄土宗 目黒町 中目黒

總門を入ると正面に仁王門があり、左に開山本地堂がある。少し奥へ進むと右に鐘樓左に阿彌陀堂がある。此の阿彌陀如來は惠心僧都の作と傳へ、西方六阿彌陀の第六番である。

當寺は増上寺第三十六世祐天上人の隱居地であつたが、上人入寂後法弟祐海が遺命により享保四年に當寺を建立し、上人を開山として自ら二世となつた。上人及祐海の墓は境内にある。明治二十七年境内を火藥庫に貸したが、火を失して堂宇を烏有に歸してしまつた。(以上建部)

祐天寺よりは南へ碑文谷へ出る。字門前に圓融寺がある。

圓融寺 天台宗 碑衾町 碑文谷

舊稱法華寺。禪門・仁王門・本堂等がある。本堂(釋迦堂)は特別保護建造物で、桁行三間梁間四間、單層入母屋造、茅葺の小さい建物ではあるが、俗に飛驒の工匠の作と云はれる位で、府下には稀な室町時代の建築である。

慈覺大師の開基と傳へられ、天台宗に屬して居る。中古一度日蓮宗になり元祿年間にも及んだが、元祿十一年

に再び天台宗に復歸して本尊日蓮の像を堀の内妙法寺に移した。

寺域の外は郊外住宅が門前を襲つて來て折角の風致を破壊しつゝある。(以上石山)

品川用水について西すれば玉川電車上馬停留所際に出る。停留所から更に西北へ行くと左手に駒留八幡の森がある。鳥居に「兩社八幡宮」と掲額してゐるのは、駒留・若宮兩八幡をさすのである。當社の起源は不明であるが、世田ヶ谷城の吉良氏の信仰を得てゐた。

もと來た道を北進して街道を横切つてなほ北へ行くと玉川電車の踏切に出る。其手前で斜に左へ行くと松陰神社に突當る。其背後には、頼三樹三郎・小林民部少輔・吉田寅次郎・來原良藏・福原乙之進等並に綿貫治郎助幕末志士の墓がある。此一帯の墓地の南の道を西し、勝國寺(新義眞言宗、吉良勝國の開基)前を過ぎ、田間の小徑を西方の森へ向つて行く。森の東北端から南へ進み、右へ側面から豪徳寺へ入る。

豪徳寺 大溪山洞春院 曹洞宗 世田ヶ谷町 世田ヶ谷

近郊の禪林中では比較的堂塔が整つてゐるといへよう。側面から入ると、まづ佛殿が眼につく、大谿山と掲額してある。その背が法堂、東庫裡に續き、浴室、鐘樓が庫裡の南にある。佛殿と鐘樓との間の門が中雀門、墓地は佛殿の西に連つてゐる。井伊家の菩提所。



舊傳に據れば、文明の頃吉良左京大夫政忠が、伯母弘徳院の菩提を弔ふ爲弘徳院といふ臨濟宗の寺院を建立した。天正年間門庵宗關改派、後井伊掃部頭直孝を中興開基とした。井伊家の墓地の門を入つて正面が直孝の墓、最奥に櫻田門外で遭難した直彌の墓がある。

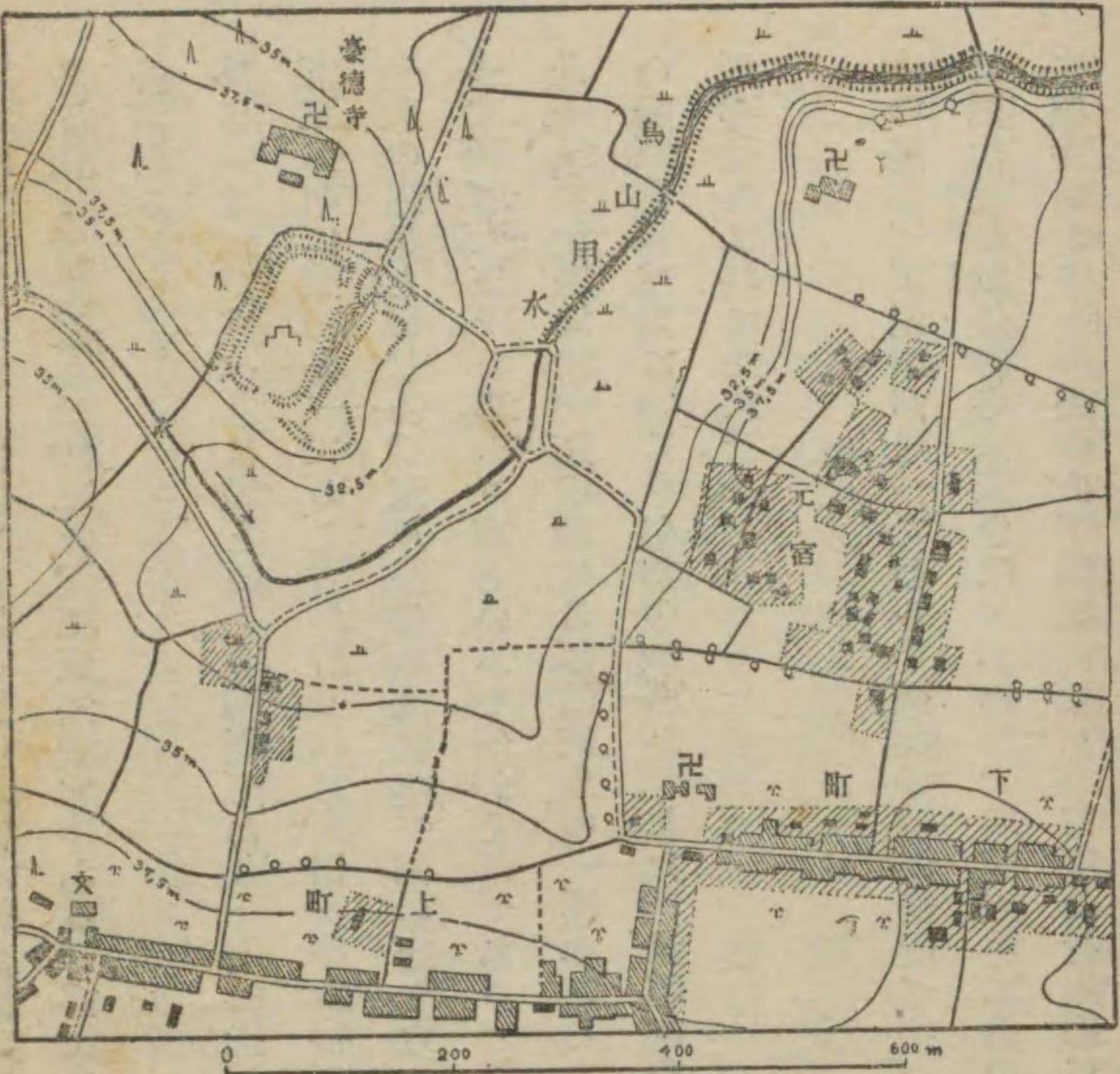
寺の東南に世田ヶ谷城址がある。

世田ヶ谷城址 世田ヶ谷町 世田ヶ谷

城は東南に窪地帯をめぐらした小高い所に設けられ、大體二郭からなつて居たものらしい。土居を圍らした本丸の址は開墾されて畑となつてゐる。其略、南北の土居を斷つて小徑が通じ、東南の部分の堀にはなほ水を湛へてゐる。西が豪徳寺の詣道である。城址の東部は畑となつてゐるが、最近大路が開けて一層壞され、堀の一部も更に深く鑿たれて水路となつてゐる。此城は室町時代に於ける吉良氏の居城である。

吉良氏は足利義氏の子義繼、三河國吉良莊に住してから起つた家で、此地とは基氏の頃（所謂南北朝時代の中頃）義繼六世の孫治家が領地を賜はつてから關係が出来た。其頃からここに住したともいひ又初は蒔田（横濱市蒔田町）に居り、頼治・頼氏・頼守を経て政忠（初名勝國）の時、ここに移るともいふ（蒔田勝國寺の傳）。

第五圖 世田ヶ谷城址附近の圖



目黒・世田ヶ谷附近

何れにしても同氏にとつては重要な領地であるから館などあつたことと思はれる。政忠の子成高、其子頼康。大永頃（1521）から此の邊が北條氏の勢力下となつたから、吉良氏之に屬することゝなつて、頼康は北條氏康の女を娶つた。頼康の子氏朝の時、天正十八年（1590）北條氏亡ぶに及んで、生實に逃れ、爾後廢城となつた。此城は元來一地方豪族の居館ではあるが、江戸から相模に至る矢倉澤往還（大山街道）にも近く、武藏相模全體から見ても相當の地位にあつたものと見てもよい。此附近の吉良氏の領地は江戸時代に世田ヶ谷領（五十七ヶ村）と云はれた範圍と見れば大差なからう。世田ヶ谷私記にはそのほかに野川・押立・深大寺の邊まで含めて居る。附近に於ける同氏關係の遺蹟は深大寺・等々力の満願寺（政忠の男住持）。

弦巻の實相院（賴久開基）・世田ヶ谷の八幡（賴貞勸請）・勝國寺（勝國開基）・常德院・豪徳寺（弘徳院賴高の女開創）・勝光院（治家草創、賴康法號）等ある。碑文谷の法華寺、小田中の泉澤寺等には賴貞、賴康等の文書がある。

序に一寸注意すべきは城と町との關係である。規則正しく幅の廣い道が一直線をなした世田ヶ谷の町並は、天正六年に樂市を立てることを許された世田ヶ谷新宿で、此市は始め一六の日六齋の市であつたが、此地方一般の趨勢と同じく、江戸時代の末は年一回の市となつた。今でも十二月と一月の十五日に其名殘の市が立つ、所謂世田ヶ谷のボロ市といふものがそれである。新宿に對する元宿は今も勝國寺の南に残つて居るが、此等は中世末近世初期に於ける都邑成生の一標本として注目し値する。第五圖に於ては此城と新宿と元宿との關係を示す爲に特に數年前の狀況を示した。近頃は此邊にも邸宅が年々増加し、電車や新道も開けて、益々原形は失はれて來た。

寺の前を玉川電車が通つてゐる。豪徳寺前停留所に乗つて澁谷へ還ればよい。途中三軒茶屋停留所の西北に竹園山教學院最勝寺（天台宗）があり、所謂五色不動の一である目青不動は今此寺に安置されてゐる。なほ豪徳寺前から一つ先の山下附近に近々小田原急行の驛が設けられる筈、其開通後は新宿へ還れてもつと便利になるであらう。「費用約十五錢」（以上長澤）

五 二子・榊形方面

榊形城址 廣福寺

玉川電車を玉川で下車、多摩川を渡れば高津村二子である。この宿の黒黒氏方裏手には、新編武蔵風土記稿に坊主塚とある所謂二子塚の址がある。溝口の宿に入り、大石橋を渡つて少し行くと、右手に題目の石塔があつて、宗隆寺と誌されてゐる。寺は興林山と號し、池上派に屬し、裏の丘陵は眺望頗る開濶である。なほこの附近の名所として久地梅林が擧げられる。これから榊形城址方面に行くには、堤を二十餘町、川に沿うて行くのであるが、道は極めて平凡で何等史蹟はない。八王子方面からの續きて高度僅かに百米位に過ぎない丘陵——しかし鎌倉の危急存亡には極めて意義ある所の——が同じ姿で道に迫つてゐる。右は笹が一面に垣を作つてその上を稻毛用水が靜かに流れてゐる。

散歩の興味を増す爲に此單調な路を避けて、書物に見えてゐる寺の現状を視察して見るのも一興である。概して佛寺は舊幕時代に比して外觀に於ても衰へその社會的意義使命も大いに異つてきた。此觀察については常に宗派と其各時代に於ける支配實力者との關係及宗制並びに其地方に於ける宗派の分布といふ點を考慮に入れて考へてみたい。殊に舊幕時代に於ては佛教が國教の如き地位にあつた時、佛寺は戶籍に關與して今日

の役場區裁判所のやうな意義を持つて檀那寺と檀家とのローカルカラーは極めて深かつた。江戸時代の版の地誌に現れてくる佛寺はかうした社會狀態の産物としての寺で今日から見れば盛なもののあるのも無理でない。そこで梅林を堤へ戻つて丘の方へ戻ると秩興山淨光寺（日蓮宗池上派、開山日應）がある。丘を越すと青龍山圓福寺（曹洞宗總持寺末）がある、丘を登りつめた所の眺望は宗隆寺の裏からとは異つた方面を開展してきて面白い。併せて多摩川を登戸布田方面から世田ヶ谷馬込邊迄鳥瞰することが出来る。圓福寺は大永二年の起立、開山は雲點、堂に向つて左に天神祠があり、一町許り隔て、辨財天窟がある。扱後へ戻らずとも丘の西側の谷間を西北に行けば、榊形城から十五町手前の字堰へ出る。其處に白丘山龍巖寺（天台宗深大寺末）がある、傳教大師の作といふ大黒天を寺寶として猶傳へてゐる。

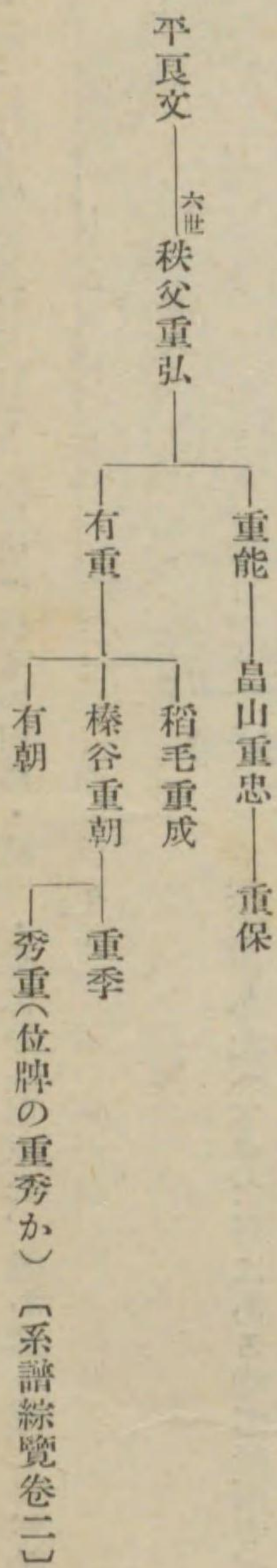
堰から十町も行くとも榊形の城跡が見える。丘の中腹の寺は法言山安立寺（日蓮宗）といふ。四五町ゆくと角に小社があつて谷が入り込んでゐる。此社は江戸名所圖會に出てゐる長森稻荷と稱するもので、祭神は稻荷の外、星夜明神・海光曜明神といふ。此邊一帯を飯室といふ。山腹に飯室長者の穴と稱する横穴がある。新編武藏風土記稿には「兩崖に十五六ヶ所」とあるが、實は百に近い穴があるとの事である。猶此穴に就いては人類學雜誌第三十六卷第八號以下に富士川滋氏が論じられてゐる。それによると、「入口の幅約一米、高さ〇・八米、内部は奥行約二米、高さ内部崩落砂礫發掘後の測定で凡二米、横幅凡三米、地質は砂岩層」とあるが、もつと大きいのもあるやうである。

稻荷の所から谷間の道を辿つても、廣福寺へ出て、寺の背後から城址路の木標につれて登つてもよい。

榊形城址 神奈川縣橋樹郡生田村

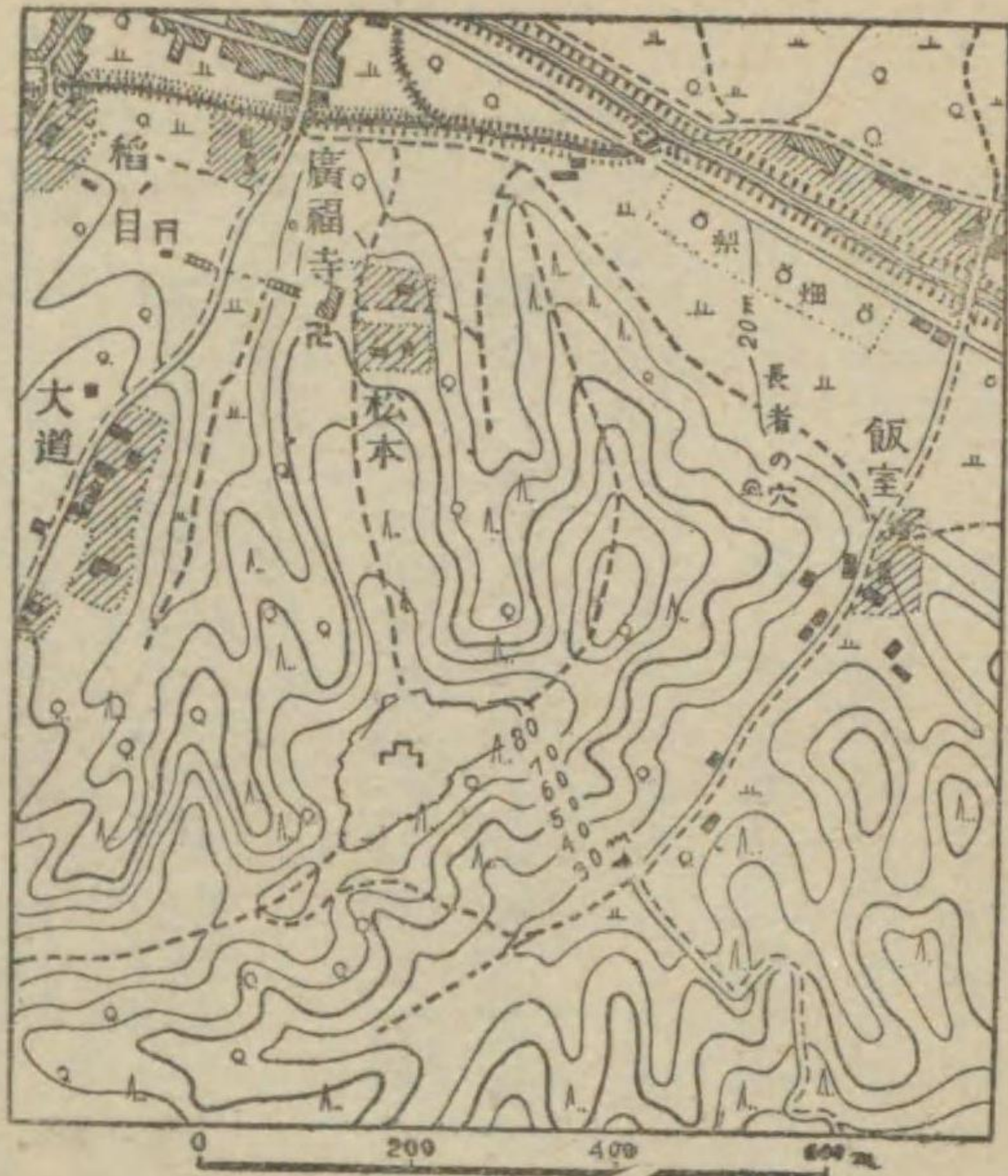
山上に一郭があるのみで、出丸の如きものも、又空堀の如きものも見當らない。唯周圍に土居が遺つてゐるばかりである。

稻毛三郎重成の居城であつた。重成は牧の方と與して畠山重忠を時政に讒し、重忠一族は之が直接の動機となつて鶴峯に滅亡した。併し稻毛重成もその親族の好を變じた故を以て殺された。此經緯は北條九代記・東鑑に出てゐる。



又永祿十二年(1569)武田信玄小田原へ亂入の際、横山式部少輔弘成此所に壘を築いて北條氏の爲に守つた。

とが小田原記に見えてゐる外、史上に此城が活躍したことは氣がつかない、小田原記に次の一節が出てゐる「六郷に行方彈正居たりける。(中略)稻毛の田島・横山・駒林等を引率し、橋を焼き落し甲州勢を通さず云々」。



第六圖 樹形城址の近附圖

樹形山を北へ下りた所にある寺が廣福寺である。

廣福寺 松本山 眞言宗 生田村 稻ノ目

本堂の南一段高い所にある堂は觀音堂で、重成の持佛と稱する僧行基の作と傳へる觀音の木像が安置してある。又新編武藏風土記稿には「稻毛三郎重成の像とて雲龍の文なる狩衣を著し金の梨子打烏帽子著したる坐像あり、丈一尺五寸ばかり。」と

あるが是は今本堂にある。其他本堂には樹形城主稻毛三郎及一族六基の位牌がある。面には榛谷太郎平重秀法名蓮風、榛谷四郎重朝法名滯悟、森五郎平行重法名玄理、小澤次郎平重政法名眞悟、稻毛三郎重成禪門道全、榛谷小次郎重季法名如月とあり、歿年は重成のには元久二乙丑年六月二

十四日、行重のには不詳とあり、他は元久二乙丑年六月二十三日とある。是等の左にある一基、一室圓如大禪定尼靈位、建久六乙卯年七月上四日とあるのは重成の妻のであらう。

江戸名所圖會には此邊では此寺と後の城址とが出てゐる許りであるが、新編武藏風土記稿の記述と同様である。併し後者は重成の木像も近世の作であり、觀音が彼の持佛であつた事も疑ひ、五輪の塔も後から持つてきたもので、要するに「此寺の春後に樹形山の古壘跡あるに仍りて之を稻毛三郎に附會せし事なるべし。」と同情のない斷案を下してゐる。當寺は慈覺大師の開山で長辨の中興に係るものである。

是から登戸の渡を渡つて國領コクリヤウの京王電車迄約一里、登戸は昔鎌倉への渡津であつた時代もあつた。村へ入つて右の寺は龍燈山善立寺リウテイサンゼンリツジ(日蓮宗池上派)で、開山を日成ニチナガ(天正四年二月寂)といふ。本堂の左の堂は七面堂で帝釋天も一緒にしてある。「玉川電車・京王電車賃・渡し賃などを合せて費用約一圓」(古谷)

六 中野・堀之内方面

十二社 寶仙寺 三重塔 妙法寺 大宮八幡

市電の淀橋町、省線の新宿驛、京王電車の新町・天神橋・神宮裏の何れかて降りて、淀橋浄水場の西の境に附いて曲つて行けば、行手に鬱蒼と茂つた森の樹立の間から、池の面が隠見する。十二社である。

十二社 熊野神社 郷社 豊多摩郡 淀橋町 角筈 十二社

祭神 伊弉册尊 速玉男命 外十神

十二社とは熊野神社の境内が呼ばれる名である。此地も全く俗化してしまつた。池畔には料理店が軒を接し、池水の混濁も甚しい。

熊野神社は社傳によれば、應永の頃、紀伊の人鈴木九郎某といふ者が零落して、此處に住つて居た時、産土神の熊野權現を生國紀伊から勸請した。後大いに富をなすに至り、同十年(1103)社を再造して、十二所の神が悉く備はつたので、十所權現又は十二所權現と稱せらるゝ様になつたといふ。後荒廢したが、享保の頃、成願寺奉祀の宮となつてから稍々其の舊態に復し、以て今日に至つたのである。

十二社を北へ出て、西し、神田上水を北へ渡れば、多寶山成願寺(曹洞宗)の前へ出る。もと十二所權現の別當であつた。熊野神社を勸請した鈴木九郎が其の娘の變死を己の不徳の報として、其の死を弔ふため、開基となつて建てた寺であるといふ。本尊は釋迦如來の像で聖德太子の作と傳へる。開創の時講堂と共に建てられた三重塔は、今青梅街道の北に移されて、寶仙寺の所有に歸して居る。

成願寺の前の道を神田上水に沿うて西へ行けば、道は自然に曲つて北へ行き、青梅街道へ出る。出た處の北側に相當に大きい寺院がある。これが寶仙寺である。

寶仙寺 明王山無動院 眞言宗 中野町 仲通

此寺の舊記は大永の頃兵燹にかゝつて、傳はらないので、開創の年代等は明かでないが、大宮八幡の舊記等から察すると、寛治年中源義家が奥羽の亂を平け、都に凱旋する途次、大宮八幡の別當として建立されたものであるといふ。當時は西方なる阿佐ヶ谷にあつたが、後永享年間に今の地に遷つて、別當の職はその末寺に譲つたのださうだ。本尊は不動の坐像で、良辨の作と傳へてゐる。外に願行の作と傳へる四大明王の立像を安置してある。

境内には多くの堂塔があるが、其の中の大師堂は御府内第十二番の札所である。寶藏には寺寶の見るべき物が甚だ多い。

寶仙寺の東門を出て東へ二町程行くと、相當廣い地域の中央に三重の塔が立つて居る。

三重塔 中野町

塔は寶仙寺所有地の中央にあつて、三間半四方、高さ五丈三尺、五智如來を安置してある。東京で最も古い唯一の三重塔で、寛永年間の建造に係るもの、塔内に造營の施主夫妻の木像もある。元成願寺にあつたのが移され、荒廢したのを改築したものであらうか。

都會と野との接觸點の變つた氣分は、此邊に渦を卷いて居る。新町通りや板橋の様に、埃の甚しい中を行くこと約二十町、此間妙法寺口停留所までは西武電車を利用することも出来る。燈籠の立つて居る横町を左へ數町、日蓮宗の巨刹は我々を迎へるであらう。乗合自動車は寺から一町程手前まで行く。電車も支線を門前まで出す計畫があるとかいふ。又別の道としては、省線中野驛から來る路と、京王電車代田橋停留場から來る路とがある。

妙法寺 日圓山 日蓮宗 和田堀内村 堀之内

江戸時代から今日まで引續いて東都屈指の流行佛として、常に賽客の跡を絶たない西郊の名刹である。寺の沿革は明和六年(1769)に起つた火災で舊記を失つて、詳かでないが、以前眞言宗であつたのを、元和の頃日蓮宗に改宗して、妙仙院日圓が開基となつた事になつてゐる。今身延派である。可なり廣い境内に諸堂を競ふ、堂塔は何れも文化文政に互つて再建されたものである。祖師堂は九間に十四間、總銅瓦葺三方樓、樓門の正面にある。此處に安置してある日蓮上人の像は、今信仰の的となつて居るもので、日朗の作と傳へられる。即ち上人が伊豆配流の際に、高弟日朗が鎌倉で之を刻し、以て上人の配所の安全を祈念したものであるといふ。赦免の時上人は四十二歳であつたので、自ら之に點眼して、厄除の號を稱へさせた。爲に後世厄除の祖師と呼ばれて、世人の頗る厚い信仰を得たのである。

此の尊像は元祿の頃、碑文谷の妙法華寺の住持が破戒の罪で遠島に處せられ、天台宗に改宗した際に、此の寺に遷したものであると言ふ。其の頃まではさゝやかな庵室であつたが、其後本尊の靈驗追々と世に顯はれ、次第に世の信仰を集めて今日の盛大を見るに至つた。

妙法寺を出て南し、少し行つて右の道をとつて、右へ眞直に行けば大宮八幡の前に達する。

大宮八幡 八幡神社 郷社 和田堀内村 大宮

祭神 仲哀天皇 神功皇后 應神天皇

中野・堀之内方面

源満仲が初めて此地に奉祀して以來、代々源家の武將の信仰厚く、頼義・義家共に大いに神殿を修め、殊に義家は別當寶仙寺を建て、後頼朝も亦信仰淺くなかつたといふ。然し天文年中に兵燹に罹つて、社寶は焼かれ、社領は奪はれて、社僧等も四散し、唯神體ばかり一小祠に奉安してあつたといふ。後天正年中に大石信濃守(二宮の條参照)が之を再建したといひ、其後屢々修復を重ねて今日に及んだ。

廣い境内には天を摩する古木が森々として隨所に聳えて居る。此の境内は植物(殊に草類)の種類が多いので古くから名高い。

歸路は南して京王電車下高井戸へ出る。又北して西武電車にも出る可。〔費用約三十錢〕(太田)

七 井ノ頭と深大寺

井ノ頭 神田上水 井ノ頭辨財天 玉川上水 青渭神社 深大寺 深大寺城址

虎柏神社 布多天神社

中央線吉祥寺驛の西南五町、驛を出て西し、踏切を越して南すること一町餘て井ノ頭に至る。

井ノ頭 北多摩郡 武藏野村 吉祥寺・三鷹村 牟禮

大正六年の四月から東京市の公園となり、恩賜公園といふ。もと御料地であつたが、大正二年東京市へ御下賜になつたのである。公園の廣さ八萬二千坪、池の周圍と其の西の丘とからなり、丘は御殿山といつて方四町許、檜・松・檜などの林になつて居て萩も多い。御殿山といふのは、江戸時代の初に、徳川將軍が鷹狩などの時に使ふ殿舎があつた爲である。その廢せられて後は、江戸の用水たる神田上水の水源として可なり重要な場所であつたので御林になつて居た。池は西北から東南へ細長いY字形をして居て、廣さ一萬四千坪餘、洪積層臺地の一凹地に地下水の湧出したもので、水は數ヶ所から湧き出して居るため、非常に奇麗である。

池の名については種々な傳へがあり、親ノ井〔牟禮村書上〕、七井ノ池(七ヶ所から水が湧き出すといふので)〔御府内上水在絶略記・武藏演路・江戸名所圖會〕、神箭ノ水〔新編武藏風土記稿〕などと云はれたといふ。又狛江郷の名の起つた狛江であらうとも考へられた〔武藏名勝圖會〕。井ノ頭池といはれるのは、神田上水の水源であるから、徳川將軍の命名したものと云はれてゐる。名付けた將軍は秀忠〔上水記等〕とも家光〔牟禮村書上・新編武藏風土記稿等〕ともいひ、自らこれを池畔の辛夷樹に小柄て刻したと傳へ、その樹皮を大盛寺

て藏してゐた。

神田上水

神田上水とは此池の水を引いた江戸の上水である。天正十八年(1590)徳川家康が關東へ入國すると直ぐ、大久保藤五郎忠行をして調査經營せしめたものと云はれ、後屢々改修を施し、引續いて江戸の用水であつた。

上水は幅上流に於て二間乃至四間、下流に於て八間乃至十二間、長さは小石川まで五里二十六町餘、高井戸・和田堀内・中野・淀橋・戸塚の諸町村を經、善福寺池・妙正寺池等から出る流をも併せて、小石川關口町大洗堰に至る。こゝで二つに分れ、右は江戸川となり、左は上水として關口臺町・關口駒井町・櫻木町・小日向水道町・水道端町を經て水戸藩邸(今所謂砲兵工廠)に入つた。初め小石川上水とも云つた。江戸時代には水戸家の屋敷から水道橋の東に出て、萬治年間神田川増鑿の時にかけた萬年樋といふ木樋を通つて神田猿樂町に入り、更にこゝから幾つにも分れて、今の神田(内神田)日本橋兩區に普及して居た。神田上水といふ名もこれに基いてゐる。最初上水の設計と工事とに當つた大久保忠行は、其功によつて、大正十三年二月十一日從五位を贈られた。井ノ頭略縁起や武藏演路に寛永六己巳年家光が來、此時から神田御上水となつたといひ、砂川源右衛門記録に寛永年中水門が出來たとあるのも、江戸の發達完備につれて自然の流に次第に手を加へられたことを示してゐる。猶池の邊から石器や土器を發見することがある。

因に吉祥寺といふ此の邊の地名は、こゝにさる名の寺があるのではなく、東京駒込の吉祥寺と間接に關係があるのである。新編武藏風土記稿に「當村の開發は萬治二年(1659)の事にして、其頃までは此邊をたゞ札野と稱せし由、開發の時、村民十郎左衛門といふが、江戸駒込吉祥寺に住せし浪人佐藤定右衛門・宮崎甚右衛門と相議し、此地へ來りて田畑を起し、皆此所の農民となり、村落をなせしより、元祿の頃は吉祥寺と呼びしを、今(文化頃)は吉祥寺村と云へり。」とある。即ち當時江戸の郊外として此の邊が次第に開發せられて行つたことがわかる。

池の西北端の島に辨財天の堂がある。

井ノ頭辨財天

大正十三年四月二十三日に燒失する以前、其堂宇は拜殿三間二面、本殿方一間で、即ち造りは神社建築であつた。兩部神道の盛であつた江戸時代には、辨財天社とか辨財天宮とか云つて、神社の扱ひで、それに別當の寺院が附いてゐた。今の辨天堂前の丘上にある大盛寺(明靜山圓光院、天台宗深大寺末)が即ちそれである。昭和二年に一寸風變りの堂が再建された。

縁起によれば辨天は、延暦七年傳教大師が勅を奉じて彫刻した靈像を、天慶年間に源經基が當國在住の砌、此地に安置して祠を創建したもので、建久八年源頼朝が安達藤九郎盛長に命じて堂宇を再建し、又新田義貞が鎌倉を攻めた時、戦勝を祈つたといふ。江戸の神田上水が比較的完備普及した寛永十三年祠を建立したと傳へるが、池靈なりと江戸名所圖會にもある様に、上水々源の水の神、即ち水の持主にして保護者であり、且その水を人に與へてくれる神として、社殿なども、水道工事の完備するとともに建て替られたものであらう。しかし、一般辨財天の信仰の變遷——（河の神格化、水に縁ある神・音楽辯才等の神、財寶の神となりその名も辨財天と變つた）——と同じく、後世には、單なる福德の神として信仰せらるゝ様になつたと思はれる。辨天の表門（黒門）の所にある「神田御上水源井頭辨財天」とある標石の臺石に、「江戸講中、神田湯屋組合中、延享二乙丑年十二月吉祥日、天明四甲辰年正月大吉日改建立」などあるのはよく此の間の消息を語つて居る。又大盛寺前（辨天前の石段上）にある宇賀神（人首蛇體で蓮葉に乗つて居る）の石像の臺石に「明靜山圓光院大盛寺住大阿闍梨堅者法印春芳堂本高代、井之頭辨財天石鳥居講中、江戸麹町七丁目願主發起人金井傳右衛門、明和四丁亥歲九月吉辰」などとあるのも、或は又その附近の文化七年の石燈籠に「兩國講中」とあり、高麗犬の臺石に「明和辛卯別當大盛寺本高代」とあるのなども、江戸時代に於けるこの辨天の性質や江戸との關係を示すものとして面白い。

寛永八年の夏、水が涸れたが、天海僧正の加持によつて再び湧き出したので、其後は毎年三月十五日から一

ヶ月間水加持をやつた。「江戸名所圖會・上水記所引内田茂十郎書上」さうである。辨天に關した諸傳説が何れも、天台宗や源氏關係のことの多いのも、天台宗の寺を別當とした關東にある祠として自然的な色彩を持つて居る。

井ノ頭池を一周すれば、その南端の水泳場の下流に神田上水の出口が見られる。

神田上水は今は東京の水道には用ひられてゐないが、しかし池の水は、大正十四年の冬から毎年多摩川の水の少い季節には、ポンプで吸上げて、玉川上水へ流し込み、東京の水道を補つてゐる。まだ誰も注意した人は無い様であるが、江戸時代にはこの逆に、玉川上水の水を、井ノ頭池へ落し込んで、神田上水の水を補つたことがあつたらしい。今でも辨天堂前の家光が井ノ頭とほつたといふ碑のある辛夷樹の後方から、松本訓導の碑の前を経て、玉川上水まで、堀割の跡が残つて居る。これを見ながら、御殿山の林をぬけて、西すれば公園の西南外を流れる玉川上水へ達する。

玉川上水

西多摩郡西多摩村羽村字玉川附で多摩川の東北岸に設けた閘門からその水を分流したものの。幅上流は四間乃至六間、下流は二間乃至三間で、西多摩・福生・熊川・砂川の諸村を經、小平村で野火止用水を分ち、小金井・武藏野・三鷹・高井戸・松澤・和田堀内・代々幡の諸町を經て内藤新宿に至る。

井ノ頭と深大寺

長さ十里三十一町四十六間（東京府測量）、今東京市の水道に用ひられ、淀橋の淨水池に入る。昔は新宿から、東は四谷・麴町を経て江戸城に入り、又西丸下から丸ノ内附近に、東南は永樂町・八重洲町・有樂町・數寄屋橋外・茅場町まで、西南は赤坂・西久保愛宕下・金杉を経て海邊に及び、更に一分流は青山通りから六本木を経て永坂の方へも引かれてゐた。

この上水は、承應二年（1653）正月十三日、幕府が多摩川の水を疏導して、江戸の飲料に供するの議を容れ、其の費用七千五百兩〔承寛棟録・三家記等〕（玉川庄右衛門清右衛門書上には六千兩）を支出して完成したものである。幕府は神尾備前守をして、適任者を選ばせたので、芝口の町人（玉川邊の百姓とも傳へる、即ち當時芝に住んで居たのであらう）庄右衛門・清右衛門の二人が選ばれてこれを請負ふことになった。この奉行は代々關東の郡代をつとめた伊奈氏（半左衛門忠克）が仰付かつた〔公儀日記等〕。途中で官給の金がつき、兩請負人は私費千兩（玉川庄右衛門清右衛門書上には三千兩）を投じて、翌三年六月にこれを完成した。その年の十一月に新宿の大木戸まで達し、幕府は二人の功を賞して、各二百石を給し、姓を玉川と賜つて佩刀を許し、玉川上水役とした。此兩人は功により明治四十四年に従五位を贈られた。上水は其後屢々改修して今日に及び、今東京市の水道に用ひられる様になつたのである。

小金井の櫻は、井ノ頭から一里餘の上の小金井附近の玉川上水の堤に植ゑられたものをいふ。堤上の櫻は、ここから續いてゐる。木はやゝ小金井附近の方が古いが、大體この邊と似た景である。最初は何時植ゑたか確には知られて居ないが、享保年間に、川崎定右衛門定孝が幕府の命によつて、吉野や常陸櫻川から多數移植したので、花の名所となつた。川崎定孝（元祿七一明和四）は初め多摩村の名主であつたが、植林や武藏野新田の開発に功があり、後玉川普請奉行等を経て、御勘定吟味役兼諸國銀山奉行にまで擧げられた人である。當時幕府が殖産興業に盡力し、適材を登用した様が窺はれる。

井ノ頭から深大寺までは、南へ一里餘。御殿山から公園の正門を入つた眞直な道が玉川上水を渡る所に萬助橋がある。その橋によつて南へ出れば、玉川上水を渡つて、三鷹村新川^{シンカハ}までは、十七町一直線の道である。新川の大通りから先は少し道がわかりにくい。二萬五千分の一圖によれば大體わかる。神代村に入れば、深大寺は、武藏野にはあまり無い程の老松の林が聳えて居るからすぐわかる。林をめざして大字深大寺字野ヶ谷から、西南へ眞直に六町程行くと青渭神社の前に出る。

青渭神社

郷社 神代村 深大寺 池ノ谷（天神ヶ谷戸と江戸名所圖會にある）

祭神 不詳（南多摩郡稻城村の青渭神社は青渭命とす）

國郡類纂には青沼押比賣命とあり國內神名帳には大己貴命とある由。延喜式内社の青渭神社であらうと云はれる。新編武藏風土記稿は、青波天神祠と云ひ、鎮座の年代不明、往古社地に池があつて、青波が立つて社前に至つたから、青波天神と云つたと傳へるが、式内の青渭神社は澤井村

のもので、当社ではあるまいと云つてゐる。社前にある楓の大本（目通周圍三間餘）は、昔から有名で、この邊から石器が非常に澤山かたまつて出た。

社から南すること、一町ばかりで、小學校の南角へ出る。前は谷で、右へ下る坂がある。谷を隔てた前の丘が深大寺の城址、城の各部の大きさ、丘の高さ等を概観するには最もよい所である。夏は木が茂つてゐて見難いが、冬ならば特によくわかる。

右へ坂を降りた突當りが、深大寺境内の不動堂で、この前を更に少し進めば深大寺の表門に達する。

深大寺

浮岳山昌樂院 天台宗 神代村 深大寺宿

本尊 寶冠阿彌陀如來（傳惠心僧都作）

丘を負うて、中央が本堂、東が庫裡、西の一段高い所が元三大師堂、鐘樓は門内のすぐ右手にある。鐘は永和二年山城守宗光作。

寺傳によれば、聖武天皇天平五年の草創で開山は滿功上人、當時は法相宗であつたと云ふ。日本年代配合抄と云ふ書に「天平勝寶二年庚寅深大寺建立」とある由。淳仁天皇の御代に勅願所と定められ、貞觀年中惠亮が天台宗に改めた。改宗したのは國司藏宗の叛逆の聞えがあつた時、叡山の惠亮が勅をうけて國分寺に來り、調伏の祕法を行ひ、其功によつて當寺を賜はつたのによるといふ（縁起）。元三大師は天曆七年（913）（一説、應和四年（964））大師自刻の像で、正曆二年（991）比叡山解脫谷から惠心僧都が移したものと傳へる。室町の末期に世田ヶ谷の吉良氏によつて、堂宇など再建せられ、寺領若干をも寄附された。江戸時代に入つて正保三年悉く焼失したが、其後も引つゞいて相當な寺（朱印五十石）であつた。

寺寶には左の如きものがある。

金銅釋迦如來倚像（國寶） 深沙大王像（傳滿功上人作） 不動明王畫像（傳智證大師筆） 般若十六善神畫像（傳

惠心僧都筆） 吉良氏寄附刀劍（波平行安作） 當山縁起寫二卷（參議右中將公尹筆） 融通念佛記錄繪卷物（梶

井宮堯胤法親王等御筆）

「深大寺假名縁起」享保七年）と云ふものがある。深沙大王・虎柏明神・福滿童子・吉祥天・滿功上人等を織りなした縁起で、江戸名所圖會などを見ると此等の小祠が、境内に畫いてある。今も大體その址がわかる。寺の西方の森の中に、明治四十年に建てた「舊鎮守深沙大王碑」が、もとの深沙大王堂址にある。この邊は大木が繁茂し、清泉が湧出して、如何にも大王の鎮座に適はしいやうな所である。地形から考へても山號や青淵神社や城などから考へても、寺の前には大きな池があつたらしい。大字深大寺の小字に、繪堂・御塔坂・仁王塚・堂山・殿分などと云ふのがある。皆此寺に關係があると云ふ人もあるが如何であらうか。近年まで堂山・

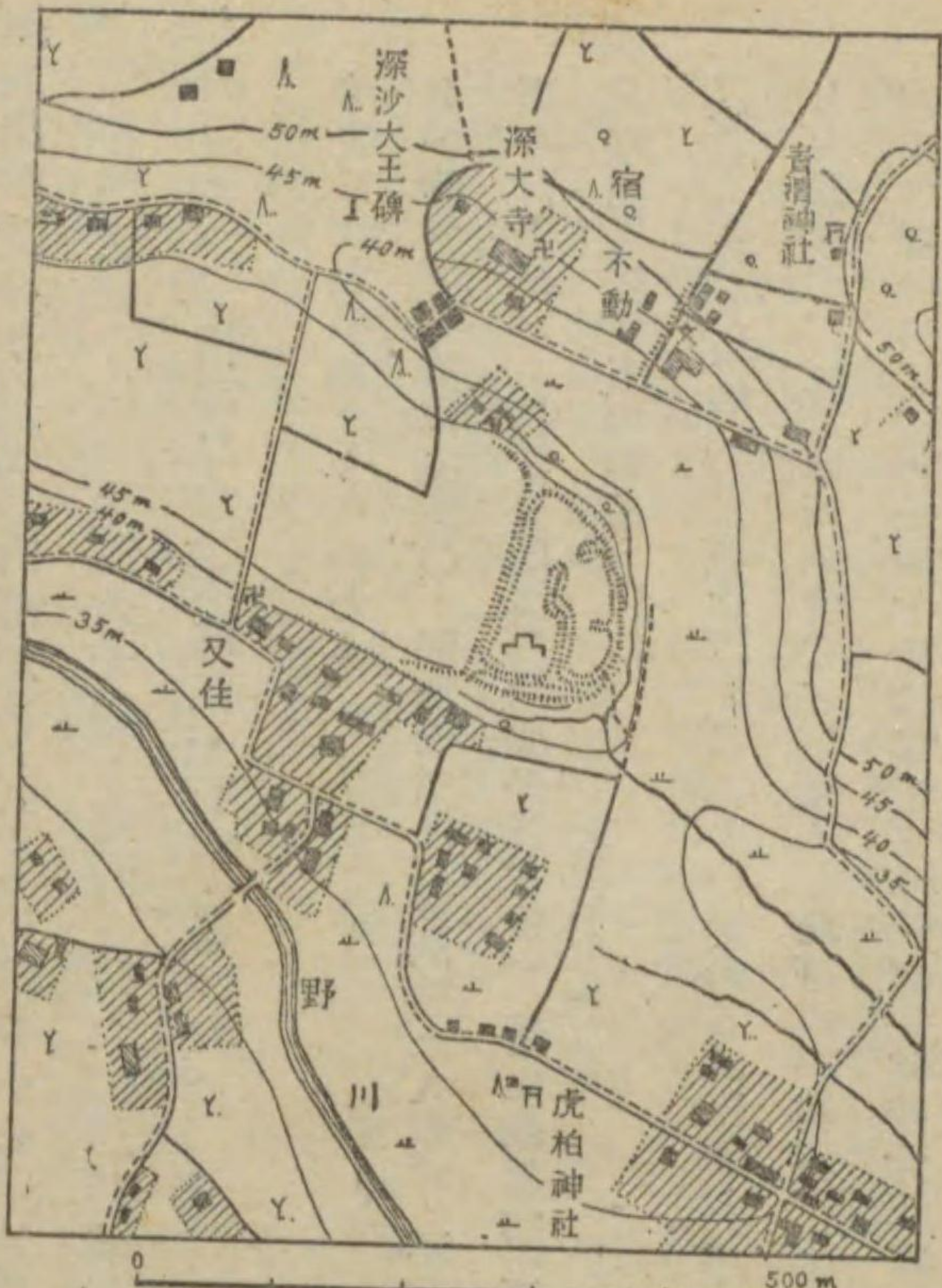
殿分邊から、布目瓦の破片が出たと云ふ。

深大寺城址は、深大寺の前の丘の東端にあるから、寺の表門前から農家の間を左の方に登つてもよし、又深

沙大王の碑の前から前の丘へ登り、畑の間を左へ行つてもよい。

深大寺城址 神代村深大寺宿（城山といふ）

城址は東南へ突出した細長い臺地の先端にあり、三方は崖で、西北の方だけが臺地に連つてゐる。其處を堀で二重に絶ち切つたものである。内外二郭から成り、内郭は東西約三十間、南北五十間、外郭は東西二十八間、



第七圖 深大寺城址附近の圖

南北七十七間、堀は何れも空堀で幅約五間、深さ三間（築城當時はもう少し深かつたと思はれる）、

土居の高さ今平均一間半（築城當時は二間以上あつたと思はれる）。東北の崖下には、幅一間餘の小川が流れて居るが、此邊の田は當時沼の様になつてゐたであらう。

天文の初頃扇谷上杉氏の屬城であつたが間もなく廢された。

天文六年上杉朝定の修造と云はれるのは北條五代記等に「武州深大寺と云へる古城を再興し、北條氏綱に向ひ弓矢の企專なり。」とあるによるのであるが、それ以前の様子は明かでない。此地は清和天皇の御代に武藏國司藏宗が住んだ居館の跡であるとの深大寺縁起等の説は信ずるに足らぬ。

大永四年北條氏綱は、上杉朝興を追つて江戸城を取り、次第に北進し、扇谷上杉氏を壓迫せんとし、上野の山内上杉氏に通じ、古河公方と結んで時機を窺つた。上杉朝興は天文六年四月に死し、子朝定が家を嗣いだ。こゝに於て北條氏の北進勢力に對抗して、南武藏を保つため、當城を築いてこれに據つたのである。この時北條氏の目標は河越であつた。然るにその位置が、江戸から河越に至る道筋からも三四里、北條氏の本據相模小田原方面から河越への通筋からも二里程離れて居たので、兩方へ都合良きさうで、實は何れにも都合悪く、其の効力を發揮することが出来なかつたのである。天文六年（1541）七月氏綱は江戸を發して河越に進軍した。朝定は當城を發して、其の本據河越城援助のため北進し、西北に向つて進行中の北條勢と河越の西南約二里、入間川の右岸三ツ木原で遭遇した。これが七月十五日の戦で、上杉氏に、その存亡にかかはる重要な戦であつたが、朝定は敗れて難波田忠行の松山城に走り、河越は遂に北條氏の占領する所とな

つた。

城址の南端から南へ降りて、眞直に南へ三町行けば虎柏神社である。

虎柏神社 郷社 神代村 佐須 上佐須

祭神 大歳御祖神

延喜式に見ゆる武藏國多摩郡八座の一で、崇峻天皇二年八月始めて祀ると傳へる。祭神については虎の字に附會して、膳臣巴提使であるとか福滿童子の母虎(深大寺假名縁起)であるとか云ふ雜説がある。

西多摩郡小曾木村にも虎柏神社といふ社があつて、大年御祖神を祀り、式内社だと云つて居るが、當社の方が有力である。

社の東方四町餘の所に、虎柏山日光院祇園寺(天台宗深大寺末)がある。開山は深大寺と同じく滿功上人で、天平寶字二年(759)の創立と傳へる。昔は虎柏神社の別當であつた。それから東へ行つて星林山柴崎院光照寺(淨土宗)を経て、京王電車柴崎停留場へ出てよい。光照寺には貞治・延文・康永・正元等の板碑がある。或は西へ行つて、布多天神社へ出て、京王電車布田停留場へ向つてもよからう。

布多天神社 郷社 調布町 上布田

祭神 少彦名命 菅原道眞

延喜式内社で、もと多摩川沿岸にあつたが、洪水のため危険であつたので、文明年中こゝに移したといふ。後世菅原道眞を配祀した。

舊別當は廣福山榮法寺(眞言宗)であつた。大正四年に三榮山不動院・紫雲山寶性寺の二寺と合併して、三榮山大正寺と稱した。

因に江戸時代には、上石原・下石原・上布田・下布田・國領を五宿といつて、毎月六日づつ交代で甲州街道の馬次をつとめた。「費用約六十錢」(鳥羽)

参考

井ノ頭及水道に關しては、東京市史稿水道篇。

八 國分寺と府中

國分寺 大國魂神社 國造神社 國府八幡宮 天神山 國府址 善明寺 高安寺
分陪河原古戰場

中央線國分寺驛に下車し、二町程東へ行つて線路を過り、府中に通ずる道を南すること六町餘、弓なりに曲つたゆるい坂道を下ると、小川があつて石橋が二つ架つて居る。西の橋の前には、大きな松があつて其の下に天保三年の石橋供養塔が建つて居る。國分寺へ行くにはこの西の橋を渡つて行くと近い。或は又東側の橋を渡つて更に本道を三町程先へ行き、「國分寺」の標示のある所を右へ曲つてもよい。府中から行くときは後者によるべきである。前記の石橋を渡つて西南へ一二町も行けば、路傍に、國分寺の舊材たる布目瓦の破片が落ちて居るのが目につく。

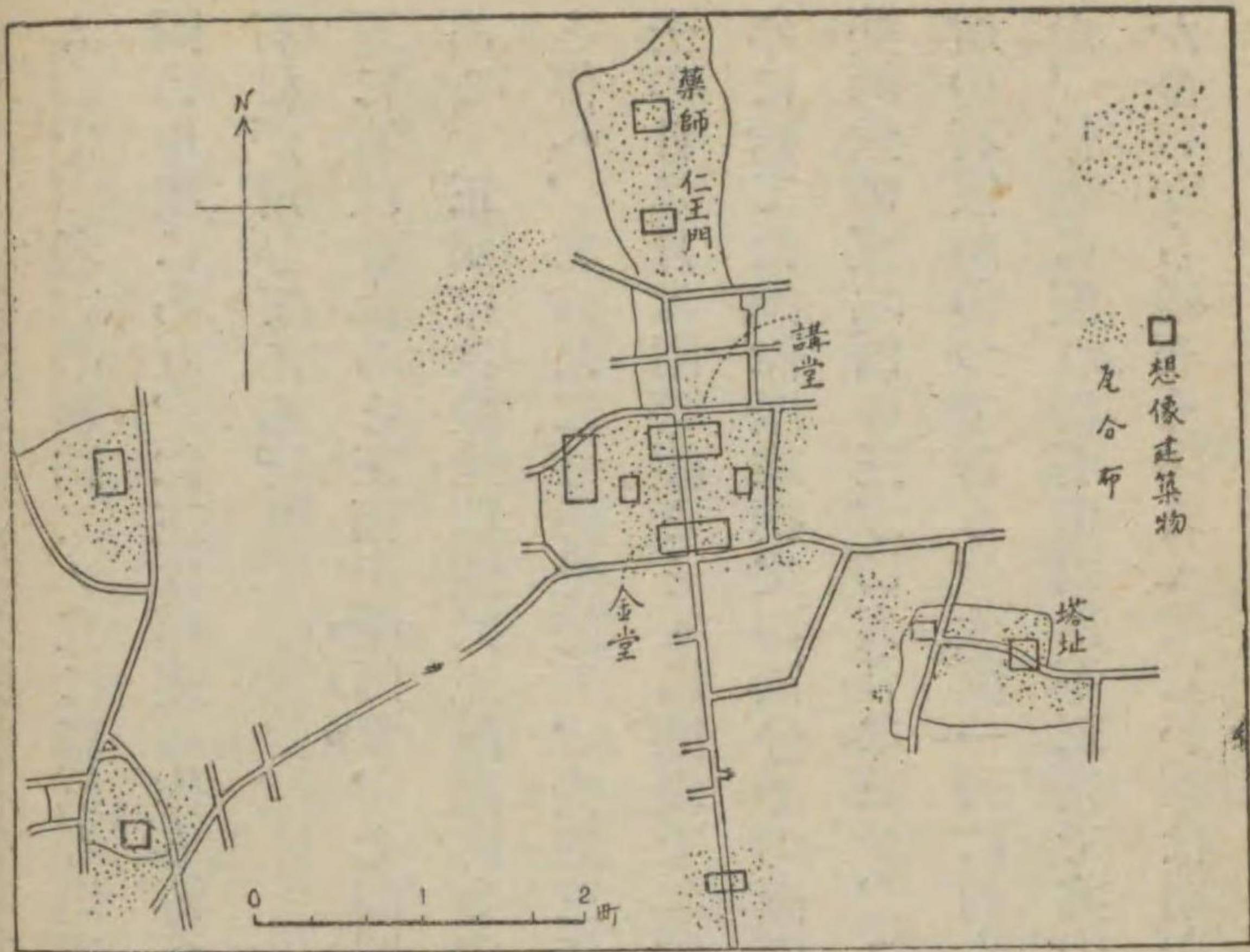
國分寺 醫王山最勝院 眞言宗 北多摩郡 國分寺村 國分寺

寺は字國分寺の聚落の西端れ、古木鬱葱とした臺地の南端にある。丘の上には藥師堂・仁王門、その東南の丘下には、樓門・本堂・庫裡等がある。樓門（明治廿四年建）を入ると、正面に本堂がある。こゝに古瓦や磚の完全なものや文字のあるものなどを藏してゐる。猶又この附近で出土し

た石棒・石斧等の石器類や板碑（その中正中三年の彌陀三尊佛來迎の圖像のあるのなどは見事なもので、考古學雜誌二ノ五に寫真も出て居る）なども數十點藏してゐる。仁王門は本堂の西方、岡の中腹にあり、仁王は運慶の作と傳へて丈七尺餘、門は建武二年の造立といふ。礎石には古い石材が用ひてある。

更に石段を上ると正面が藥師堂、七間四方で寶曆五年の建造である。これも礎石は舊材が用ひてある。正面には金光明四天王護國之寺の額がかゝつてゐる。本尊は藥師瑠璃光如來で、行基の作と傳へ、丈六尺二寸の坐像で、大正三年國寶に指定せられた。十二神將も行基作と傳へるが、脇士の日光月光兩菩薩とともに應永七年僧祖明の勸進修造とみた方がよい様である。堂前に寶曆六年に建てた攝津服雄撰文の國分寺の碑がある。

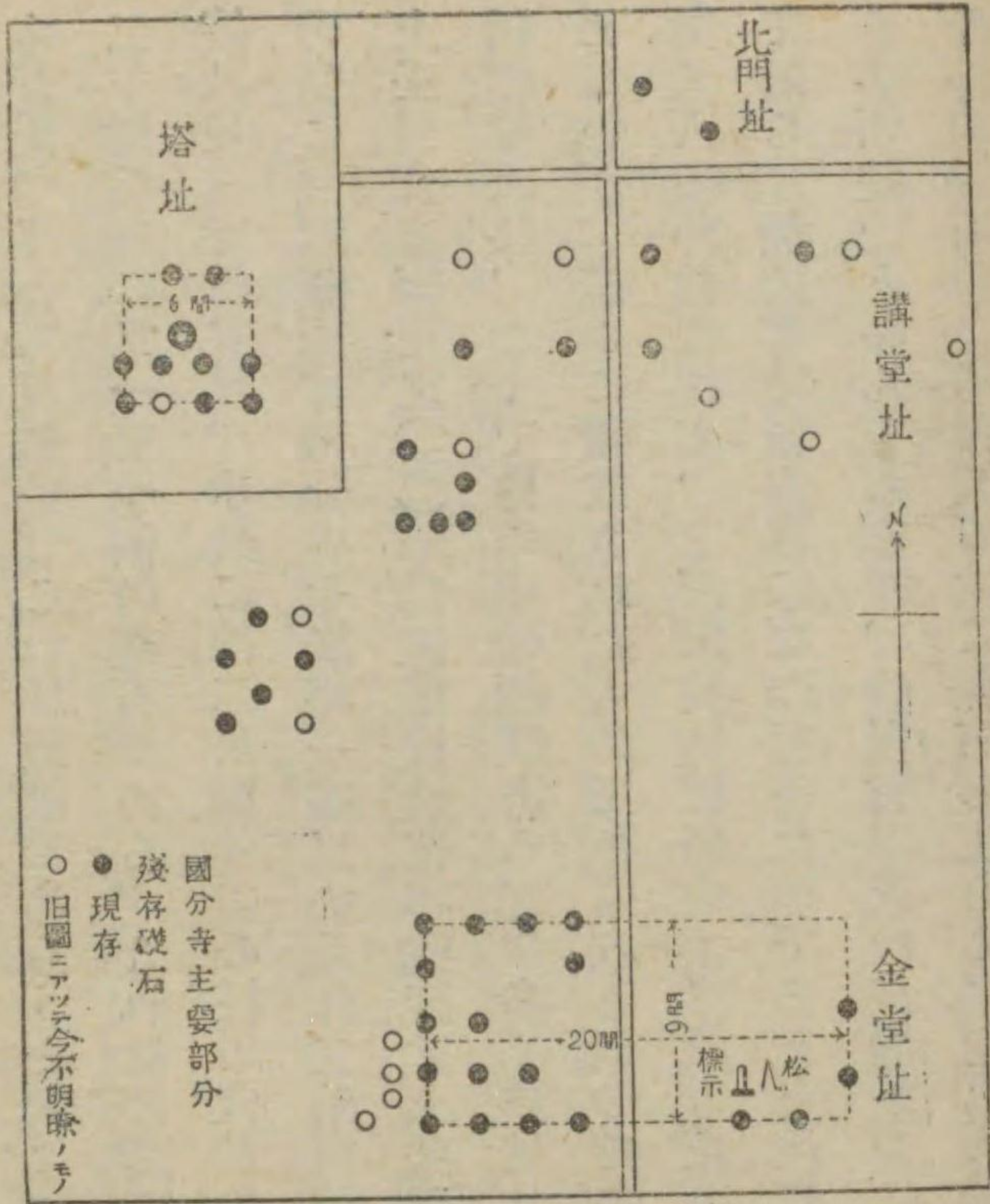
藥師堂の東北西の三方に大きな石が、コの字形にぐるつと一列にならんでゐて、上には八十八ヶ所の石像がのつてゐる。大體一列に列んで居るので、一見舊伽藍の礎石であるかの如く思はれるが、仔細に觀れば石の列は不正確で其の高低が違ひ、大きさが區々で礎石としては不適當なものが多いから礎石そのまゝでない事は明かである。しかしこれ等は丘上の伽藍の遺材であらう。寺の傳へでは、此等の列石は寶曆年間（1781）に藥師堂再建の時、信者が八十八ヶ所をつくるため



第八圖 國分寺境内の圖

一部は丘下からも運び上げて列べたものといふことである。寺域全體から考へてみると、この丘の上にも、建築物の一部分はあつたであらう。猶又丘下の遺址の礎石の大部分が無い所から考へれば、もとより或る一部分は下から持ち上げたものであらうが、下から全部運んだものとすれば、藥師堂附近に徒に大石の散在して居ることは少し變である。故に此等の石の内若干は藥師堂再建のため下から運び上げたものとするも、大部分はこの邊にあつた建築物であらう。即ち列石の或一部分は舊伽藍の礎石で、これに藥師堂再建の時の餘材を補つて、八十八ヶ所としたものであらう。この藥師堂の東南に八幡社がある。諸國に例のある國分寺八幡宮で、舊神

體は今寺に藏するといふ。舊伽藍の主要部分の址が明瞭に残つてゐるのは、藥師堂の前を真直に下つた突當りの畑である(第八圖第九圖参照、第八圖は同遺跡所掲の圖による)。



第九圖 國分寺礎石の圖

礎石は圖に示す如く、北方に一群、其の南に一群、この二群の中間の西方に一群ある。北の方は其の數も少く比較的明瞭でないが、南の方は整然と五列残つてゐる。中央の道が昔の正面の通に相違ないから七間四面で、奈良の唐招提寺の金堂の様であつたらう。これを奈良朝時代の寺院

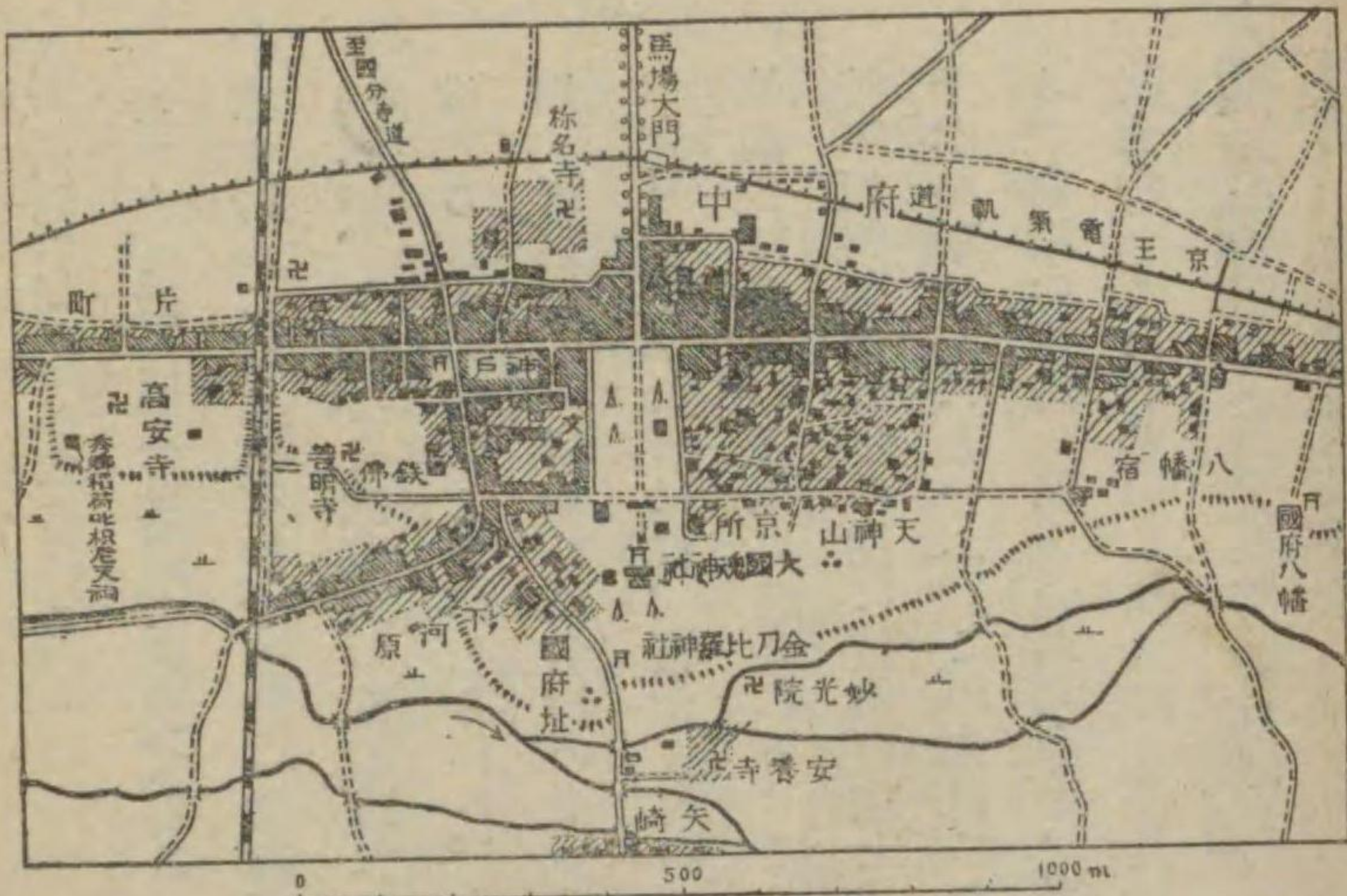
のプランに考へ併せれば、これは金堂で、その北のは講堂である。この中間西方一群は僧房で、講堂の北方道をへだてた桑畑中の二個は北門、金堂の南方にあるものは南門であらうと云はれる。

しかし、此等は推定が困難である。この他に、金堂址の東南方百間餘の所に一群ある。畑の間の木の茂つた小高い所がこれで、今一部墓地になつてゐる。礎石は東西に一系列に三つ四つあるが、草木が繁つてゐて見難い。これは鼓樓であらうと云ふ説もあるが、直ちに賛成は出来ぬ。この東方二十間の所に又一群十個の礎石がある。これは塔址で、真中に心柱の礎石がある。これは大きさ縦八尺三寸横五尺、中央に徑二尺四寸の心柱の穴がある。續日本後紀承和十二年(816)三月己巳の條に、「武藏國言國分寺七層塔一基以去承和二年爲神火所燒于今未構立也前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正之(云)奉爲聖朝欲造彼塔望請言上殊蒙處分者依請許之」とあるものであらう。沼田頼輔氏は、こゝで男の字の極印ある瓦を多く發見せられたので、其後この塔の事は國史には見えないが、確かに建立されたものであらうと云つてゐられる。

猶又八幡神社の西方、下河原貨物線路のすぐ西の丘上に礎石群が發見された。瓦片も澤山散布して居る。最近まで雜木林になつてゐたのであまり注意を惹かなかつた。これを一部の人々は國分寺の西院址と呼んでゐるが、柴田常惠氏は尼寺址ではあるまいかと云つてゐられる。瓦の破片は此等の礎石のある邊に散布してゐる。何れも所謂布目瓦で、質は非常に硬い。寺に完全なものを數枚藏してゐる。大きさはいろいろあるが、一例を擧げると、平瓦は縦一尺三寸五分横一尺二寸、厚さ八分乃至一寸、蓮華の紋様ある瓦當は徑約七寸ある。瓦には郡名・郷名・氏名等のあるものがある。郡名のある國分寺瓦は武藏の他下野其他にも若干あるが多くの國々にはないものである。この郡名は豊島以下十七郡にわたつてゐる。其他、荒墓郷・大井・白方等の地名も見え、又、國忍・豊字遲部里栖・戸主字遲部等の文字のあるものもある。此等の瓦は、必ずしも各地方でそれ／＼焼いたものではないらしく、埼玉縣比企郡龜井村大字泉井字新沼から、竈址とともに、豊島・秩父・幡羅等七八郡の名あるものを一所に發見したといふ。又東京府下では南多摩郡稻城村大丸字瓦谷戸と同郡堺村相原字陽田にも國分寺瓦の窯址がある。又講堂址などから磚が出る。これは下に敷いたものらしく、煉瓦の様な色で、大きさは一例を擧げると、長九寸幅五寸三分、厚さ一寸九分である。此等の瓦や礎石にも雄大な大陸文化の影響をうけた奈良朝時代の文化が偲ばれる。

國分寺は聖武天皇が天平十三年(741)三月乙巳(二十四日)詔して(これにつき萩野博士の論文が史學雜誌三三ノ六にある)、天下の諸國をして、國毎に僧寺・尼寺を造らしめ、僧寺は之を金光明四天王護國之寺、尼寺は法華滅罪之寺と稱せしめられたものである。この時、又金光明最勝王經・妙法蓮華經各十部を寫さしめ、僧寺には七重の塔一區を造り、天皇も亦別に金字の金光明最勝王經を寫され塔毎に一部を安置せしめられた。

其の趣旨は詔の最先に見ゆる如く、國泰人樂、災除福至にある。其の據り所は、金光明最勝王經に、若しこの經を誦し、これを敬ひ、これを流通せしむる國があるならば、四天王は常に來つて擁護し、一切の災障皆消滅し、憂愁疾疫を除いて、人々を常に歡びに満たしめるであらうとあるのによるのである。この信仰はこの頃盛であつた。天平から約四十年も前に四天王寺の建てられたのも、この信仰によるものである。かくして、佛教は渡來以來約二百年にして、完全に國家的佛教となり、外來の文化を齎して全國に流布せらるゝに至つたのである。この國毎の僧寺・尼寺には、水田各々十町（僧寺には更に封五十戸）を施され、僧寺には二十僧、尼寺には十尼を置き、毎月八日には必ず最勝王經を轉讀し、月半に至る毎に戒羯磨を誦する規定で、この寺のある國では毎月六齋日には、漁獵殺生を禁ぜられてゐた（續日本紀）。平安朝時代に入つてからも、武藏國分寺は引つゞいて相當に盛大であつたことは、延喜式に「武藏國正稅公隲各四十萬束、國分寺料五萬束」などとあるのによつても想像出来る。鎌倉時代になつてからも、吾妻鏡などにも、屢々現れて來るから國分寺の特に重要視せられたことがわかる。武藏國分寺の衰へたのは、鎌倉幕府滅亡の際に、新田義貞が鎌倉を攻めた時、府中や國分寺の附近が戰場になつて、その兵燹にかゝつたためと傳へる。今藥師堂にある十二神將や日光佛・月光佛等が應永年間の修造といふことであるから、室町時代にも、古の盛時には比すべくもないが可なりの寺であつたと思はれる。江戸時代には慶安元年（1658）國分寺藥師堂料として九石八斗九升の朱印額を附せられ、寶曆年間（1761）に至り、權大僧都法印賢盛の盡力によつて今日の様になつた。



第十圖 府中附近の圖

因に武藏の國分尼寺の遺跡は不明である。府中町京所から布目瓦の破片を發掘したことがあるので、京所の京は經であつて、尼寺はこの邊であらうとかいふ説もあるが、さして有力な説ではない。藥師堂から、講堂址・金堂址を貫いた小道は、古の國分寺の正面の道で、これによれば府中の大國魂神社の御旅所の前へ出る。御旅所は甲州街道から鎌倉への街道の曲り角である。従つてこの小道は鎌倉の方即ち上方から國分寺への正道である。今は畑中の小道になつてゐるから、散策などには、國分寺驛から府中に達する大通りも餘程面白味がある。けれども大國魂神社への正道はこの大通りであるから、これによる方がよい。國分寺から此大通りへ出るには、樓門前の道を東へ行つてもよい。金堂址から前述の正面の小道を三町ばかり南へ行つて左へ曲つてもよい。この道は、こゝで曲らないと先へ行くと左へ曲る道がない。地圖を開けば直ぐ氣づく様に、この邊は東西

に通ずる道が少く、皆府中に向つて扇の骨の様に集つて居る。これによつても府中が古くからこの邊の中心であつたことが知られる。

府中まで道は殆ど眞直で單調である。武藏野は平坦で何のさへぎるものもないから、鐵道さへもこの邊では東中野から立川まで約十五哩一直線である。何等さへぎるものない眞一文字な地平線に向つて、眞直に走つた道、これこそ武藏野の武藏野たる所である。昔はこの邊に牧場が多かつたことを考へても、如何にも廣漠たる様であつたことがしられる。小野の牧などもこの邊だといはれてゐる。道を夾んだ兩側は、桑畑・麥畑・野菜畑で、所々には名物の栗や檜の林もある。西の方には遠近の森や林の上に紫紺色の關東山脈の山々が連り、晴れた日には、富士もその上に姿をあらはしてゐる。坦途十六町をゆきつくすと、晩春か夏ならば緑滴るばかりの並木に包まれる。これが大國魂神社の馬場大門の並木である。長さは二百八十八間、鎮守府將軍頼義が前九年の役に發向の途上、この社に參詣して賊徒の調伏を祈り、凱旋の時、報賽として禱の苗木千本を奉納したといふ。この先例にならつて、徳川家康もその寄附した馬場に櫛を植ゑたのが即ちこれである。南端の龍卷の櫛といふ大木は、康平 105 (一)の昔のものといはれて居る。並木は内務大臣指定の「天然紀念物」である。

大國魂神社

官幣小社 府中町

舊稱 武藏總社六所宮

祭神 武藏大國魂神

二百八十間餘の並木の奥、一萬二千四百坪の境内は古木鬱葱として森嚴幽邃、まことに古の武藏の總社たるに恥しからぬ立派な境域である。甲州街道に面した大鳥居を入れば先づ左側に宮乃賣神社がある。次で神門(隨身門跡)あり、其の中の左側に鼓樓、右側に御神輿庫がある。中門を入れば拜殿(間口十間奥行八間)があり、その後が砂庭をへだて、正殿で、これは三殿一棟の相殿造りである。もと三棟であつたのを、寛文七年將軍家綱造營の砌(奉行久世大和守廣之)かく改めたものといふ。社が北向きなのも一寸注意すべきである。維新前には、拜殿の東方に、護摩堂・阿彌陀堂・本地堂等があつた。拜殿の西には東照宮其他の末社がある。

當社の創建は、景行天皇四十一年五月五日武藏大國魂神の託宣によつて此の地に祀つた(縁起・武藏總社誌)といひ、或は成務天皇の時、天穗日命の裔兄多毛比命を武藏國造に定められたが、この國造が大己貴命を崇信して、事の由を朝廷に奏し、始めて宮社を造營し、其祖素戔鳴尊を配せ祀り、此二柱を國靈大神と崇めて(新撰總社傳記)代々の國造がこれに奉仕して居たともいふ。大化改新の後、國府が此處に設置せられてから、國衙の齋場に充てられ、又國司巡拜等の便宜上武藏國內の諸神、殊に、顯著な六社の神を配祀したので、武藏總社六所宮と稱せられる様になつ

たといふ。創建の二説は兎に角、當國屈指の古社である（主として縁起による）。
當社は又、武藏風土記・延喜式にある大麻止乃豆オホマトノツ（智）天神社であるとも、これと小野神社との合祀社とも云はれる（江戸名所圖會）が、このことは、縁起等にも何等云つて居らず、今は社ではこれは認めて居らぬ。

〔延喜式神名帳〕 武藏國多摩郡八座ノ内 大麻止乃豆神社

〔武藏風土記〕 多摩郡 大麻止乃智天神 圭田六十七束六毛田

所祭 大己貴命也 安閑天皇乙卯年始奠宮社 花時以花祭之新稻之時以新稻祭之

東國交通の要衝、政治其他一國の中心たる國府に鎮座する爲、この社に關した種々の出來事も多かつたに相違ない。前九年の役には鎮守府將軍賴義、義家父子出征の途次參籠して戦勝を祈つたと云ひ、源賴朝は治承四年（1180）房總より再起して武藏に入つた時、當社社頭に近國の軍兵を集めた所、二十八萬餘騎を得たので神恩を謝して神馬を捧げたと傳へられる〔源平盛衰記等〕。それ以來幕府との關係も淺からず、文治二年・貞永元年・寛喜四年等に社殿を修造せられて、代々の將軍厚くこれを尊崇した〔吾妻鏡等〕。元弘の兵亂に、分陪河原を始めとしてこの附近が戰場となつたため、社殿は兵燹にかゝり、一時荒廢したが、室町時代になつてからも、鎌倉公方足利氏、又其の衰へて後は、小田原北條氏等此の地方に最も權勢ある家々の崇敬をうけ、北條氏の頃は四十八貫文の神領があつたといふ。社傳によれば天正十八年（1590）の役にも兵燹にかゝつたといふ。同年徳川氏が關東を領して、家康江戸に入城するや、其の國の總社であるといふので崇敬他社に異り、慶長十一年（1607）には社殿を改築した。關原・大阪兩役の後、神恩に報いるため、源賴義の古例にならつて馬場を奉納し、これに櫛を植ゑた（これは一つに府中から優秀なる軍馬を多く出したのによるといふ）。江戸時代の狀況は「六所大明神記録」によつて大體視はれるから左にこれを抄出する（これは天明（1781）以前のもので、これよりはやゝ後のものが新編武藏風土記稿によつても知られる）。

本 社（長九間横六間） 幣 殿（長三間横三間） 拜 殿（長七間横三間）

玉 齋（長三十間横十間） 御神輿藏（長五間横三間） 御神供所（長五間横二間半）

隨身門（長三間半横二間半） 本地堂（長二間横三間） 護摩堂（長二間半横二間半）

東照宮（長二間半横二間） 宮ノ女（長二間横三間） 同 拜殿（長二間横三間）

御朱印高五百石 此反別百十町内十八町者織田分石ノ内二百石ハ惣役人四十三人配分 三百石ハ神主持也

社地三町八段二畝十歩 長百八十五間 横六十五間 甲州通ヨリ北鳥居迄 長三百四十五間 横四間一尺

西馬場 長二百六十八間 横四間五尺 東馬場 長二百八十間 横六間

宋社

天神社地 長三十間横三十間（反別二段歩） 石塚社地 長四十三間横三十二間半（反別四段五畝二十

五歩） 八幡社地 長百三十間横七十間（反別三段三畝十歩）

國分寺と府中

神主 猿渡豊後 禰宜 織田大學 長官 鹿島田兵庫 同 佐野内膳 同 中善寺大和 同
 田村壹岐 社僧 想行寺 妙王院 圓福寺 妙法寺 安樂院 華光院 配官役 泉藏寺
 明治元年十一月勅祭神社に准ぜられ、後縣社となり、同十八年官幣小社に列せられた。縁起等によれば、總社とならぬ前には、祭神の御名によつて大國魂神社となへたといふが、今大國魂神社と稱せられてゐるのは明治維新後のことである。

祭神について更に詳説すれば、武藏大國魂神及配祀の神々とその神座は現今次の如くである。

- 六ノ宮 杉山大神
- 西殿 五ノ宮 金佐奈大神
- 四ノ宮 秩父大神

- 御靈大神
- 中殿 大國魂大神
- 國內諸神

- 東殿 一ノ宮 小野大神
- 二ノ宮 小河大神
- 三ノ宮 氷川大神

御靈大神は舊記に諸説あつて、素戔嗚尊とも伊弉册尊ともまた大國魂大神の妃神とも云はれる。東西兩殿の

六神の配祀年代は詳かでない。或は創建當時とも國造時代ともいふが、總社としての後ならば平安朝時代である。

現今云ふこの六宮の本社は、

- 一ノ宮 小野神社 郷社 南多摩郡多摩村大字一ノ宮 延喜式内社
- 祭神 天下春命(秩父國造の祖) 瀬織津姫命 倉稻魂命
- 二ノ宮 小河神社 村社 西多摩郡東秋留村二ノ宮
- 祭神 國常立尊
- 三ノ宮 氷川神社 官幣大社 北足立郡大宮町高鼻
- 祭神 素戔嗚尊 式内名神大社 武藏一ノ宮(大宮の條參照)
- 四ノ宮 秩父神社 縣社 秩父郡大宮町
- 祭神 八意思兼命 知々夫彥命 延喜式内社
- 五ノ宮 金鑽神社^{カナツナ} 官幣中社 兒玉郡青柳村二ノ宮
- 祭神 天照大神 素戔嗚尊 景行天皇四十一年日本武尊の東征の際、東國鎮護の爲伊勢神宮にて倭姫命から草薙劍とともに賜はつた火鑽金^{ヒワチカネ}を御靈代として奉齋したものと云ふ。
- 六ノ宮 杉山神社

國分寺と府中

延喜式に武藏國都筑郡杉山神社とあるもので、今郡内に同名の社が二十五六もあつて本社が不明である。續日本後紀承和五年二月庚戌の條にも見えて居る社。江戸名所圖會は神奈川在下星川の杉山社と推定してゐる。

現在の祭神及六所の神は右の如くであるが、古來必ずしもさうは云はれなかつた。参考として次に對照表を掲げ、維新前の本地佛をも併記する。

古縁起・新撰 總社傳記・武 藏總社誌等 主神を大國魂 神とす。	猿渡盛道の武藏總社六 所宮縁起(寛永元年) 依田貞鎮の武藏多摩郡 小野縣惣社縁起(享保 十年)	新編武藏風土 記稿に六所神 の一異説とし て記す祭神	亞宵氣尊 (毘沙門) 未來册尊 (文珠) 大宮賣尊 (地藏) 服狭雄尊 (彌勒) 大國魂神 (釋迦) 布留大神 (聖觀音) 本地は六所大明神記録 による。新編武藏風土 記稿に「近來此六神を 六所に充つる者あり。」	新編武藏風土記稿 江戸名所圖會(西 中殿を六所といひ 東殿を客來三所と いふと記す)	盛道の武藏總社 六所宮縁起及貞 鎮の小野縣惣社 縁起所載の本地 佛の位置	武藏總社誌 (江戸末期) 所載の本地 佛、下欄諸 宮に對應す	現在 武藏總社誌等
大己貴尊 少彦名尊 事代主命 健甕方尊 武甕槌命 經津主尊	大己貴尊 少彦名尊 事代主命 健甕方尊 武甕槌命 經津主尊	大己貴尊 少彦名尊 事代主命 健甕方尊 武甕槌命 經津主尊	一宮小野神社祭神 東殿瀨織津姫命 倉稻魂命	右 十一面觀音 十一面觀音	中 釋迦觀音 釋迦觀音 聖觀音(七ノ宮)	左 不動觀音 彌勒觀音 毘沙門	殿東 一ノ宮(小野神社) 二ノ宮(國常立尊) 三ノ宮(素戔嗚尊)

「大國魂神」には、普通名詞的及び固有詞的の意味があり、前者は(1)天神に對する地祇の意と、(2)他の地方に對して、或特別區域の地方神の意として、後者は即ち大己貴命をいふ。そこで現在はこの折衷し、武藏の國の神、武藏に功德のあつた神は即ち大己貴命であるとしてゐるのである。

總社とは數社の神々を綜合して祀る社の謂である。國府の總社は平安朝に起つた。本來國司は其國內の定められた主要な社に巡拜し奉幣すべき制度であつたが、平安朝の末地方政治の頽廢とともに、國府附近に其等の神々を合祀して、各社ですべき儀式を行ふ略法を用ひる様になつてこれが起つたのである。鎌倉時代には佛教に於ける國分寺に匹敵する様に考へらるゝに至つた。

六所宮とは六社の神を一つ所に祀つてあるのかいふ。三所明神(尾張)・四所明神(香取等)・五所明神(水戸)などいふものと同じ意である。總社六所明神とこの大國魂神をいふが、總社と六所とは必ずしも一般的に特別な關係はない。然るに總社六所の六所は録所て國內諸社の總録であるとか、國司の神拜所であるといふ説があるが、國府の總社が六所宮とか六所神社とかいふのはむしろ其例が少い。寛永日記や小田系圖(常陸)等には嵯峨天皇の頃から五月五日諸國の國司をして天神地祇六神を其國府に於て一所に祀らしめられ、總社と號したといふことが見えるが、これなどはむしろ武藏の總社を六所明神といひ、五月五日に祭をする所から逆に考へたものではあるまいか。下總の總社を六所神社といふのも亦武藏のになつたのではな

例祭 五月五日

午前神饌幣帛供進使參向、午後十一時本宮及び一ノ宮から六ノ宮までの神輿八基が御旅所(社の西方約三町、甲州街道の左側にある)に渡御する。一ノ宮小野神社の神輿は、當日南多摩郡多摩村の本社から来る。この神輿渡御の間、町内の燈火を消すので、俗に「くらやみ祭」ともいはれ、當夜は各町村美々しく神燈を掲げるから「提灯祭」とも云はれる。猶此以前四月三十日に、品川海上潔祓式、五月二日神鏡磨祭、三日に競馬式、四日に御綱掛祭等の祭式が行はれる(例祭古式次第書による)。江戸時代の初めには、毎年五月三日の競馬祭の日から、九月の晦日まで馬市があつた。これは八代將軍頃享保年間に江戸の淺草と麻布とに移つてしまつた。關原・大阪の兩役に用ひた徳川軍の馬は、多くこれに取つたと傳へ、大國魂神社の馬場と大門の並木の寄進も、これと關聯したものと云ふ。この馬市は始め國造時代から附近の牧の馬を集めて、其の中の良いものを選んで朝廷に奉り、其後諸國の馬の市をやつた名残であると傳へる。

李子祭 七月二十日

これはもと六月二十日に行はれたが、明治になつて太陽曆の七月にした。六月二十日は賴義・義家が奥州の亂平定後凱旋の時戦勝報賽の祭をした日で、其の遺例によつてこの日行ふといふ。この祭は桃が惡鬼を拂ふといふ古代の信仰と關係がある。

古例の供饌として、李子粟飯等を奉るので李子祭の稱がある。此日御歳神の傳へられたいなむしを除いて、年穀を豊穰にする方法であると云つて、社で鳥のついた扇を授與し、又社前には鳥の繪の團扇と李子との市がたつ。但古語拾遺にいふ烏扇とは、實は植物で學名 *Balanocanda punctata moench* といふ。鳥の繪の團扇ではない。

猶祭禮としては、七月十二日に攝社宮乃賣神社に青袖祭といふのがあり、其翌日には杉舞祭といつて、杉の小枝を持つて舞ふ神事があつた。ともに起原は文治の昔、源賴朝が毎年七月、國中の神職を集めて天下泰平の御祈禱をやる様に命じたのにあるといふ。それで、天下泰平の神事といつて、天保の頃までは入間郡北野村の物部天神社、同郡勝呂郷の住吉神社、多摩郡松原村阿岐留神社等の神職が參集して、行つたといふ。社藏の品は、屢々火災に罹つたりしたので、社の古い割にあまり古いものがない。中世の和鏡刀劍を多く藏して居る。文書記録類としては、家康以下の神領寄進狀其他敷通及縁起等がある。

攝末社の主なるものは次の如くである。

坪 宮 國造神社 府中町 本町

祭神 武藏國造兄多毛比命

本社の西約四町の處にある。國造本紀に「无邪志國造、志賀高穴穗朝世、出雲臣祖、名二井之宇迦諸忍元神狹命十世孫、兄多毛比命定賜國造」とある所のもので、五月五日の大國魂神社の大祭

の時、其の神輿が御旅所へ到着すると、此社から國造代と稱する使をたて、幣帛を奉る。これは國造が大國魂神社に奉仕した例が傳はつて居るものであると云ふ。例祭は二月十五日。

宮乃賣神社 大國魂神社正門外東側にある攝社

祭神 大宮乃賣命 又天鈿女命とも大國魂神の御母神とも云ふ。

もと宮之姬社などとも書かれて居る。江戸名所圖會の如きは、須勢理比咩命・奇稻田比咩命・木花開耶比咩命にして本社の後妃神なりと云つてゐる。創立は本社と同時代と云ふ。本社の大祭に神輿渡御の際は、この社前を通御のとき、俗に「御立寄り」と云つて、神輿を止めて、供奉の神官をして幣帛を奉らるゝ古式がある。又前述の如く、七月十二日には、青袖祭といつて、今は大國魂神社の神職のみが、形ばかりやることとなつたが、昔は國中の神職が集つて、舞樂をやり、天下泰平の祈禱をしたといふ。舞人が青袖の舞衣を着けて舞ふので、青袖祭と稱せられた。

國府八幡宮 府中町 八幡宿

祭神 譽田別尊

本社の東約九町、甲州街道の南にあり、老樹鬱蒼とした立派な境域である。聖武天皇の御代に諸國國府に建立せられた國府八幡であると傳へる。例祭は八月十五日。この境内で布目瓦を得たことがあつた。

東照宮

祭神 徳川家康公

本社の西にある。元和三年(1697)駿河の久能山から、神靈を日光へ移す途中、府中御殿に宿したので、その遺蹟へ元和四年秀忠の命によつて創した社、玉垣の中の享和二年の石燈籠に猿渡信濃守従五位下藤原盛房とあるのは當時の宮司である。

大國魂神社の社務所前を東へ行けば、桑畑へ出る。この邊を京所と云ひ、國分尼寺の舊址かとの説もある所で、問題の布目瓦は、少し注意すれば、路傍に發見することが出来る。總社六所宮の宮司猿渡氏の舊邸はここにあつた。猿渡氏は文治の頃目代として國衙の政務をとつた猿渡兼信の後で、兼信は幕府から總社檢校職に補せられ、其子爲信は大宮司となつたといふ。この東にある工場の東方の道をへだてた木の數本茂つた小高い所が天神山である。

天神山 府中町

丸山或は國造山と稱せられ、武藏國造を葬つた所と云はれる。西端に天神の小祠がある。祠下に國分寺の礎石に似た大石が一枚置いてある。この丘は東西に長く、大體飄形で四方が低くなつて

るるので、一寸所謂前方後圓式古墳の様に見えるが、これは自然のものらしく、斯様な形の上へ丸塚を築いたものであらう。

窪地を隔て東北に見える堂は薬師堂で、これは不明なる國分尼寺と関係がありはしまいかといふ説もある。

こゝから再び大國魂神社の境内へもどり、社殿の後の森をぬけて東南に進めば、金刀比羅社に出る。この社は、江戸名所圖會の繪にある觀音堂の跡らしい。

これから崖を南へ下れば本覺山妙光院眞如寺(新義眞言宗)である。こゝの本尊は十一面觀世音(もと地藏といふ)、清和天皇の貞觀年中(859—)眞如法親王の御願によつて、慈齊僧正の創建といふ。度々兵燹などにかかつて荒廢したが、永享十一年(1439)に宥源法印が再建して中興開山となつた。仁王門などあつて、可なり立派な寺であるが、明治時代にも屢々火災にかゝり、本堂は今建設中である。寺寶に北條氏照の書簡などある。小川を隔てた南隣りが叡光山安養寺(天台宗)である。本尊阿彌陀如來、開山は慈覺大師といひ、中興開山尊海上人(永仁頃の人)で、この寺も二度程焼けて特に著しい文書記録等を藏してゐない。

こゝから寺の西の大通りへ出て、これを北へさきの金比羅社の石段を右に見つゝ、坂を上ればこの左側が國府址である。坂を上り切つた所の茶畑の間を左へ曲る。

國府址

府中町 本町 御殿

今桑畑や茶畑などで、一部には小松なども植つて居る。面積凡そ二町許りで、東と北とは臺地に連り、西と南とは高さ三丈程の崖となつて居る。下には水田をひかへ、多摩の川原を俯瞰し、前方には多摩對岸の丘陵を望む。即ち國造・國司等の館址と云ふ。國司の制紊れて後廢絶したが、天正十八年(1590)徳川氏關東に入つて後、こゝに狩の時に用ふる殿舎を建てた。寛永十一年(1634)燒失し、再建したが、これも正保三年(1646)十月類焼し、其後は建てず、其址は享保に至つて、開墾して畑となつた。こゝの樹を伐ると祟りがあるなどと云つたとか、善明寺の記録に見えて居るさうである。

こゝから再び大通りを少し北して左に曲れば善明寺である。

善明寺

悲願山圓養院 天台宗 府中町 本町

本尊は丈六の阿彌陀如來、舊記がなくて開創に關することは不明である。中興開山は證海で、依田伊織貞鎮(解脱居士)といふ國學者が享保の頃に再興したのである。貞鎮は大國魂神社祭神表に引用した惣社縁起の著者である。この寺の門前の阿彌陀堂に有名な鍔佛がある。もと大國魂神社の境内にあつたが、維新後こゝに移された、大正二年胎内佛とともに國寶になつた。高さ約六尺

の鐵鑄の坐像である。左の襟に左の銘が鑄てある。

大勸進念阿彌陀佛明蓮大工藤原助近右志者爲過去二親行嚴新發意乃至法界衆

生平等利益奉鑄一丈二尺佛身也建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

胎内佛は立像である。「金佛阿彌陀如來の由來」には、胎内佛は、畠山庄司重忠が、夙妻太夫と云ふものゝ菩提の爲に鑄造して、無量山道成寺といふ寺を建てゝ安置したもので、元久二年(1205)畠山重忠戦死の後には、この寺も廢頽して、さきの佛も雨風にさらさるゝ様になつたので、これを保護するために僧明蓮と藤原助近とが相謀つて、建長五年(1253)に一丈二尺の鐵の坐像を鑄て、重忠建立の小像を其の胎内に納めたのであると云つてゐる。

善明寺から高安寺までは、表通りを行つても裏を行つてもよい、表の方が少し遠いかもしいが、道もよく順序であらう。裏からならば、善明寺の門前を通つて右へだらだら坂を下り、櫻の並木道を行き鐵道線路を越えれば高安寺である。

善明寺前から甲州街道へ出る道は、古の武藏から相州鎌倉への街道であると云はれて居る。この道が甲州街道へ合する角の丹塗りの柵をめぐらした所は大國魂神社の御旅所で、大祭のとき神輿はこゝに渡御するのである。それから甲州街道を西へ三町ばかり、國分寺驛から多摩川原へゆく砂利運搬の鐵道線路を越えると間

もなく、左に武野禪林の額のかゝつた黒門がある。こゝが高安寺である。

高安寺

龍門山等持院 曹洞宗 府中町 片町

大門を入れば突當りに東へ向いて觀音堂があり、その西北に三間三面の樓門(明治五年建築)がある。木鼻の人面鳥身の迦陵頻伽の彫刻、門下の地藏菩薩と葬頭河婆の木像とは位置から云つても面白い。この門の西北に鐘樓(鐘は安政五年(1858)再鑄)がある。樓門の正面が本堂で、その後方は半町四方も畑になつてゐるが、昔はこの所にも、鎌倉公方が、屢々宿つた立派な建物があつたであらう。

本尊は釋迦如來(傳賢俊法眼の作)、開基は平將門の天慶の亂を鎮定した藤原秀郷で、市川山見性寺と云つたと傳へる。其後足利尊氏がこれを中興した。故に等持院と號するので、龍門山高安寺の號もその命名と云ふ。開山は大徹心悟禪師(貞和頃の人)、又海禪寺七世徳光禪師の再興といふ。塔中十院末寺七十五を有し、室町時代に於て當地最大の寺院であり、又要害もよく、足利氏とは淺からぬ縁があつたから、屢々鎌倉公方の陣營となつた。即ち、

永徳元年(1381)小山義政を征伐のため、鎌倉の足利氏滿が關東十二ヶ國の兵を率ゐてこゝに陣した。

應永六年(1399)大内義弘の亂の時、滿兼こゝに出勤し、

同三十年(1423)常陸の小栗滿重謀反のとき、足利持氏が出征の途上陣し、

永享十年(1438)持氏と上杉憲實との對抗の時、持氏は一時當寺にあつた。

康正元年(1455)足利成氏が上杉氏を討たうとした時もこゝに陣した。

何故かく府中は室町時代に事が多かつたが、これは分陪河原とともに述べよう。

境内の西南隅秀郷稻荷祠の後は西と南とは崖をなし、明かに人工を加へたと認められる。前述の如く屢々鎌倉公方の陣となつたこと、考へ併すべきである。江戸名所圖會にも東西南の三方今も堀を構へたる形残りありとある。

秀郷稻荷は江戸名所圖會などにも、「藤原秀郷靈祠今稻荷明神に勧請す」とある如く、一説に秀郷を祀つたものと云ふ。江戸時代には普通に神として祭られて居らぬものを神として祠を建てることがやかましかつたので、合祀と云ふ形であらうか、大抵何々稻荷と號して祀ることが行はれた様である。こゝに秀郷の祠があるのは、即ち天慶の昔秀郷が武藏守であつた時の邸址と傳へるからである。

この寺には又、辨慶に關する傳説とその舊跡といふものがある。昔辨慶がこの寺で大般若經を書寫したといふ。その經と机に向つて寫經して居る自畫像とは焼けて今はないが、釣鐘をかついだ木像がある。秀郷稻荷西北方の低い所に、所謂辨慶硯水の井があり、その北方甲州街道に架した橋を辨慶橋といひ、なほ東には辨慶坂がある。此等は辨慶が武藏坊と云ふ所から、武藏國府へ結びつけた傳説と思ふ。

此の寺から西南に見下さるゝ田の中の一聚落は字分梅で、この邊から南方多摩川に至る邊を分陪河原古戰場と稱せられる。河原へゆくには、道はいろ／＼あるが、どれでもよい。

分陪河原古戰場

府中町 分梅・多摩村 下河原・西下村 中河原附近

多摩川の河道が大分變遷があつたと思はれるが、今この邊は、水田・人家・河原等である。この河原の名稱については、治承四年(1130)十月源賴朝が諸軍をこゝに部署したので軍配河原と稱したのが訛つて分陪又分梅となつたと傳へるが、臆説にすぎぬ。此處に行はれた主なる戦は次の如くである。

1. 元弘三年(1133)五月十五日、新田義貞の鎌倉攻に際し、高時の弟左近大夫將監入道惠性の率ゐる北條軍を撃破した戦、この戦は史上最も重大な戦であるから、これに關することを書いたものは、古くは太平記・

梅松論以下澤山ある。

2. 永享十年(1438)八月、鎌倉公方足利持氏と管領上杉憲實と不和であつた時、上杉勢がこの所に陣したこと

がある「兵亂記・鎌倉九代後記等」。

- 3. 康正元年(即ち享徳四年)(1455)持氏の子成氏と上杉房顯と戦ひ、房顯等敗走した「鎌倉大日記・永享後記等」。
- 4. 永祿四年(1561)に、上杉謙信が關東に討入つた時、北條氏の家人中條出羽守の軍を襲つて、其荷物を奪つたのもこの邊である。

猶府中附近での戦では、元亨二年(1322)七月小山下野守秀朝一族百餘人逆徒相模次郎を討ち、建武二年(1332)五月諏訪三河守等が鎌倉へ赴く途中、澁川刑部大輔等と府中附近に戦ひ、正平六年(北朝觀應三年)(1350)足利尊氏が新田義宗と戦つたのは、府中の少し東の人見原である。又享祿三年(1630)六月上杉朝興と氏康との合戦もあつた「鎌倉九代後記等」。

歸路は、大國魂神社の馬場大門の並木の傍から京王電車で新宿へ。「汽車・電車賃約八十錢」(鳥羽)

参考

武藏國分寺に關しては

東京府編 東京府史蹟勝地調査報告(第一冊)

一般國分寺に關しては

辻善之助氏「國分寺考」(日本佛教史研究所收)

九 百草・立川方面

小野宮 關戸古戰場 一ノ宮小野神社 百草園 高幡不動 立川原古戰場 普濟寺

新宿から京王電車で府中を経、中河原まで行つて下車。或は府中で降りて、甲州街道を西すること約十町、字屋敷分の或小徑を南へ入り、一町程行くと八雲神社がある。社側の路傍の椈の根に抱かれて元應元年(13)16)の大きな板碑がある。之を見て南し、市ノ川に沿うて田疇の間をしばらく行くと、左手に一叢の村落が見える。小野神社は此の中にある。

小野宮 小野神社 郷社 北多摩郡 西府町 本宿 小野宮

祭神 天下春命 瀬織津比賣命

延喜式内の社と稱して居るが、今は農家の間に一叢祠を存するばかりである。江戸名所圖會には、祭神は瀬織津比咩命・下春命・倉稻魂命の三神とある。社記によれば、人皇三代安寧天皇の御代の御鎮座、成務天皇の御代に至り、當時の國造の崇敬厚く、此社の祭神を六所宮の相殿に遷されたといふ。今の大國魂神社の客殿は即ち是である。

小野宮から多摩川の清流を渡ると、相模丘陵の入口の様な處に關戸の町がある。町に入る少し手前の右側に、

東京府で建てた關戸古戦場の標示札がある。

關戸古戦場 南多摩郡 多摩村 關戸

元此地は鎌倉と陸奥・上野等とを連ねる鎌倉街道の一驛に當り、前に多摩川を控へて居るので、戦略上屢々、劔戟の巷となつた。

太平記の正慶二年(元弘三年)(1333)合戦の條に、「義貞數箇所の戦に打勝ち給ひぬと聞えしかば、東國八箇國の武士共順ひ付く事雲霞の如く、關戸に一日逗留ありて、軍勢の着到をつけられるに、六十萬七千餘騎とぞ注しける。」とあるのなども此の所の事である。

町に入る前、右方の山腹に時宗の延命寺がある。又關戸の入口を右へ山道を入れれば右手の小高い所を天守臺といひ、上に金刀比羅宮を祀る。その石段を下りて數町行くと、右手に吉祥山壽德寺(曹洞宗)の森が見える。この寺から北へ廣い街道を進むと、行手に一ノ宮を圍む聚落が見える。

一ノ宮 郷社 多摩村 一ノ宮

祭神 天下春命 瀬織津姫命 倉稻魂神

此の社も亦小野神社と言ひ、延喜式内の社と號して居る。即ち川の兩岸の小野神社が共に式内社と稱してゐるのである。

本社の祭神は大國魂神社客殿の三神である(大國魂神社祭神表及び祭典の條参照)。毎年大國魂神社の祭典の時には此一ノ宮の神輿が渡御する例になつて居る。

今來た路を戻つて、丘の中へ入り、字百草を通つて段々眺めよくなる山の中を行けば、郷社百草八幡神社(もと別當松蓮寺)の石階の下に出る。社の前を少し北へ行くと、百草園の休處がある。

百草園 七生村 百草

江戸名所圖會・調布日記・新編武藏風土記稿等に嚴しく慈岳山松蓮壽昌禪寺と記され、黄檗宗一方の雄として振つた松蓮寺も神佛混淆廢止の時廢せられて其財寶堂塔皆散逸して了つた中に、辛くも殘されたのが元庫裡であつた此の百草園の今の家である。

眺望甚だよく、武藏野一帯を一望のうちに收むることが出来る。

百草園の前の坂を北へ降りると廣い道へ出る。其處の道傍に延文三年の板碑がある。絶えず多摩川の流を右に控へた此道を西へ行くこと約二十四五町で高幡不動の前へ出る。山下の百草停留場から高幡停留場まで京王電車も利用出来る。

高幡不動 高幡山明王院金剛寺 眞言宗 七生村 高幡

百草・立川方面

境内も相當に廣く石碑等も大分有り、一寸した流行佛の中にも數へられるので、名前を鐫つた石垣や石柵、堂を取り巻いた寄進札等稍々俗な感がないでもない。

大寶以前の開創で、後弘法・慈覺・平圓相次いで再興し、屢々勅願所となつた。本尊の不動明王は弘法大師の作といひ、脇士の制陀羯伽羅二童子は本尊よりも後に化身の人の作つたものと傳へて居る。後世武家の信仰厚く、本尊亦種々の靈驗を現し、天下に風水疫癘等の諸災の起る前には佛體に汗を生じたといふ事である。昔は後の山上にあつたが建武二年(1335)の暴風雨の爲に倒壊したので、今の地に再建したものである。不動尊の火焰の後に「康永元年六月廿八日修復功畢」とある。寺寶としては文永年間の鰐口が有名で今不動堂に懸つて居るのがそれである。江戸名所圖會には「徑一尺九寸文字九十四字を刻す。其銘左のごとし。」とある。其の文字は次の如くである。

(表)敬白 奉 懸

右尋當寺者。慈覺大師建立。清和天皇御願所。第二建立斗圓陽成天皇。

彼時頼義朝臣。自於登山奉崇八幡。第三建立永意得行窻兩檀。

大檀那美作助眞并記氏一宮田人鍋師源恒有

文永十年庚酉五月廿日

銀念西守氏 鐵 青 蓮

(裏)武州高幡山常住金剛寺虚空院別當法印等海、文安二年二月三日、乘海願主とある。

此鰐口は元八幡社に懸けてあつたのを、八幡社の改築の際に不動堂に懸けたものであるといふ。八幡社は今不動堂の後にある。其他畠山重忠の太刀等を藏してゐる。

境内には附近で戦死した上杉憲顯の墓や、維新の際官軍に抗した近藤勇・土方歳三等の碑も有る。此處でも貞永六年・嘉吉元年等の板碑が出たことがある。

不動を辭して高幡橋を渡り田疇の間を行く事數町で日野の町に入る。江戸時代の甲州街道の一驛で、昔の傍も稍々しのびうる。日野驛から歸つてもよいが、尙時間があつたら立川へ行つて普濟寺其他を訪れるのもよい。日野から普濟寺へは、日野の渡を渡つて、多摩川に沿うた道を西へ行けばよいのである。渡しの邊は即ち後述の立川原古戦場である。(以上太田)

立川原古戦場 北多摩郡 立川村

立川村の東部から、谷保村青柳に近い邊、即ち日野渡から萬願寺の渡の間の川原である。

永正元年(1504)九月、扇谷上杉朝良と山内上杉顯定と戦つた古戦場である。

山内上杉顯定の詭計に陥つて扇谷上杉定正が柱石の臣太田道灌を殺してから、兩家はしきりに争ふ様になつた。定正は河越・江戸・小田原（其麾下大森氏之にあり）等の諸城によつて南武藏と相模とを根據とし、古河公方足利成氏と通じ、顯定は北武藏・上野を根據とし、越後の上杉氏を後援として相對峙し、屢々武相の各處に戦つた。定正の死後嗣子朝良これを繼ぎ、永正元年（1502）九月、駿河の今川氏親、伊豆の伊勢長氏の援兵を得て、廿七日この立川原に戦つたのである。始め扇谷方が優勢であつたが、後顯定は越後の上杉房能の援を得たため勢を挽回し、再戦に於て勝利を得、朝良は河越城に引上げた。次で河越城は圍まれて翌年三月に及び、遂に和睦し、朝良は江戸城に移つた。かくして子朝興が大永四年北條氏綱に逐はれて再び河越へ移るまで江戸が扇谷家の本據となつた。前述の立川原の戦を一回とする説「相州兵亂記等」と二回とする説とがある。

普濟寺

玄武山 臨濟宗 立川村 柴崎

寺は多摩川に面した武藏野臺地の端れにある。南は數十尺の斷崖で、多摩川を俯瞰し、仰けば關東山脈の連山をへだて、富士をも望み、武藏野としては風景もすぐれてゐる。南向の本堂を中心にして、境内も廣く、東南に二門を開く。

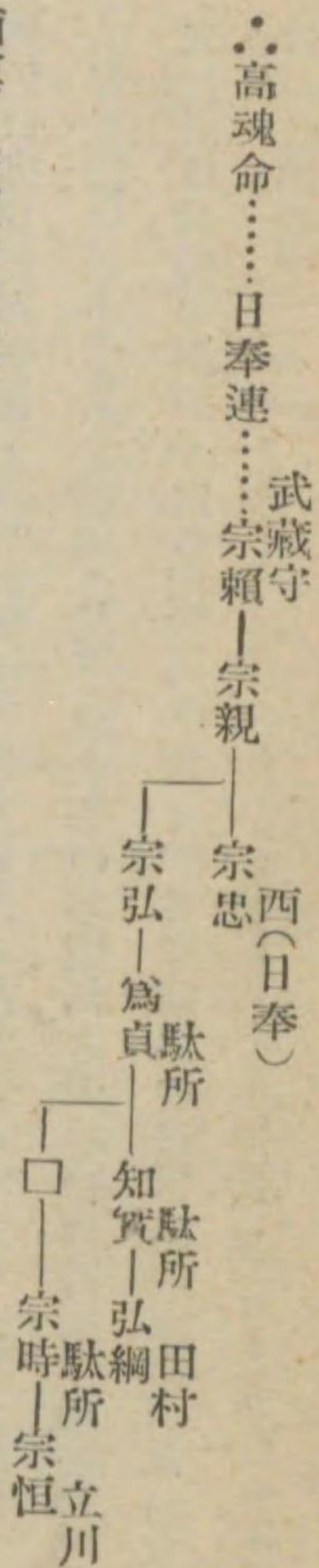
この邊はもと立川氏の本據地で、其の居館が此處にあつたと云ふ。正平十年（文和四年）（1352）

にその城中に一寺を建て、鎌倉建長寺の物外可什（貞治二年寂）を招請して開祖となしたのが即ち當寺の起りであると云ふ。其の後、門末廿餘ヶ寺、塔中七ヶ院を有するまでに隆盛に赴いたが、天正晩年の火災の後振はなくなつたと傳へる。今も猶大檀那立川宮内少輔（法名寶山道貴大禪定門）の位牌がある。

主な寺寶としては開山物外可什和尚木像と六面塔とがある。いづれも國寶に指定されてゐる。物外可什の像は和尚の滅後、應安三年十一月佛師上總法橋朝宗の作で、高さ二尺七寸、拂子を拈し曲録によつた像である。六面塔は昔から有名なもので、高さ五尺二寸、幅一尺四寸、厚さ三寸餘。秩父石（綠泥片岩 Chlorite schist）で六角に組み立て、同質の臺石及笠石がある。前方の二面には金剛・密迹の二王、他の四面には佛法守護の増長・持國・多聞・廣目の四天王の浮彫がある。持國天の像の右下に「延文六年辛丑七月六日施財性了立道圓刊」とある。

附近に立川宮内首塚・宮内鞍掛松などと云ふものがある。この首塚といふものゝ邊から、明治初年に文永・弘安・永仁・正中・正安・正和・嘉曆・建武等の年號ある大小の板碑七十餘を發掘したことがあつた。

立川氏は武藏七黨の一なる西黨の一族で、日奉宗忠の弟宗弘の後裔宗恒が立川に居館を構へて立川氏と稱へたのに起る。



西黨は宗頼が武藏守として下向し、其の子孫が土著して、多摩川沿岸の百草・平山・日野・關戸・立川等を本據とし、由比牧・小川牧等の別當となり、一大勢力を得るに至つたものである。日野・平山・長沼・由井・川口・小川・由木・狛江等の諸氏は皆其の一族である。立川氏は爾來此地にあつたが、戦國の頃小田原北條氏に屬し、天正十八年これと運命をともにしたのである。武藏・相模・下總・上野邊には、これと同じ様な興亡の經歷を有する氏族が少くない。「費用約一圓」(以上鳥羽)

参考

- 福井利吉郎氏 普濟寺石幢の形式に就て(藝文五ノ四)
- 石 上 生 普濟寺の板碑について(考古學雜誌三ノ一)

一〇 二宮・瀧山方面

二宮明神 二宮館址 高月城址 瀧山城址

五日市鐵道東秋留驛に下車、驛前の道を少し南し、左に曲つて東北へ線路を越して行けば、すぐ東北にある杉の森が二宮明神(小川神社)である。五日市鐵道は回数が少いから、時間の都合では、青梅鐵道(電車)の福生驛で降り、西多摩橋に多摩川を渡つて、二宮に入る方が便利なることもある。福生驛と西多摩橋との間を玉川上水を渡る(井ノ頭深大寺の條参照)。

二宮明神 小川神社 西多摩郡 東秋留村 二宮

祭神 國常立命

創建の年代は詳でないが、江戸時代には藤原秀郷の勸請した社といつた(神主野村氏所傳)。天正十九年以來十五石の朱印を附せられて居た。府中の總社(今の大國魂神社)六所明神の一坐はこの社の神である。但江戸時代には六所の祭神が變つて居たため(大國魂神社の祭神表参照)、この兩者の關係はあまり云はれなかつた。

社は東に面して臺地の一角にあり、境内の御手洗池は盡きざる泉の水を湛へ、境内から布目瓦を

發掘したこともあるといふから、恐らく原始時代からの地方的中心地であつたことゝ思はれる。

社の前から東南の方、敷町を隔てた水田の中に松が數本と小祠とが見える。此の邊を小名「おほやしき」といひ、館址はこの附近と推察せられる。此處へは社前から東へ眞直に線路の北の道を行く、二町程行つて右に曲り線路を越えて、又二町程で達する。

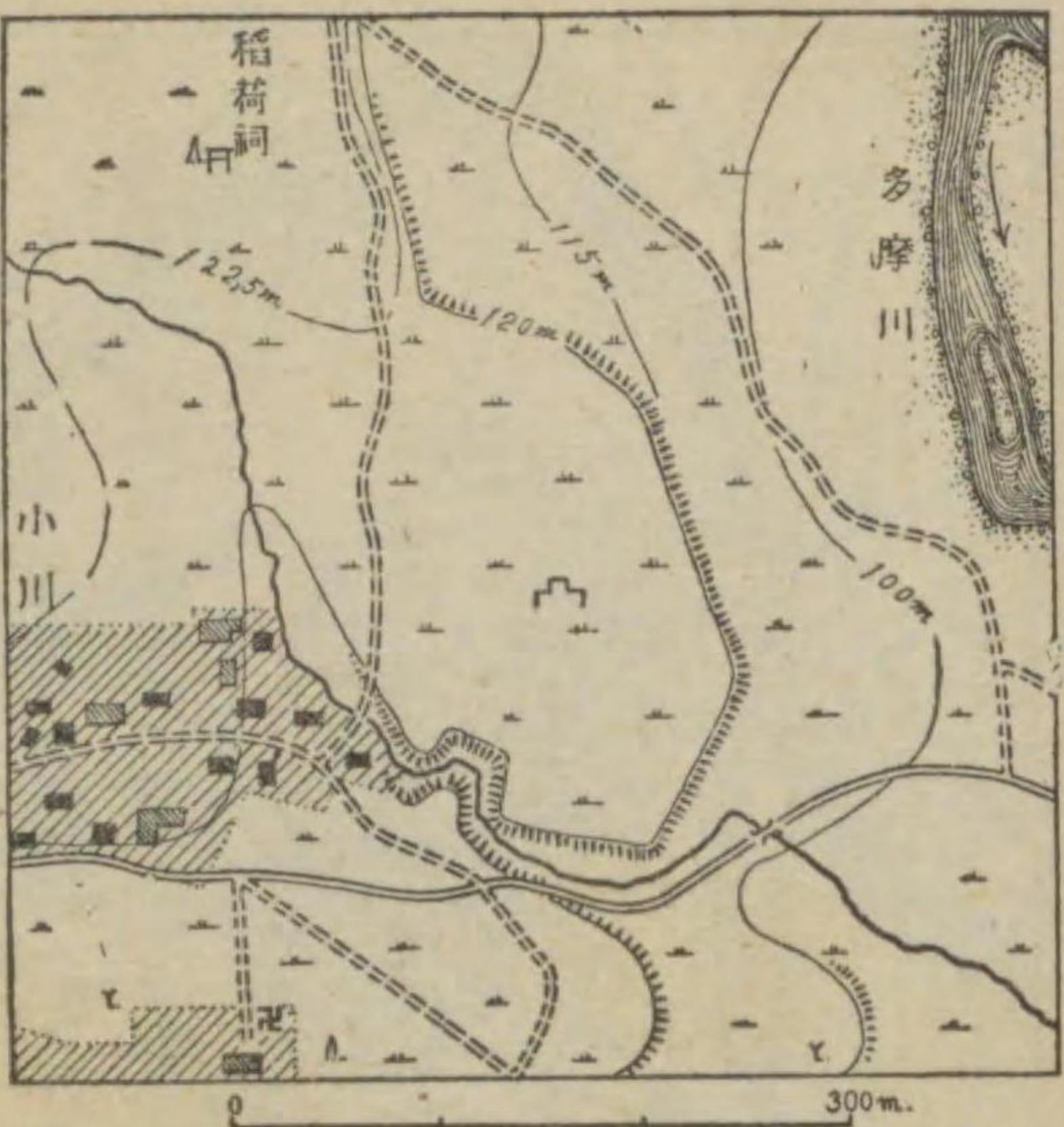
二宮館址 東秋留村 二宮 稻荷前

多摩川原に沿うた低地に突出した臺地で、河面からの高さ約三十尺、丘上は今全部水田で、土居等は残つて居ないが、たゞ西南部に人工と認め得る堀跡が乙の字形に存して居る。この堀は幅十間程で、今中央に小川が流れ、一部は水田に利用されて居る。丘の東側と南側とは崖が可なり急傾斜に削られて居て、人工を加へたものと認め得る。西方は水田續きで何等の區劃も見えないが、稻荷の祠と、その前を南北に通ずる道とを何等か境域に關係があるものとすれば、全地域は東西二町、南北三町程の大きさとなる。この所は一に「おやしき」とも稱せられた〔新編武藏風土記稿〕といふ。

此處は二宮氏の居館址であらうと推定されて居る〔渡邊世祐・八代國治兩氏の「武藏武士」〕が、それより後の大石氏の館址とも考へられないでもない。何れにしても所謂武家時代初中期の地方豪族の居館址として、即ち當時の地方に於ける社會生活の中心として一見に値する。

二宮氏は武藏七黨の一、西黨の一族である〔立川の條參照〕。吾妻鏡に見える二宮時光等も其族人であらうと云はれる。

武藏守宗頼—宗親—西宗忠—宗貞—宗綱—上田二郎—小川四郎—久長—二宮太郎
大石氏に就いては次項高月城址の條參照。



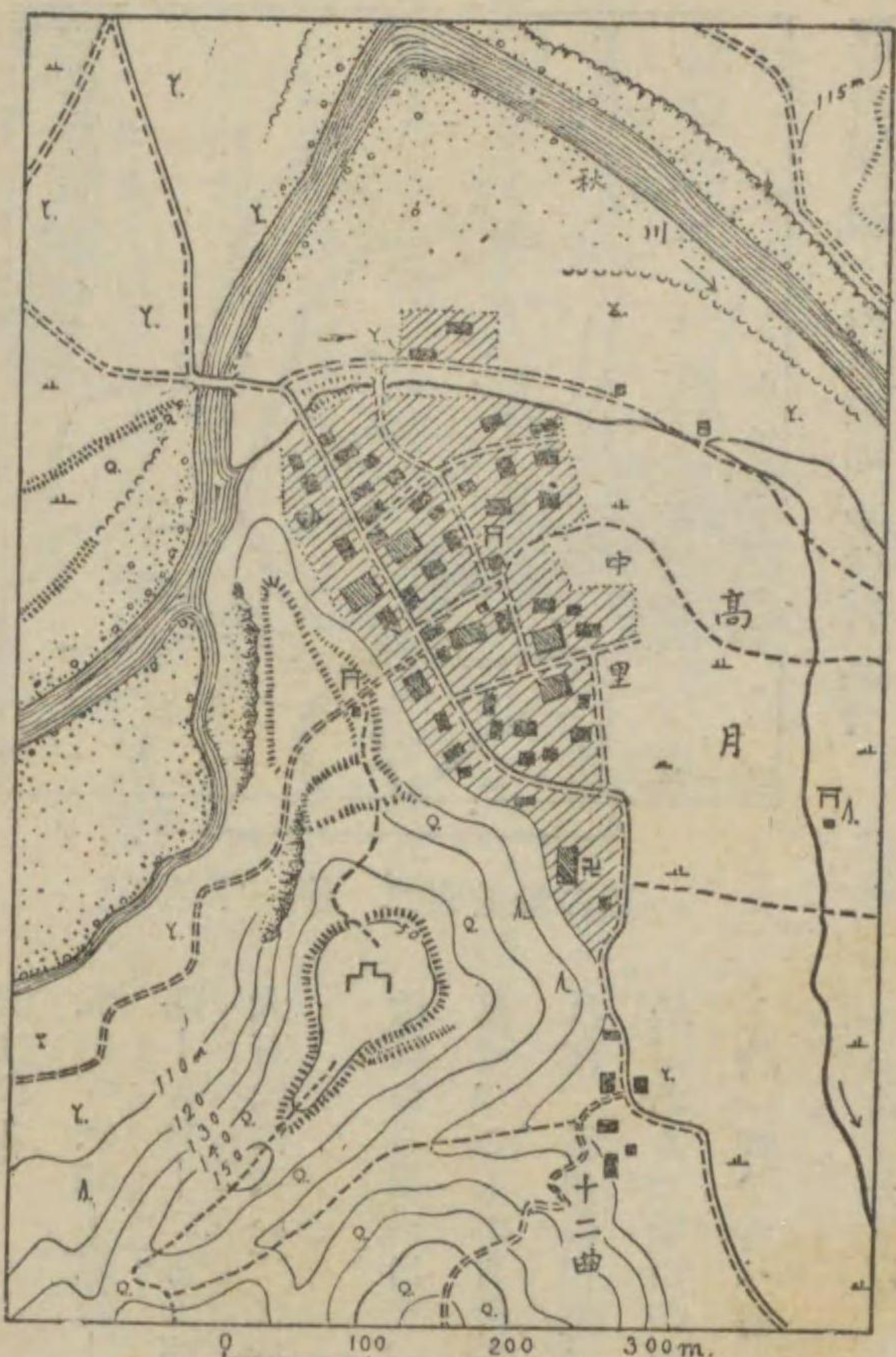
第十圖 二宮館址の圖

館址から南へ出て、東西に通ずる道を西すれば、神社の前に出て、こゝから大きい道を南へ進んで四つ角を過ぎ、坂を下れば、秋川の川原に出る。川を隔てた前の屋根の山が高月城址である。秋川の假橋を渡れば、高月の聚落に入る。行くこと約一町、右へ曲れば高月城址の登り口である。

高月城址 南多摩郡 加住村 高月

城は多摩川の支流秋川がU字形をした所へ突出した高さ五十餘尺の丘陵とその北の尾とを利用したものである。南の端は馬の背の様な狭い峯で丘陵の本脈へ連つて居るが、こゝを掘切つて、獨

立の丘にしてある。北へ出た山の尾の方は別として、他は何れも急な崖で、殊に西側は断崖が直ちに秋川の淵に臨んで居る。東北西の三方は眺望よく、中武の平原は一望の裡に入るかと思はれるばかりである。郭は山上に一郭(約二十間四方)、その北の山下に一郭、更に北に續いて次第に低く段をなして一列に二郭ある。此等北部の二郭の東側に幅一間乃至四五間の細長い腰曲輪がある。西側は秋川の爲に次第に侵蝕されたものらしく、山下の郭は何れも極めて細長い。最北端のは



第二十圖 高月城址の圖

幅三間程で長さは二十間程もある。山上の郭へは北の郭から登る道と東南端から登る道とがある。後者は曲折して登る様に作つたものである。南への峯續きの所は、堀切が三重にしてある。北方

の山下、即ち今の高月の中里の聚落がある邊は當時の小規模な城下の聚落があつた所であらう。此城は室町時代の中頃(長祿から永正の頃まで)、大石氏の本據地であつた。鎌倉大草紙長尾景春の亂の條にいふ二宮の城とはこれであらう。

本章の史蹟は大石氏關係のものが多く、左にこれを略説する。大石氏に關する史料で比較的纏まつたものは、新編武藏風土記稿所載多摩郡下柵木村伊藤傳左衛門所藏の大石系圖である。今主として之によつて要點を記すこととする。

大石氏

木曾

義仲

(七代) 信重

源左衛門尉、遠江守(正慶三、五) 應永廿一、二)

信濃佐久郡大石郷の住人、貞和□□九月鎌倉に出仕し、比企郡津下郷三百貫を賜はる。觀應二年十月上州進發の時先陣、三年笛吹の戦に功あり。

延文元年五月十一日入間・多摩兩郡の内十三郷を賜はる。

同年八月中二宮に移住。

至徳元年甲□□月安下に移る(恩方村松嶽淨福寺(城福寺)北方の山上に城址あり)。

二宮・瀧山方面

憲重

源左衛門尉、石見守、母藤田氏（貞治四、七—正長二、二〔永享元〕）

永徳元年目代に補せられ、應永廿三年上杉禪秀の亂の時功あり、大住郡八郷を賜はる。

憲饒

源左衛門尉、母上杉重方女（明徳三、正—永享十二、十二）

父の死後目代をつぐ、持氏の亡後山内家に屬す。

房重

源左衛門尉、母長尾因幡守實景女（應永廿九—享徳四、正）分陪河原の戰〔鎌倉九代後記〕（成氏と上杉房顯との戰、府中の條參照）に戰死。

永享十一年四月家をつぎ、十二年結城合戰の時上杉兵庫頭に屬し、上野守護代として足利の野田城を降す。

顯重

源左衛門尉、信濃守、母上杉持朝女（康正元、正、繼—永正十一、四）

長祿二年三月十八日高槻に移住。

定重

源三、源左衛門尉（文正二、六〔應仁元〕—大永七、十）

永正十一年家をつぐ、同十八年二月瀧山に移住。

定久

源左衛門（延徳三、三—天文十八、十）

大永七年十二月嗣ぎ、天文七年十月北條氏に屬す。十一月三日北條氏の次男油井源三を養子として之家を譲り、戸倉に蟄居、十二月廿日出家。

定仲

播磨守（天文三、十一—天正十八、正）—直久 天正十八年獅子濱城に戰ふ。

天正六年二月關宿城を賜はつて居住した。關宿城は氏照の屬城である。

女

氏照室

女

太田美濃守資正（岩槻城主）室

高月城は、大石系圖によれば信濃守顯重が長祿二年（1458）二月十八日に移住した城である。その前年長祿元年は足利成氏が古河城に據り、またこれに對抗した上杉氏側の江戸・岩槻・川越等の諸城の修營成り、澁川義鏡が關東探題として蕨城を營み、更に足利政知が伊豆堀越に來て關東の主となつた年で、鎌倉府の分散後、中心を失つた關東は地方割據の形勢となり、諸豪皆其城館を修營した頃である。従つて此地方を根據とする大石氏も其居城を修築し防備を嚴にしたことと思はれる。又同系圖に永正十八年二月定重瀧山へ移住したとあるから、此間六十三年間が高月中心の時代と見てよからう。従つて鎌倉大草紙に文明九年十年の長尾景春の亂の條に二宮の城といふのも、梅花無盡藏にいふ大石定重の壘壁も、回國雜記にいふ大石信濃守の館もこのことであらう。然らば何故に鎌倉大草紙は高月の城と云はず、二宮の城と云つたか。恐らくこれは大石氏の祖信重が最初信濃から關東へ來て武藏に土著したのが二宮であり、従つて武藏の大石といへば二宮の大石で知られて居たこと、また二宮なる地名が高月などよりは世人に知られて居つた爲てはあるまいか。尤も當時も二宮に最初來た時からの比較的簡単な所謂屋敷城的の館もあつたかもしれぬ。此種の例は他にもよくあるこ

とてある。太田道灌状には「大石駿河守在城地二宮へ著陣」とある。

二宮城が史上に顯はれる文明九年十年の長尾景春の亂の時のことは、鎌倉大草紙に「(太田道灌等の上杉勢) 同廿五日(文明十年正月) 豊島勘解由左衛門が平塚の要害(平塚の條參照)へ押寄せければ其曉没落して敵猶丸子・小机(小机の條參照)に籠る。上杉定正は河越に籠り、長尾景春は吉里宮内左衛門以下相伴ひ、大石駿河守(顯重)が二宮の城へ著陣して、小机の城の後詰せんとす。同三月十日河越の城より二宮へ押寄せれば打負、景春は成氏の御陣成田へ參て千葉新介孝胤相催し、羽生峯に陣取、同十九日小机の陣より太田圖書助資忠引かへし、同二十日羽生に向て定正も出勢なり。孝胤・景春一戦にも及ばず引退、大石駿河守楯籠二宮の城も降參す云々」とある。

梅花無盡藏卷六に

「武藏刺史之幕府、有爪牙之軍臣、是曰大石定重。廼木曾源義仲十葉之雲孫也。武之二十餘郡悉屬指呼。忠義貫日終始一節、規勝地於武野、頗設壘壁之備、邇來築亭子。」

といひ、風景の勝れたのを賞して亭を萬秀と號した由見え、回國雜記には「大石信濃守といへる武士の館にゆかり侍りてまかりてあそび侍るに、庭前に高閣あり、矢倉などを相かれてはべりけるにや、遠景すぐれて數千里の江山眼の前につきぬとおもほゆ。」などあるのもこゝであらう。

高月から瀧山城址へは、山の根に沿うて東南へ一筋道である。行くこと十二三町、瀧の聚落に入り、八王子方面に向ふ聯路によつて丘に入る。主な道は一筋である。

瀧山城址

加佳村 中丹木

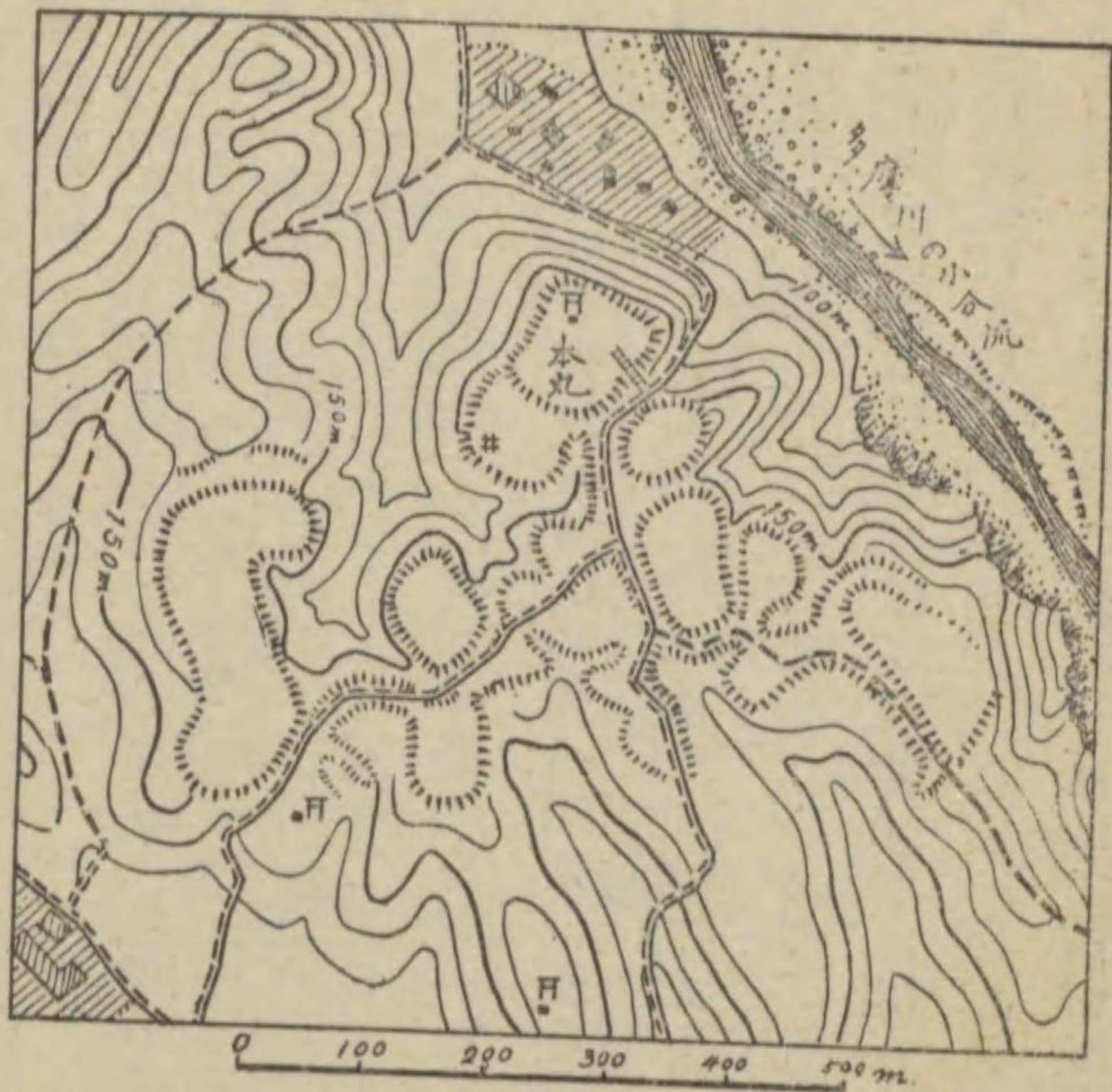
城は多摩川の南岸に連る丘、所謂「多摩の横山」のうち、地形の複雑な一地點を利用したものである。地域も廣く、且複雑な地形に従つて人工を加へたものである爲、純人工のものとは違つて嚴密に範圍を限定することが困難である。東西凡五町南北凡四町、東南を表とし、北方多摩川を背にあて、南方の谷に城下の聚落を置いたものと見られる。

高月の方から來れば城の背面へ出る。現在の聯路たる登り口は搦手の道であらう。この折曲つた道を少し登ると右側に急な金刀比羅神社の石段がある(これは後世社のために城の崖へつけたもの、其故急峻である)。この上が本丸址である。此處は此城の最高所で中心であつた。南方は僅かに隣接する郭を見得るのみであるが、北方は多摩川を俯瞰し、中部武藏の平野を一望に收むると高月城にも勝り、狭山の丘など一眼に入る。此郭の北と西とは非常に高い急な崖で、幾分は人工を加へたものと見られる。南部に霞神社があり、その西南が一段低くなつて一郭をなして居て、西南隅に井戸があり、東北隅に五間に八間程の大きな櫓形がある。甲州流に所謂五八の櫓形に符

合して居る。こゝから東の郭へは深い空堀に橋が架けてあつたと思はれる。この本丸の東と南との丘上に連つて大小十餘の郭がある。何れも空堀を以て劃されて居る。

此城は永正から天正の初まで、大石氏及びこれを繼承した北條氏照の居城であつた。

大石系圖によれば、永正十八年(1531)即ち大永元年定重が高槻からこれに移つたといふ。其子定久の時、天文年中(1552—)北條氏に屬し、氏康の二男を養子として家を譲り、自身は戸倉に引退して出家した。これから氏康の子油井源三即ち後の北條氏照の居城となり、天正の初八王子に城を移すまで、四部武藏の中心であつた。永祿十二年(1569)の秋、武



第三十圖 瀧山城址の圖

田信玄が關東に侵入して北條氏を討つた時、此城をも攻めた。小山田信有の率ゆる一支隊は小佛峠を越えて戸取の砦(今の廿里)を破つて西から迫り、信玄の本軍も上野から南下して此城を攻圍した。武田勢は三ノ曲輪を攻破り、勝頼自ら槍を振つて師岡山城などと奮戦したと傳へる。城兵よく防戦して容易に陥すことが出来なかつたので、圍を解いて小田原に向つた。

本丸の下段の郭の南端から東の道へ下り、東南に行くこと二町程で、道は左右に分れる。左(東)の道は本丹木・八日市・横山の方へ行く道、右のは中丹木・留所の方へ出る道である。従つて城の全規模を見ようとするには、西方を一巡する必要がある。道順としては先づ西の道を山の下(第十三圖の左下に社の記號のある邊)まで行き、再び城の舊状を考へつゝ戻つて前記の左の道を行くとよい。

東南に下つて行くところある谷合は、もと水を溜めた堰もあつた様で、比較的身分の低い侍や城に附屬する工匠などの住宅があつたらしく、鍛冶谷など云ふ地名も残つて居る。南方の木茂つた高い丘は城の鎮守藏王繼現の社のある所である(第十三圖の最下方の社の記號がそれである)。此社ははじめ高月にあつたが、大石氏が城をこゝに移すとともに移されたものといふ。八王子に城が移つてからは、更に彼地にも此社の社が城内に建てられた。

城の東方五町程の所に、横山・八日市・八幡宿などといふ所がある。これは城下にあつた聚落の名残で、八王子へ城を移す時、ともに移つて彼の地にも同様の地名を留め、八王子城が廢されて後、現八王子市の地に移

つて、其中心なる八日市宿・八幡宿・横山宿（今は皆町）となつた。此等は近世都市發達史上の面白い標本である。八日市に今もある牛頭天王の社（江戸時代に除地百二十坪、村民持）は市の神であつたかもしれぬ。當時附近には少林寺（氏照開基）の外に今八王子市にある大善寺や極樂寺、大幡の寶生寺などもあつた。

こゝから南して八王子市に出づるもよく、又北して多摩川を渡り、拜島へ出て青梅鐵道拜島驛から乗車するも可。ともに一里餘。「費用約一圓五十錢」（鳥羽）

一一 八王子附近

多摩陵 十十里ヶ原古戰場 宗關寺 八王子城址 相即寺 信松院 大善寺 極樂寺
中央線淺川驛で下車し、甲州街道に出て東へ七八町行けば、左側の丘陵が「武藏陵墓地」で、大正天皇の多摩の御陵はこの境域にある。

多摩陵 南多摩郡 横山村 下長房

多摩陵は大正天皇を葬り奉つた御陵である。大正十五年十二月二十五日崩御あらせられ、昭和二年二月七日・八日大葬儀を行はれ、此地に葬り奉つたのである。

御陵から又淺川驛前へ戻り、元八王子村に至る道を御陵墓地の西縁に沿うて丘へ登つて行く。この丘へ登り切つた邊一帯が十十里ヶ原の古戰場である。

十十里ヶ原古戰場 横山村 下長房 廿里

可なり凹凸のある丘陵で、今も小佛峠の方から元八王子の谷へ入る最初の大きい道がこゝを通つて居る。元八王子の八幡社がその道の突當りにあるのを見ても、古くから重要な道であつたことが知られる。永祿十二年武田信玄が後北條氏を攻めた時、小佛峠を越えて來た一支隊が瀧山城に向つた際、瀧山の兵がこゝに砦を設けて防戦した。

前述の道を行くと、緩い坂を下つて元八王子の谷合へ出る。前面の森が八幡の森である。

八幡神社（郷社、祭神應神天皇）は梶原景時が此邊を領して居た頃、鶴岡八幡を勸請したものと傳へる。社殿にも同氏の紋をつけ、神職も梶原といふ。境内にもと末社で牛頭天王があつた。參道の東側にある老杉は梶原杉といふ。此木の邊に繩紋土器の破片が散布して居る。

此社の鳥居の前を西へ行くと五町程で宗關寺につく。

宗關寺

朝游山 曹洞宗 元八王子村 元八王子 中宿

開山は隨翁舞悅、文祿元年北條陸奥守氏照の爲に建立したものの、寺號宗關は氏照の法名、山號朝游はその庵室號によると云ふ。この地に古く神護寺といふ八王子權現に關係ある寺があつたが中頃衰へたのを、氏照が再興して牛頭山寺と號した。その寺も天正十八年の役に廢したが、宗關寺は之を受繼いで建てられたものと云ふ。寛永年中に隨翁の書いた此等の記録には史實に稍、正確でない點がある様である。氏照(青霄院殿透岳宗關大居士)・中山勘解由(獅鬪院本室宗無居士)・狩野一庵(一庵宗入居士)の位牌がある。

宗關寺から四町餘西の山間に氏照・中山勘解由等の墓といふのがある。氏照は天正十八年氏政とともに小田原で自盡したのであるから、こゝには遺骸は納めてはない。

宗關寺から西南に聳えて見える山が城山で、城はこの山上と山下の谷とに亘つて設けられて居た。城址を一巡するには、先づ宗關寺から西へ少し行つた所で渡る小川の流れ出る城山南下の谷を六町程入つてその奥をきはめ、引かへして八王子神社の詣道を登るとよい。

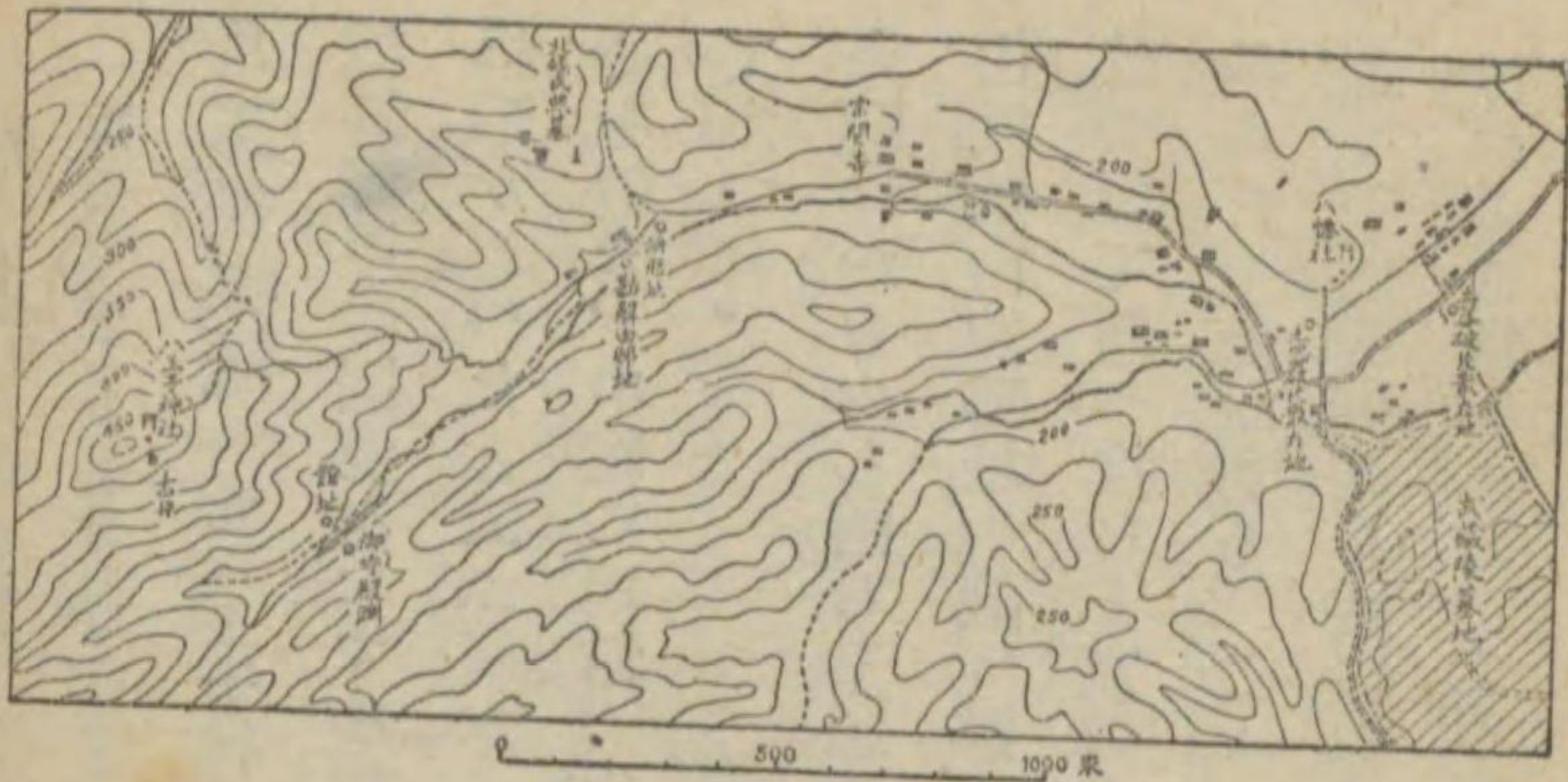
山下の谷には貯水池跡・千疊敷又は御主殿といはるゝ館址・大鼓郭などあり、景信山及び頂に物見址ある城の西方の峯など仰ぎ見ることが出来る。山上では主要各郭・山上の井戸・穀倉跡・八王子神社等が見られる。

八王子城址

元八王子村 元八王子

城は武甲の國境をなす小佛嶺の一支脈と、その谷合とを利用したもので、比較的規模が大きく、枳形があつたと云ふ所から山頂まで直線距離で十町餘、高低の差七百尺程もある。山巔に城の中心を置き、中腹に居館、山麓に諸士の邸宅・倉庫等を設け、附近の高地には更に物見等を配置してあつた。

宗關寺から少し西して過る石橋の左に數十年前まで枳形が残つてゐたといふ。これから中には中山勘解由の邸址や藏の跡と傳へる所がある。先づ山上へは登らず、山下の谷を西南に眞直に小川について西へ進むと左の方に溜池の跡があり、更に進んで谷が狭くなつた邊に、一部分に石垣を積んだ土壘がある。こゝが山下の郭の一つの入口で、城のあつた當時、道は川の東側を通つて、こゝで西側へ渡る様に橋があつたのである。こゝの南の山が大鼓郭、北が千疊敷或は御主殿と云はれる館址である。(第十四圖・第十五圖参照)館址は不規則な形であるが八十間に二十間位で、北端に虎口がある。西南の方は、二段の小さな削平地が山上の方へ出來て居る。此の邊は縦と篠



第四十圖 八王子城址附近近圖

竹とが密生して居て踏査し難い。江戸時代には御林（即ち幕府の林）としてこの要害を閉鎖して人を入れず、今は御料林になつて居る。此等の諸郭から山上の郭へ崖づたひに通路があつたらしい。この館址の東側の道（即ち前述の小川沿ひの道）を更に奥へ行くと、キドグルマノヤトとかバラモンとかいふ所がある。この谷の奥は西に曲つて行つて、その突當りの山上が大見晴しと稱する物見の跡である。こゝから引かへして山上の八王子神社のある所へ登る。

山上の主要な郭は三郭あつて、西南のが最も高く、本丸で、頂十間に七間程、周圍に數段の削平地がある。その東のが松本郭といひ、今城址碑と八王子神社の碑とがあつて、眺望の最もすぐれた所、山下の郭から八王子の方面まで見渡され、高尾山以上の眺と稱せられる。廣さ七間に十三間と古圖にある。この郭の西の一段低い所に井戸があり、北の一段低い所に八王子神社がある。こゝ

池の中島に嚴島神社（無格社）がある。昔の中島の辨天て鳥居が建つて居るのでもわかる通り、今神社になつて居る（井ノ頭辨財天の條参照）。安藝の嚴島神社の祭神は市杵島姫命で、古く本地は大日如來或は觀世音菩薩と云はれて居たが、戰國時代の頃から辯才天と稱せらるゝに至り、江戸時代には日本五辨天の一に數へられて居た。それでこゝのも神佛混淆分離後神社に屬して嚴島神社といふ。中島北方對岸の邊に照日塚といふのがある。三寶寺の開山照日上人の墓と傳へる。

池の西南端から南へ空堀と壘との跡を見つゝ丘陵の南端へ出る。この田をへだてた前の丘が愛宕山である。

愛宕山砦址 石神井村 上石神井

一寸低地へ突出した丘である。太田道灌が石神井城攻撃の時、此處に砦を設けた跡と傳へる。江戸名所圖會に「土人は字して城山といふ。東西百五十歩、南北百餘歩、南の方數百歩を隔て、直塘あり、道灌塘と號す。」と云つて居る。愛宕權現の社は數年前氷川神社に合併されて今はない。又砦のあとらしい所も見えないが、石神井城を望むには非常に良い所であるから、道灌の城攻の時に陣所としたと云ふことは有りうべきことである。

愛宕山へ行くにも、行かないでも、とにかく西堀端の道を南へ坂を下つて東し、氷川神社の一ノ鳥居前まで

ゆき、それから田の間を南へ行つて石神井川の橋を渡る。こゝから南すること七八町で、千川上水のほとりに出る。

千川上水

千川上水とは玉川上水の一分流で、保谷村上保谷新田から分れ、武藏野村・石神井村等を経て、巢鴨までの五里五十五町餘の堀割である。

これは元祿九年(1696)に引いたもので、小石川御殿・湯島聖堂・東叡山・浅草御殿等への上水であつた。仙川村大兵衛・徳兵衛と云ふものが、これを仰付かつてやつたのである。後に仙川を千川と改稱して、二人に賞として、千川の姓を賜はつた。享保七年(1722)十月に一度この上水を中止し、單に田の用水に用ひたが、安永九年(1780)に再興し、本郷湯島・下谷・浅草方面の上水であつた。天明六年(1786)再び中止し、以後は單に田の用水にのみ用ひられるに至つたのである(玉川上水の條參照)。

こゝから南へ行けば青梅街道へ出る。街道の南が井荻村字善福寺で、善福寺ノ池といふのがこの南の凹地の中央にある。廣さ南北凡三十間東西凡八十間で、井ノ頭と同じ様に西北方向から東南へ細長い。下流は凹地に從つて流れ出て、堀之内の近くで井ノ頭池から出る神田上水の流に合する。こゝにも中島に鳥居を建てた辨天の祠がある。こゝに昔善福寺・萬福寺と云ふ二寺があつたが、地震のためつぶれて廢絶してしまひ、たゞ名のみ残つたといふ。

この池から、井ノ頭までは十四五町であるから、時間があつたらそれへ廻つて、吉祥寺驛から電車で歸京するもよく、直に西荻窪驛へ出るのもよい。「費用約五十錢」(鳥羽)

一三 東村山・山口方面

徳藏寺 山口觀音 勝樂寺 北野神社 小手指原古戰場

西武鐵道川越線の東村山驛で下りて右へ行き、踏切は渡らずに小學校前を過ぎ、突當つて左折すると右側に徳藏寺がある。

徳藏寺 福壽山 曹洞宗 北多摩郡 東村山村 野口

國寶に指定された元弘三年(1333)の板碑で知られてゐる。板碑は本堂の前にある。上部が破損してはゐるが、梵字は光明眞言で、其下には次の如くに記されてゐる。

東村山・山口方面

飽間齋藤三郎藤原盛貞生年廿六
於武州府中五月十五日令打死 勸進玖阿彌陀佛

元弘三零 癸酉 五月十五日敬白

同孫七家行廿三同死飽間孫三郎

定長卅五於相州村岡十八日討死

執筆遍阿彌陀佛

玖阿彌陀佛の「阿彌」の部分は石面が破損してゐる。飽間孫三郎の次の一字は諸書の讀方が一致してゐないが、今暫く新編武藏風土記稿等に従つて「定」として置いた。或は宗がよいかも知れぬ。

即ち義貞の鎌倉攻に際して戦死した新田方の飽間齋藤三士の供養塔で、太平記にも載つてゐない新田軍の行動の日時を證することの出来る、板碑としては珍しく史的價値を有するものである。

此板碑は最初寺の西北の將軍塚附近にあつたのであるが、後境内に運ばれ、更に現在の位置に移された。此眞偽についても議論があつたが、板碑としての形式にもまづ適ひ、姓氏の重記も他に例があり、他宗の僧が光明眞言を書くこともあるといふ理由などで、沼田頼輔氏の説が認められたのである。

鎌倉時代から室町時代にかけて、此地方の道は、入間から小手指原を過ぎ、狭山の東麓を経て府中に向つてゐた。それで上野や北部武藏から鎌倉を襲ふには必ず此道を行かればならなかつた。而して鎌倉の防禦線は武藏野の河筋であつた。即ち第一は入間川、第二は多摩川である。入間・小手指原・人見原・府中の戦が何回もあつた所以はこれに外ならぬ。

元弘三年(1333)五月義貞が上野に興起して鎌倉街道を南下し、途上北條勢を破つた久米川古戦場は第一、第二の中間である久米川(徳藏寺の北を流れる川)附近である。

寺門を出て西へ向ひ、二度橋を渡つて、道が右折する處を眞直に小松林の間を登りつめると、路右の林中に義貞に附會した傳説の將軍塚がある。古くから眺望のよい所といはれてゐる八國山は此つゞきの山である。北へ下つて田間の路を西行するとやがて北方の丘麓に王禪山佛眼寺といふ眞言宗の寺院の屋根が見える。堂側と墓地とに板碑があり、其一に平信能・平能行の名のあるものは稍々注意すべきものであらう。上部が缺けて年號は實は定かでない。其側の畫像のが此上部であつたら此上もないが再考を要する。寺背に水天宮と八幡宮とがあるが、後者は義貞が武運を祈つた社といはれ、鳩峯八幡とよばれてゐる。

水天宮の背後の小徑を西へ／＼と行くと切通に出る。一度下つて又西へと上つて進んでゆくと、西北に異様な築山風のものが見える、此が荒幡の新富士、頂上から武藏野の眺望は遮る樹木がないだけによい。久米川

の古戦場や古の鎌倉街道などを想像しつゝ俯瞰するのも面白い。

新富士から一寸戻つて丘の嶺をどこまでも略し西行すると新しい自動車道に出る。村山の下貯水池の北に當る。左手に貯水池の風光を賞つてつゝ此新道を暫く行く。山口の観音へは道しるべがあるから判り易い。丁度観音の略し南が上下の貯水池の界になつてゐる。

山口観音 吾庵山金乘院眞光寺 眞言宗 埼玉縣 入間郡 山口村 上山口

本尊は行基の作と傳へられた千手観音。弘法大師草創の靈場と稱せられて參詣の客が多い。詳しい縁起は江戸名所圖會にある。今も元弘三年五月十五日附新田義貞の願文といふものを藏してゐる。

山口観音の裏山を西北方勝樂寺へ抜けると街道を隔て、彼の山麓に勝樂寺と七社神社とがある。

勝樂寺 王辰爾山佛藏院 眞言宗 山口村 勝樂寺

本尊は十一面観音。文化元年(1066)の火災に御朱印・過去帳を除いて全部焼失して、往古のことは詳でない。縁起によれば王辰爾が開祖、天喜・治暦の頃は武州隨一の大伽藍であつたさうだが、今は見る影もなく荒れはてゐる。

王辰爾は王仁の五代の孫とか、日本書記卷二十に、敏達天皇元年(592)高麗の使の上つた表疏をひとり解いたとある人。地藏堂の裏手の山腹に今も其墓といふのが残つてゐる。山號も之に因んだもの、王の字は更に後に附加したものである。

郷社七社神社は此東隣、勝樂寺が別當をしてゐた七社權現とは此社。社の東方に二重壕を周らした根古屋城址がある。山住彦三郎の城址とかいつて武藏野話には略圖も入つてゐるが、城の範圍についての記載はどうかと思はれる。

街道を所澤方面へと行くとやがて山口観音への參詣路と會する。其少し先で川邊の聚落を横切つて北の丘へ登る。此附近では珍しいことでもないが、上りつめた路左に古墳があり、其先の畑地に土器の破片などが散亂してゐる。北へ下りて大路を横切つて少し行くと右側に鳥居がある、北野神社の西參道である。社の森は丘上から見える。

北野神社 縣社 小手指村 北野

祭神 櫛玉饒速日命 八千矛命

相殿 菅原道眞

東村山・山口方面

合祀 天穗日命 加屋野姫命 出雲祝神 小手指明神 應神天皇 日本武尊
式内物部天神社は是であらうといふ。社傳に依れば、日本武尊御東征の際、物部天神・國渭地祇
二社と祀られ、欽明天皇の時小手指明神・日本武尊を合祀し、更に一條天皇の長徳元年(935)菅
公五世の孫武藏國守菅原修成が勅許を得て北野天満宮を勸請し、代々武將の信仰篤く、江戸時代
の御朱印は五十石であつた。

此神社についても新編武藏風土記稿・武藏野話・江戸名所圖會などに詳しく載つてゐるが、其古文書類は今も
猶古くからの神職栗原氏によつて保管されてゐる。併し、未社の數は大いに減つて、諸神宮・文子天神・石宮・
八雲・稻荷等の諸社が残つてゐる。

神社の北方が小手指原古戰場、白旗塚・誓詞ヶ橋などといふ傳説地がある。

小手指原古戰場 小手指村

第一回は元弘三年(1333)五月、義貞が北條方の櫻田貞國・長崎高重等の勢に衝突した戦で、ついで
久米川の戦となつた。第二回は建武二年(1335)七月、北條の餘類時行が足利の軍を女影・小手指
原・府中で破つた。第三回は正平七年(1335)閏二月、宗良親王・新田義宗の一軍が尊氏に敗れた戦
である。

北野神社の前の街道を東行すると武藏野鐵道西所澤驛に出る。驛前の路を東へ行つて、突當つて右折すると
所澤驛、この方が交通上便利であるばかりでなく、池袋行の電車の數も多い。なほ所澤驛から北野方面へ
も山口方面へも乗合自動車の便がある。又東村山驛から村山貯水池方面へも同様である。

〔費用約一圓二十錢〕(長澤)

参考

- 藤田 明氏 久米川古戰場と元弘の板碑(歴史地理八ノ七)
- 沼田頼輔氏 武藏東村山村元弘板碑考(歴史地理二二ノ二)
- 沼田頼輔氏 東村山村元弘三板碑考(考古學雜誌一〇ノ一二)

一四 赤塚と岡

大堂 松月院 赤塚城址 吹上觀音 岡不動

東武鐵道東上線成増驛で下車し、左折して踏切を越え、眞直に赤塚村役場へ通ずる道を行く。役場は松月院

の門前にあり、且道路を隔て、大堂に對して居る。

松月院 萬吉山 曹洞宗 北豊島郡 赤塚村 下赤塚

總門を入ると、突當りの正面が本堂で、其向つて左手は墓地になつて居り、千葉自秀の塔と傳へる三基の石塔がある。

開基は千葉自秀（自胤の誤であらうといはれてゐる）と傳へられ、曇英和尚を開山とし、釋迦を本尊、脇士は文珠と普賢とである。此寺は舊幕時代には四十石の朱印を得て居たといふ。境内には相當に年代を溯る板碑様の古碑等も存する。

村役場の一隅に赤塚がある。村名の起源が此塚にあるのは云ふまでもない。塚の形は大分尖はれて居るが、もとは上に白山権現の小祠があつて、赤塚と記した額をかけた鳥居もあつたといふ。塚の樹木に觸れると祟があるといふ傳説は勿論上代の墳墓であることを暗示するもので、江戸名所圖會の推定は正しいであらう。白山権現の勸請は寧ろ此塚の外形に囚はれて遂に後に現れたものと思ふ。

大 堂 赤塚村 下赤塚

今はさゝやかな堂宇と鐘樓とが木立に圍まれて淋しく存するのみで、殆ど荒廢に委せてある。大同年間の創建と傳へられる七堂莊嚴の伽藍であつたが、後世兵火に燒かれて阿彌陀堂と古鐘とに

纔に其面影を留めて居る。鐘には曆應三年（1133）庚辰四月初八日の銘がある。

「武藏州豊嶋郡赤塚泉福寺眞福寺兩寺鐘銘……武州豊嶋彼兩寺者前朝全盛之時所建……」

泉福寺は大別當であつて、上下十二坊の脇坊があつたが、今は泉福寺が西南に荒果て、遺つてゐる。

松月院裏の、谷を隔て、西の岡が赤塚城址である。

赤塚城址 赤塚村 下赤塚

城址は今畑となつて居るが極めて小規模のもので僅に籠るだけの處であつたものらしい。丘陵の一端を劃して裾の一部には水を湛へて堀をめぐらし、背面は直線に近い人工の空堀を以て連絡を斷つて防禦に具へて居る。

城址の附近には出口・番匠免等の城に關係した地名が存して居る。此城は千葉氏の分城で、千葉氏が足利成氏に市川城を滅されて後に此地に移つたのであらう〔鎌倉大草紙〕。康正二年（1455）千葉自胤の築造であるといはれ、後代々千葉氏が據つて居た（千葉の條參照）。

丘陵の北端へ下つて丘の裾を西へ水田の間を行くと、向側の丘陵に吹上觀音の堂宇が見える。

此邊の丘上には貝塚などが多くあるといふ。水田となつてゐる丘下の沖積層の低地は古は荒川の入江であつたに違ひない。今は徳丸ヶ原より荒川の彼方迄茫茫々盡くる處をしらぬ武藏野が展開してゐる。徳川將軍が小鷹野をしたのも此邊の低地であらう。

吹上觀音

福田山東明寺 臨濟宗 埼玉縣 北足立郡 白子村 吹上

丘陵の突端に位して、石階を上ると簡素な仁王門と茅葺の本堂とがある。こゝは遙に荒川の流を控へて眺望もよく、境内には樹木が多く極めて靜寂である。又堂後には古墳がある。

此寺には元龜二年六月一日の銘ある鰐口を藏してゐる。開山は普明國師、行基作と傳へる丈八寸の聖觀世音を本尊とし、元祿年間沙門淨西が丈二尺三寸の尊像を刻して先の本尊を胎内に藏めたと云ふ。(以上石山)

さて成増から川越街道に沿つてゆき、白子を過ぎて淺久保邊から西北へ入り鐵路を越えろと臺である。此の金子氏宅には板碑が甚だ多い。

臺の西北十數町にある字岡に東圓寺、其境内で裏手に岡不動がある。

岡不動

松光山藥王院東圓寺 眞言宗 膝折村 岡

石神井の三寶寺の勢力は此邊に甚だ盛大で、附近の寺の大部分が其末寺となつてゐて、東圓寺も

其一である。庫裡の右方の石疊の道を行くと不動堂に出る。

東圓寺の開山は律師永慶、中興は永雅、元祿頃までは藥王山と號して居たといふ。土岐出羽守の墓所で、本尊は藥師如來。

なほ此寺にある板碑は、正和二年・元徳四年のもの、外皆缺けて居るがすべて十一基に達する。此附近の寺院には總じて板碑が多い。

廣澤山本仙寺(日蓮宗)の東北の丘は城址であるといふ。新編武藏風土記稿卷百三十三には太田新六郎康資の館址であらうかとあるが確ではないらしい。

此處からは東上線膝折驛へ戻る方が稍近く、且道がよい。「費用六十錢内外」(以上長澤)

一五 野火止附近

柳瀬の城址 平林寺

東武鐵道東上線志木驛で下車。西南方大和田の町に出て、川越街道を少し下つて、柳瀬川を渡つた處で、西南坂の下を経て城に行く。

野火止附近

柳瀬の城址 埼玉縣 入間郡 柳瀬村 城

城は柳瀬川流域の窪地帯に臨む高さ二十間位の臺地の一端に設けられ、内郭は南方にあり、三方崖で大體正方形に近く、外郭はその北方を圍つてゐる。内郭は四方に土居あり、空堀を以て外郭と界し、外郭も亦壘壕の備がある。今内郭は八幡神社の境内に、外郭は畑と林になつて居る。

此城の沿革は明瞭でないが大石信濃守或は、北條氏照の一屬であつたといふ。

城を下つて再び柳瀬川を渡つて東南方へ行けば、平林寺は此附近で最大の寺院で、大きな森の中にあるから容易に判る。

平林寺 金鳳山 臨濟宗 北足立郡 大和田町 野火止

大門は總門前から十數町も離れた川越街道にあり、「金鳳山平林禪寺」とある昔ながらの石標が立つてゐる。江戸名所圖會の挿畫の通りに、總門・山門・佛殿・中門・本堂・客殿と立並び、其北に庫裡があるが、慶應三年の回祿の後、多少縮小されて、塔中・聚寮などは全くなき、經藏の位置も山門に近くなつてゐる。鐘樓は舊位置にある。山門の向つて左には戴溪堂や半僧坊があり、前者には明の獨立禪師の木像と遺物とを藏め、後者は明治四十年の建立である。總門・山門などの額は石川丈山の筆である。

此寺は天授元年(1320)の草創と傳へ、石室善玖が開山、當時は岩槻在の平林寺村にあつたが、天正年間兵燹に罹り、其後荒廢してゐたので、寛文三年(1763)川越城主松平甲斐守輝綱が此地に移したといふ。舊寺領五十石、松平家の菩提所であつた。新編武藏風土記稿に載つてゐる古文書も燬けて今はない。

本堂に向つて左の石疊の道の左方に増田長盛の墓があり、墓碑面には「増田右衛門尉長盛之墓、元和元乙卯年五月二十七日」とあるが、後に此墓石を建てたものらしい。なほ燈籠の盡いた處に松平伊豆守信綱以下の墓がある。

境内は老樹が鬱蒼として靜寂、且梅櫻紅葉の景物の多い上に、一條の清い用水が庭園の背から流込み、築山を落ち、庭を貫き、書院の下を潛り、庫裡を抜け、浴室を通つて門を出て、櫻並木に沿うて川越街道へと流れて行く。古人が「朝な夕な心身の穢惡の垢までも清めすゝぐらんと思はる。」(「遊歴雜記初編上」といつた昔と變はない。此は現在耕地の状態からでもわかるやうに、古來此邊が武藏野の中心で水に乏しい處であつたから、信綱が承應年間に家臣安松金右衛門に命じて、はるく多摩郡小川村から多摩川の水を引いて來た野火止用水の分流である、此用水は今も附近の住民に多大の便宜を與へてゐる。

平林寺の背後は傾斜をなし、登つて行くと左に九十九塚、更に行くと松林の中に業平塚がある。

歸路は東武鐵道東上線志木驛に出るのが最も近い。また時間があれば、南行して片山村法臺寺に新編武藏風土記稿所載の板碑を尋ねたり、満行寺に野寺の址を訪ねたりして、武藏野鐵道保谷驛から歸るのもよからう。

〔費用約八十錢〕(長澤)

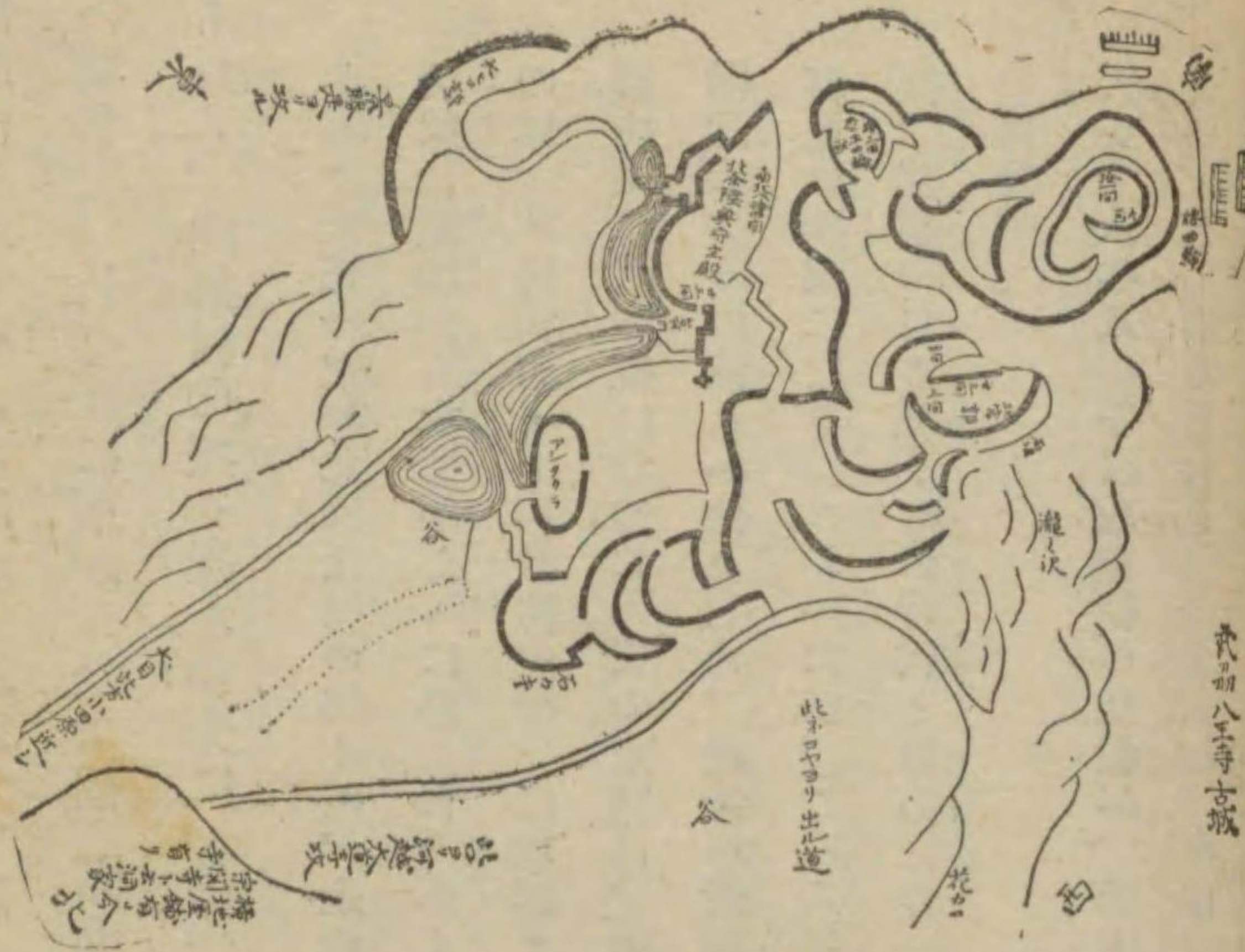
一六 川 越

喜多院 東照宮 川越城址 三芳野神社 氷川神社 養壽院 蓮馨寺

池袋から東武鐵道東上線に乗り、川越西町驛で下車、驛前を真直に通町通へ出て、工業學校の少し先で右折すると、突當りの森が中院の境内で、其左手の鬱蒼とした森の中に喜多院と東照宮とがある。中院の堂側を通りぬけ、突當つて左へ曲ると東照宮の前に出る。東照宮の石段の前から北方喜多院へはぬけられる。

喜多院 星野山無量壽寺 天台宗 川越市 小仙波町

境内は溝を周らして後庭稍、幽邃、當市最大の寺院で、本堂・庫裡・客殿・經藏・開山堂など備つて、客殿には徳川三代將軍家光誕生の間といふのがある、開山堂には天海僧正の像が安置されてゐる。



圖古部要主城子王八 圖五十第 (藏所也矩規澤長圖原)

は城の米藏の跡で、今も黒くなつた米や麥が出る。此附近八王子の地名はこの神社から起つたのである。この社の北に小高い所があり、こゝを北宮郭といふ。北にあつて藏王權現の宮があるからである。この神は高月城・瀧山城の附近にも大石氏が祀つた神で、城の移るとともに此處へも祀られたのである。一番高い郭の背後に一段低く猶一郭あつて、こゝへは城址碑裏下の井戸の脇から行かれる。この部分は林になつて居る。この西端れが堀切になつて居て、馬冷しと云はれる石で周圍を疊んだ溜池がある。この山の西北側に細長い削平地がある。これを馬場跡といふ。馬冷しの堀切から西は幅の狭い峯つゞきで、その四町程西の高い所に物見址がある。四

角形に石垣で築いた所が二段残つて居る。大き各五六十坪程、こゝは兩側は斷崖、西は非常に深い堀切で、わづかに東から急な細道を登り得る極めて要害の所である。こゝからは景信山の物見も見え、内郷村の城ヶ峯を中介に、高尾の山彙をめぐつて津久井城に連絡を取つたものであらう。

此城は天正の末年北條氏照の築く所、永祿の末に計畫され、天正六年頃に大體出來上つたものと思はれる。氏照は瀧山から本據をこゝに移した。かくして西武の中心たること十餘年、天正十八年六月廿三日豊臣秀吉の軍（前田利家・上杉景勝の勢）に攻落されて建物は焼け、後氏照自盡するに及んで廢城となつた。氏照の瀧山城に居る様になつた天文の末頃は、次第に地方的統一集中の傾向が盛になつた時期で、彼地に於て既に附近に多くの武人を住ましめ、社寺を新建移集し、鍛冶其他の工匠を集め、市場を備ふる等、漸次後の城下町風の状況になりつゝあつたが、この八王子に移るに及んで、彌々完成した。現八王子市は、城の廢された後、其遺物たる城下町が時代と地方との一般的状況に育まれて、生長發達したものである（八王子市・瀧山の條參照）。

天正十八年八王子城攻撃戦の状況を、参考のため簡單に記す。當時城主北條氏照は、相模小田原城にあり、留守として横地監物吉信は本丸を、中山勘解由家範は中ノ丸を、狩野一庵は三ノ丸を、金子家重は金子丸を、近藤山守（介）助實は山下曲輪を守つて居た。兵數凡三四千人。上方勢（豊臣秀吉の軍）は、六月二十三日の早朝濃霧に乗じて横山方面から町口を破つて攻入り、さきに豊臣氏に降つた松山・川越方面の諸兵は山下曲輪を攻め、上杉は東方大手から、前田は北方搦手から攻めた。城兵よく防戦したが、城の一部に火を放たれたので約半日にして遂に陥つた。

城山を降り、氏照の墓を訪ひ、宗關寺・八幡社をすぎて下一分方へ行く。

八幡社の森の東方一帯が舊城下の聚落のあつた所で、八日市・八幡宿などの工師の集住地や、大善寺・極樂寺などもこの附近にあつた。（八王子市内・瀧山の條參照）（以上鳥羽）

下一分方に行くと、相即寺と西蓮寺とがある。

相即寺 東原山淨土院 淨土宗 元八王子村 下一分方

此寺の過去帳は草創以來のもので、殊に八王子城の陣歿者を列記してあつたといふけれども、けてしまつた。位牌も當初のものは焼け、今あるのは其裏面の文字によれば、明治二十二年に此寺で三百回忌法會執行の爲に、熊澤氏の子孫が寄附したものである。表には紋章の下に、圓月淨感大居士、淨念宗信居士と二行に記され、各の下に二行宛に、「二代熊澤土佐天正十八年六月廿三日八王子城ニ於テ戰死」「土佐次男熊澤善助右同時戰死」とある。此二人の名は新編武藏風土記稿

にも檀林大善寺志にも見えてゐる。寺には此位牌一基と落城の際の戦死者千二百八十三人の菩提の爲に建てられたといふ地藏堂とがあるばかりである。

其寺の西南の金剛山西蓮寺(眞言宗)には中山家範が信仰したといふ薬師の堂と、其名を持った松杉の二樹とがある。此處からは八王子市が近い。時間の都合では八王子市内を見るとよい。但入念に調べて歩けば、八王子城址だけで歸らなければならぬやうになる。

西蓮寺から水無瀬橋に出て、浅川を渡り、町並を行くこと三四町で道は甲州街道へ合する。こゝを追分といひ、こゝから八王子驛へは乗合自動車の便がある。この追分から甲州街道を二町程東すると五日市からくる道と交叉する。こゝを右(南)へ曲つて四町程行くと、中央線鐵道線路の南方に信松院がある。臺町の小學校に程近い。

信松院

武田山 曹洞宗 八王子市臺町

八王子市内で一番觀るべきものゝ多い處、四圍も靜寂な地だけあり、最も俗氣のない寺である。

開基新館禪尼の墓は堂宇の右の小高い墓地内にある。武田氏の遺臣仁科資眞が納めた軍船模型(朝鮮の役に用ゐたもの)二隻及び之に關する文書を最とし、信玄・秀吉の文書も藏してゐる。山號は初佛頂山といひ、後金龍山と改め(新編武藏風土記稿)、更に開基に縁んで武田山と改めたのである。

寺の縁起によれば、開基は信玄の女、松姫であつて、織田信忠と婚約があつたが、三方ヶ原の戦に信長が家康を授けたので信玄は破談の使を出した。信玄が卒して兄仁科信盛に頼り、衆の勸告を固辭して、年十八で薙髮し、武田氏が滅んで信盛も戦死したので、妹姪を具し、三遷して横山村に至り、侍女と機を織つて暮した。家康は之を聞き、月俸を給したといふ。

小學校の前を東へ三町程行くと、金剛院と天神社との角へ出る。こゝを左へ曲つて、甲州街道の大通りを過り、北へ三町程行くと、浅川橋の手前に大善寺(左)と極樂寺(右)とがある。

大善寺

觀池山往生院 淨土宗 八王子市大横町

寺は八王子には相應しい機守神社といふ小祠と池とを前に控へて、道路から少し入り込んでゐる。開山は讚譽牛秀、北條氏照を開基とし、瀧山城下に建てられた。群臣も悉く檀家であつたので、城が移るとともに元八王子へ移り、落城の際兵火に罹り、北條氏亡び、城廢せられて後、更に町の移るとともに此處に移つた(檀林瀧山大善寺志)。淨土宗關東十八檀林の一である。此寺にも八

王子城の戦歿者中、檀家二百八十三名中の重なるものといふ位牌があり、それには顯現院門譽道善休劍居士、清向院本譽淨念息劍居士、馨雲院源譽道香燒劍居士といふ戒名が記されてある。

大善寺志 淨土宗全書所載)には二百八十名の戒名が羅列され、其中に此等の戒名も見えてゐる。之によれば顯現院は鈴木佐渡守、清向院は鈴木彦八、馨雲院は同庄三となつてゐる。

因に淨土宗關東十八檀林とは左の寺々で、攝門上人の檀林巡路記(文政四序、刊)といふ案内記がある。

- | | | | | | | | | | |
|-----|--------|-----|-----|---------|-----|-----|---------|--------|-----|
| 鎌倉 | 天照山蓮華院 | 光明寺 | 鴻巣 | 天照山良忠院 | 勝願寺 | 瓜連 | 草地山蓮華院 | 常福寺 | |
| 芝 | 三縁山廣度院 | 増上寺 | 飯沼 | 壽龜山天樹院 | 弘經寺 | 小金 | 佛法山一乘院 | 東漸寺 | |
| 生實 | 龍澤山玄忠院 | 大巖寺 | 川越 | 孤峯山寶池院 | 蓮馨寺 | 八王子 | 觀池山往生院 | 大善寺 | |
| 岩槻 | 佛眼山英隆院 | 淨國寺 | 江戸崎 | 正定山智光院 | 大念寺 | 館林 | 終南山見性院 | 善尊寺 | |
| 結城 | 壽龜山松樹院 | 弘經寺 | 本所 | 常在山二尊教院 | 靈山寺 | 下谷 | 神田山幡隨意院 | 新知恩寺 | |
| 小石川 | 無量山傳通院 | 壽經寺 | 新田 | 義重山 | 大光院 | 新田寺 | 深川 | 道本山東海院 | 靈巖寺 |

大善寺の東北に道を隔て、極樂寺がある。

極樂寺

寶樹山正京院 淨土宗 八王子市大横町

この寺も瀧山—慈根寺(元八王子)—八王子と移轉し、其間兵燹をも受けたので、格別見るものもないが、氏照の臣で、八王子落城後、前田利家から許可されて、月六齋の市をはじめた長出作左衛門の墓がある。これは門を入つて左側の一堂字の左に存してゐる。其墓石には「遍照院光譽清教淨春居士、元和三丁巳四月、長川作左衛門元重」とある。

新編武藏風土記稿には、此二寺が元八王子にあつた時は、八幡森の東にあつたとある。今里人の傳によると、大善寺は八幡に近く、極樂寺は裏宿方面にあつたといふ。

作左衛門は其伯父川島右近の推舉により伯父の主前田利家の御家人となり、川島と改姓し、許を得て、離散した商人を今の八王子の地に集め、市を起した人である。市の許可状は其後焼失し、川島某の手記といふのが、其寫しとして新編武藏風土記稿(卷三十二)や八王子根元記などに見える。之によれば、利家の許可を得たのは天正十八年七月五日となつてゐる。根元記によると、最初は横山が四日・十四日・二十四日、八日市が八日・十八日・二十八日であつたが、次第に亂れて諸所に立ち、更に一月の中、上十日横山、中十日八日市、下十日八幡宿などと改められたこともあつたやうである。商品は初めは紙・日用の雜貨が主なるものであつたが、其後此地方の生絲絹織物の發達につれて、それ等が主なるものとなつた。市は變遷しながらも今日まで傳り、數年前に四九の日と變つて間を等しくし、再び火金と變更されたが、絲の市はやはり四九の日の定

めを維持してゐるといふことである。

こゝから八王子驛まで十一町程である。驛へは甲州街道大通りへ出て東し、數町行つて右(南)へ曲る。「費用約一圓五十錢」(以上長澤)

一二 練馬と石神井

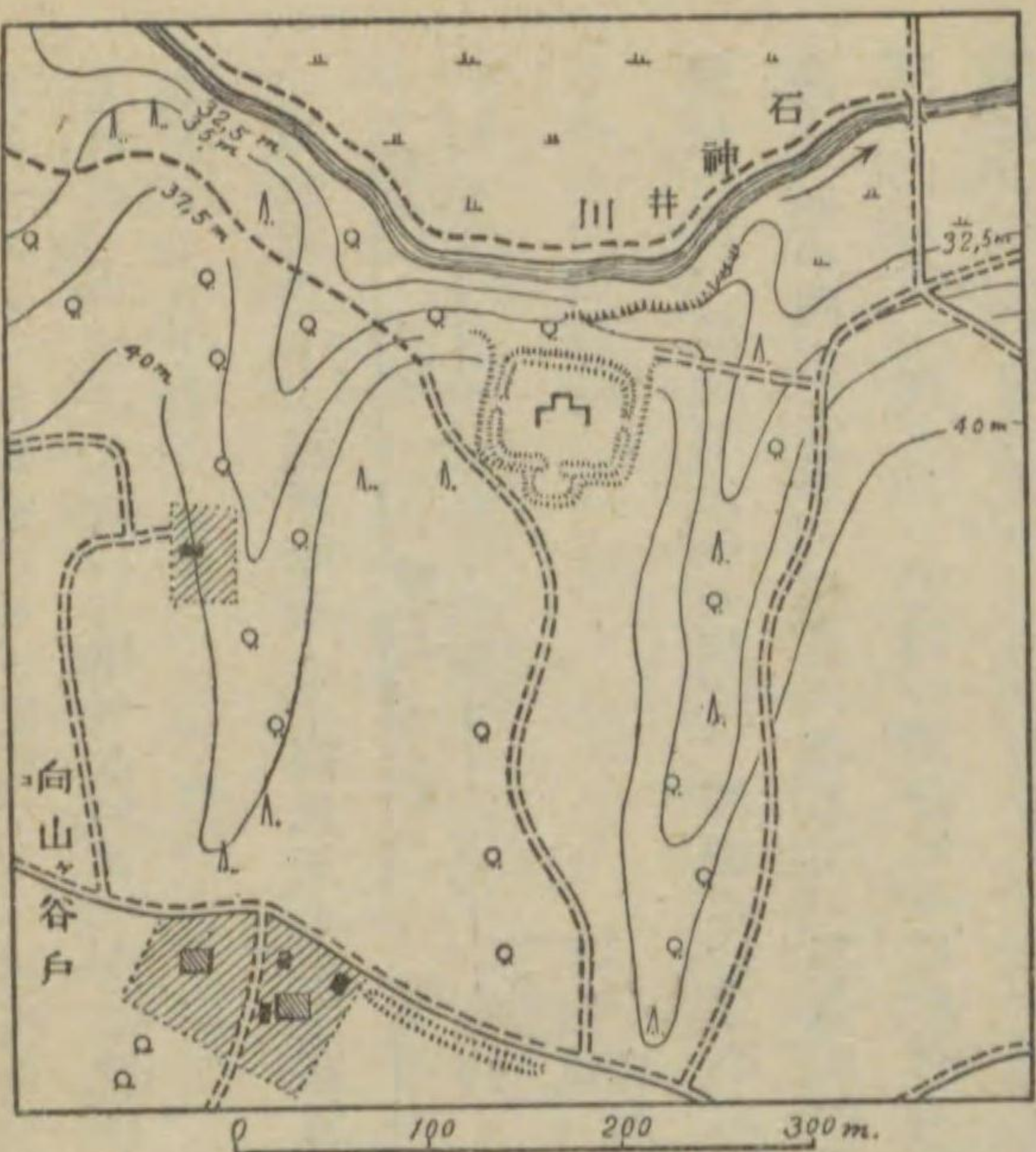
練馬城址 長命寺 石神井城址 道場寺 三寶寺 氷川神社 愛宕山砦址 千川上水

武蔵野鐵道練馬驛に下車し、驛前の道を千川上水に沿つて西すること約三町、鐵路をこえて北すれば、宇谷戸の白山神社に達する(無格社、祭神伊弉册尊)。この社の前の小堂に、可なり大きな板碑を藏して居た。練馬城址は、石神井川が最も南方へよつた所の南岸上にある。この白山神社の前を西に行くと、南北に通ずる大通りへ出る。こゝから西北方に見える最も大きな松林の邊が城址である。これをめざして大根畑の間を行けばよい。城は最近一人の邸になつた。

練馬城址

北豊島郡 上練馬村 向山ヶ谷戸 コヤマ

城址は地名によつて、一に矢ノ山城址とも呼ばれる。石神井川流域窪地帯の南方の丘陵は、上練馬村の東部では谷が楯の齒の様な形に入つて居る。城はこの一つの丘を利用したもので、東西に



圖の址城馬練 圖六十第

ある細長い谷を堀の如く用ひ、中央の丘の北端に空堀を回らしてある。これは東西四十八間、南北四十二間、長方形で、南が正面らしく、こゝに馬出しの址がある。北端は二十數尺の崖下を石神井川が流れて居る。この郭の南方二町餘の所に一凹地が東西に堀状をなして居る。これを堀跡と認めて、この間を外郭と推定したものがあつた。石神井城や志村城の例などから見れば簡單な壘濠があつたと見ても差支はない。

當城は、元弘(1331)の頃は、既に石神井に居

た豊島泰景の弟景村の居城であつたといふ。此の城が史上最も有名なのは、文明九年豊島氏が、長尾景春に與して、上杉氏の要地たる江戸・河越兩城の連絡を絶つた時である。この時、太田道